
それでも朝(あした)はきっとくるから

橙子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それでも朝はあしたきつとくるから

【Nコード】

N9427V

【作者名】

橙子

【あらすじ】

辛い過去のために、暴走族撲滅を目指して頑なに戦い続ける有川夕映（21）の前に現れたのは、単純でがさつだけれど根は優しい早坂暁（23）。初めは反発ばかりしているふたりだったけれど…？ 素直になれないふたりのラブストーリー！。

S i d e 夕 映 ・ 1 (前 書 き)

一応 R - 15 作品ですが、該当シーンが出てくるのはかなり後です。
それまではケンカップルのじゃれあいをご堪能ください (笑)

Side 夕映・1

それは、もう遠い日々。けれど、まるで昨日のことのように思い出せる。

だいぶ春めいてきた午後のこと。この春休みが終わったら、共に進級するはずだった自分たちは、春のあたたかな陽射しや花の香りに浮かれまくっていた。歩行者用信号が青になって渡っていた横断歩道の途中で、この日誕生日だった彼女が言ったことを、覚えている。

「今日はねえ、10歳の誕生日だからって、お母さんが特別なケーキを作ってくれるって言ってたんだあ。夕映ちゃんも呼んでおいでって言ってたから、夕映ちゃんも晩ご飯食べないでうちに来てね！」

「いいの？ うれしいーっ お母さんに言ってこないと……あっ あたしもね、陽香ちゃんに特別なプレゼント用意してあるんだよ、その時渡すねっ」

「わあ、ありがとうっ 何だろうー」

楽しい空気をかき乱すような爆音が響いたのは、次の瞬間のこと。不思議に思った二人は、思わずそちらを向いて……迫りくる二輪車の群れが目に入って。後は、何もわからなくなった……。

「——っ！！」

カーテンから差し込んでくるのは、眩しい朝日。窓の外から聞こえてくるのは、小鳥のさえずり……先刻までの夢と季節こそ同じではあるものの、自分の中の時間だけが違って……あの頃は、もう還ってはこないのだと、夕映に現実を思い知らせる。

ベッドから下りて、机の上に置いてあつた小さな手鏡を手にとつて、そつと顔を映す。まっすぐにおろした前髪を上げると、目に入るのは斜め気味に横一文字に入つた傷。彼女を喪つた代わりに残つた傷だつた。この傷がある限り、彼女がいらないまが夢ではないことを、未だ認めたくない夕映に痛いほどに思い知らせ、その胸に耐えがたいほどの痛みを幾度も幾度も走らせる。胸をおさえ、無意識に荒くなる呼吸を整えながら、夕映はいま一度決意を新たにさせる。

陽香ちゃん……見ててね。あなたの未来を奪つた奴ら全部、きつとこの世からなくしてやるから。私の一生を賭けてでも、きつときつと——。

そんなことは、完全には不可能だと解っている自分もどこかにいるけれど。だけど、夕映にはそうせずにはいらなかったのだ。そう誓わなければ、生きていけなかったのだ。あの、真っ白い部屋で目覚めた……彼女を永遠に喪失したことを知つた、あの日から……。

そういつものように誓いを新たにしたところで、今日は休みであったことを思い出し、夕映こと有川夕映は階下に下りていって、洗顔と食事を済ませてからまた部屋に戻って身支度を整える。肩の上で切り揃えたまっすぐな髪は、ブラシを通すとすぐにさらりと戻ってしまつて、面白味がない。陽香や現在の親友である貴絵^{きえ}くらいやわからめな髪なら、いろいろとアレンジのしようもあつただろうと思うが、持つて生まれた髪質ばかりは仕方がない。

貴絵こと山下貴絵も同じ職場ではあるが、夕映はある用事のためにわざわざ今日休みをとっていたので、貴絵は今日は出勤しているはずだ。午前中のうちにでかけて用事を済ませ、その足で街中に出て昼食を摂ってから気ままに店に入つて、商品を見て回る。

学生たちがまだ春休みのためか、街中はそれなりに人出が多い。まだ21歳だというのに、若い女の子たちがはしゃぐさまを見ると、かつて学生だった頃の自分と貴絵の姿がダブリ、何だか懐かしくなってくる。そしてそれは、遠い昔に時間を止めてしまったかつての親友と自分の幻へと姿を変えて、一瞬涙がこぼれそうになるいけない。いくらあんな夢を見たからといって、こんなところで泣きだしてもしたら、変な誤解を受けてしまう。素知らぬ顔をして人混みから離れようとしたその時、一番かけられたくない時だというのに声をかけられて驚いてしまう。

「おっ姉さーんっ どうしたの、失恋でもしちゃったの？」

「え？」

「隠さなくてもいいよ、あっちのカップルたち見て泣きそうな顔し

てたじゃん」

夕映が見ていたのは、その手前の少女たちのグループだったのだが……むしろカップルなど目に入っていなかったと言ってもいい。何か勘違いされていることに気付いて、慌てて顔の前で手のひらを振る。

「いえ、別にそんなんじゃないから」

「大丈夫だって、わかってるから」

「こんなキレイなお姉さん泣かすヤツなんか、俺たちが忘れさせてやるからさあ」

「そうそう、遊びに行こうよ」

「…っ！」

ぐいつと腕を引っ張られて、思わず前のめりになってしまふ。貴絵のようにメリハリの効いたスタイルでも人懐っこいタイプでもないのに、夕映は何故かよくこういう男たちに声をかけられる。そのたびに断るのだが、中にはこういう風にしつこいタイプもいて、逃げるのにかんりの苦勞を強いられることもあるのだ。夕映本人は真剣に理由がわかってはいないが、夕映の色白の肌に切れ長の瞳、すっと通った鼻筋に薄い唇——いわゆる和風な顔立ちはなかなかの美人の範疇に入る上に、いつもそばにいる貴絵のスタイルがずば抜けてよ過ぎるだけで、決して夕映自身のスタイルが悪い訳でもなく、むしろその脚線美は貴絵より更に素晴らしいものだというところに、本人だけが気がついていないという不幸だったりする。

そして、そんなことを夢にも思っていない夕映の腕をいま、少年たちは遠慮の欠片もなくぐいぐいと引つ張ってくる。何が「わかっている」だ、勝手なことをぬかすなと叫びかけたところで、突然に少年たちの動きが止まる。顔を見ると、たったいままでの余裕などどこへ行ったのか見るからに青ざめた顔色をしていて、笑みまで凍りついてしまったかのようにそのまま顔に張り付いている。いったい、何が起こったというのだ？ よく見ると、彼らの視線は夕映本人でなく、その背後に注がれているように見える。誰か、自分の後ろにいるのかと思って夕映が振り返るより早く、背後から伸びた腕が夕映の腕をつかんでいた少年の手を強引に薙ぎ払い——それモ夕映の身にはダメージを与えないよう、細心の注意を払ったやり方だったことに、夕映は驚嘆する。そんな器用な真似、そうそうできるものではない——夕映の身体を解放してくれる。

「……！」

夕映が振り返ってその顔を見ようとすると同時に、背後の人物が口を開く。

「……ひとの女に勝手に触ってんじゃねえよ。死にてえのか？」

低い、鋭い刃を思わせる声だった。夕映の瞳に映ったのは、声と同じ印象を抱かせる鋭い瞳が印象的な、肩を少し過ぎたくらいまで髪を伸ばした青年だった。夕映より一、二歳は年上だろうか？ 元からつり気味らしい瞳から放たれる眼光は険しく、顔立ち自体はそれなりに整っているというのに気の弱い者であつたなら声をかけることさえ憚られるような……ある意味、外見で損をしていることもあるのではないかと思わせる相手だった。

「何とか言ったらどうなんだよ。ああ？」

そんな青年がいま、背後から夕映の肩に手を置きながら告げるものだから、少年たちはもはや何も言えない様子で、ふるふると首を振る。

「い、いえっ どうもすみませんっしたーっ!!」

それだけ告げて、脱兎のごとく走り去っていく。あれだけしつこかったのが、嘘のようだ。そう思ったのは、夕映だけではなかったようで……。

「けっ 根性のねえ奴ら」

そう毒づきながら、夕映を助けてくれた青年は夕映の肩からぱつと手を離して、まだ驚愕覚めやらぬ瞳で彼を見上げる夕映を見下ろしてくる。

「あ、ああ、勝手に触って悪かったな。さっきから見てて気になったんで、ついお節介しちまった。全部が全部あだとは言わないが、たまにしつこいやツらがいるんだ、あんたも手に負えないと思ったら、大声出すなりして周りに助けを求めな」

言うだけ言っつて、青年はくるりと背を向けて去っっていこうとする。もしかして、ナンパから助けるふりをしてそのまま更にナンパしてくるタイプかとも思っていたので、何だか意外な気がして驚いてしまふ。人を見かけで判断してはいけないと、夕映自身よくわかっているというのに。

「あっ 待って……」

きちんと礼を告げていないことを思い出して、慌てて青年の後を追う。勝手に勘違いして、助けてもらったことに対する礼も告げないなんて、人として最低だと思ったから。163cmの夕映よりも20cm近く高いらしい身長の彼のコンパスはやはり長く、背後の夕映をまったく気にする様子でもない彼に追いつくのはかなり骨であったが、ふいに歩調をゆるめたのにホッとして、声を…かけようとしたのだが。青年がその前で立ち止まり、その脇にしているフツクから引つ掛かっていたものを手に取ったそれは。夕映が、嫌悪してやまないソレそのものだったのだ…！

「ん？」

青年が、みずからの背後で固まっていた夕映によく気付き、振り返る。

「あれ？ あんた、さっきの…俺、何か落とし物でもしたか？」

着ていたジャケットやジーンズのポケットに入れていたらしい物をチェックして——例のソレに乗るためか、彼は手荷物らしいものを持っていなかったの——落とし物などがなかったことに安堵したように、そうなる夕映が何故追いかけてきたのが腑に落ちないような顔で、こちらを向いてくる。

「おい？ どうかしたのか？」

「——なんて」

「え？」

「暴走族だったなんて、最低ですっ 勝手にいい人だと思い込んで

いた私が馬鹿でしたっ！」

それだけ勢いよく言いきって、夕映はきびすを返して走り出す。

「えっ！？ ちょっと待てよ、おいっ！」

背後で青年の驚いたような声が聞こえるが、夕映はもう聞く耳も持たずに走り続ける。走るには、周囲に人が多過ぎて大変ではあったが、かえってそれが功を奏したようで、青年が追ってくる気配はない。ある程度離れた場所にまで行ってから、少しずつ速度を緩めて、夕映は建物の壁に手をつけて立ち止まり、呼吸を整える。

偶然とはいえ、信頼できそうない人に出会えたと思ったのに。まさか、夕映がこの世でもっとも憎悪する人種といっていい暴走族の人間だったなんて。人を見かけで判断してはいけないと思った矢先に、まさか見た目そのままの人間だったなんて。自分の人を見る目のなさに、嫌気がさしてくる。

信じられない……いい人だと、思ったのに……っ！！

青年が前にしていたもの——それは、いかにも「走り屋」と呼ばれる人種が乗るような二輪車で、夕映が職業柄よく目にするようなチーム名らしきロゴが入ったステッカーが貼ってあるようなソレだったのだ。もちろん合わせて揃えたようなヘルメットもそれは同様で……見るだけで、心の奥底から嫌悪などとくに通り越したような憎悪しかわいてこないようなモノだったのだ。

「信つじ…られない……！」

うつむいた喉からもれでる声は、自分でも驚くほどに怒りで震えていて。こんなにも、憎しみを抑えきれない自分自身に、夕映の心は驚愕に彩られる。職務に就いている状態でなくプライベートだったからだろうか。それとも、午前中に済ませてきた用事のために気分が昂っているからだろうか。それは、夕映自身にもわからない。

許さない。絶対に許さない。

それは、あの青年個人に対しての感情ではない。今朝、そして午前中に新たにした決意を、みずからの胸の中で改めて誓ってみせる。やはり、忘れることなどではしない。どんなに時間が経っても解けない呪縛が夕映の全身全霊にからみついていて……きっと一生解けないだろうと、夕映は改めて再認識した――。

*

*

*

「ゆーえっ」

翌日の退勤時刻過ぎ。更衣室で職場の制服から私服に着替えていた夕映は、同じく着替え中の貴絵に声をかけられて振り返る。

「なあに？ 貴絵」

茶色がかったロングヘアを三つ編みにして、更にそれを後頭部のあたりで結び上げた貴絵は、いつもなら退勤と同時にそれを解くというのに今日はそのままにっていて、夕映の心の端に小さな違和感が生まれるが、大したこともないので、そちらは口に出さない。

「今日これからさ、暇ならつきあってほしいところがあるんだけど……いい？」

「構わないけど、何？ 遅くなりそうならちよつと困るけど」

「ああ、ちよつとした買い物だから、時間は大丈夫よ。ただ、ちよつと高い買い物だから、一人で見て決めるのはちよつと不安があつてさ」

互いに着替えを続けながら、会話を続ける。

「高い買い物……？」

フォーマルのスーツか何かだろうか。貴絵にはちゃんと頼りになる彼氏もいるというのにわざわざ夕映に声をかけてくるということ、同じ女同士の目から見たほうがいいものなのだろうかと夕映は思う。

「お茶でも奢るからさ」

「そんなのは別に構わないけど。そのお店？ ここから遠いの？」

「んーん、そんなに遠くないわよ。歩いて10分か15分くらいかな」

「じゃあ、バスとかに乗る必要はないわね」

職務上必要があるので、夕映も貴絵も一応普通自動車免許は持っているが、通勤手段は徒歩や自転車が多いので、遠い所にでかけるにはバスや電車が不可欠なのだ。着替えを終わらせてから、同僚たちとあいさつを交わしてから、夕映と貴絵は職場を出る。勤め始めの頃は職場の建物に出入りするだけでも緊張したものだ。いまでは警備のために立っている相手へのあいさつも手慣れたものだ。決められたあいさつの動きと言葉を交わして、二人並んで貴絵の言う通りに歩き始める。

「ねえ貴絵、いったい何を買うつもりなの？」

「ふふ、行けばわかるわよん」

貴絵とは中一からの付き合いだが、少々いたずら好きな貴絵は、時折こういう風にサプライズを仕掛けていたりする。まあ、はた迷惑なことではないのがほとんどなので、夕映もそれほど気にしてはいないのだが。

「それに、もしかすると夕映も買うかも知れないしね」

「え？ 何、もしかして中学か高校の同級生の誰かが結婚するとか？」

「えー？ 何を買うつつもりだと思ってるの？」

「彼氏じゃなくて、わざわざあたしを連れてくぐらいたから、フォーマルの高い服とかかと思っただけ、違うの？」

「ああ、そんなんじゃないわよう。あ、ほらそんなこと言ってるうちに見えてきた」

貴絵が指を差すのは、何軒か店が連なっている一角。本屋や家具屋にブティックなどが立ち並んでいて、どこに入ろうとしているのか見当もつかない。悩んでいる夕映の手首をきゅっと貴絵はつかんで、何の迷いもなくそのうちの一軒に入っていく。そこは、夕映にとってまるつきり想定範囲外の店で、驚きを隠すこともできない表情のまま、ほとんど初めて足を踏み入れていた。

「こーんにーちはーっ！」

店員の姿も見えない店内に、貴絵の明るい声が響き渡る。その声に反応して、店の奥――恐らくは住居部分につながっているであろうドアから、年配の男性が姿を現した。少々粗野に見えるくもないが、人柄は悪くなさそうな人物だった。その眼光の鋭さから、ただ者ではなさそうな雰囲気を感じだしてはいるが、ところどころ汚れた作業着を着たその人物は貴絵と夕映の姿を見るなり、相好を崩した。

「おう、貴絵ちゃんいらっしやい。今日はトオルじゃなくて、お友達と一緒に」

「はい、中学からの親友で、いまは同僚でもある有川夕映でーす」
背中を押されて貴絵のすぐ隣に並ばされた夕映は、慌てて名乗りながら頭を下げる。

「初めまして、有川と申しますっ」

「おうおう、礼儀正しいお嬢さんだなあ。貴絵ちゃんと全然タイプが違っんだなあ」

「だからこそ、ずっとうまくいつてるんですよー」

よく言われる言葉だけに、貴絵が傷ついていないか心配だったが——そういう風に言う相手に限って、夕映と貴絵を比べてはたいてい貴絵を貶めるようなことを口にするので。夕映には、それがいつも我慢ならないのだ——この人物はそういうタイプでないようなので、ホッとする。貴絵とも気心が知れているようで、仲睦まじく話しているさまはまるで旧知の知り合いのようだ。

「……で。貴絵、ここへはいつたい何をしに来たの？」

ずっと抱いていた疑問を、ここでようやく口にする。

「何だい、貴絵ちゃん、お友達には何も言わないで連れてきたのかい？」

まあ座りなと二人に椅子を勧めて、男性も向かい側の事務用らしい椅子に腰を下ろす。

「だーって、先に話していたら、夕映ってば『絶対行かないっ』って言い張りそうだったんだもの」

それはそうだろう。貴絵に有無を言わず連れてこられたここは、できることなら夕映が一生入らないでいたい場所である、二輪車専門店だったのだから！！

「黙ってたのは悪いと思うけどさー、ここは夕映が嫌うような類いのお店とは全然違うのよ？ だから、バイク屋さんだからって偏見持ってほしくなかったのよね」

「もしかして、こちらのお姉ちゃん——あ、『夕映ちゃん』って呼んでもいいかい？」

さすがに本人を目前にして愛想を悪くもできないので、夕映は肯定の意を表すためにそつと微笑んでうなずいて見せる。

「夕映ちゃんはもしかして、いわゆる族って呼ばれる連中が嫌いなのかい？」

「大っ嫌いですっ！！」

反射的に、間髪入れずに返した夕映に、男性のほうが驚いているようだった。脳裏に一瞬、幼い少女の姿がよぎる。

「私から、大切なものを奪ったヤツらなんて……一生許す気はありません」

溢れ出る憎悪を隠しもしない夕映の様子から、男性は何かを感じ取ったようで、「そうなのかい」と短く答えただけで、それ以上何も言わなかった。そして、ふいに背後を振り返って、

「おーい、茶あ三つ……お前も飲むなら四つ持ってきてくれや」

と声を張り上げた。返事は聞こえないが、奥に細君でもおられるのだろうと夕映は思った。

「それはともかく、今日はこの子にも一緒に買い物させちゃおうかなー、と思ひまして」

夕映の事情をほとんど知っている貴絵が、変な雰囲気になりかけた場を和ませるように、のんきな声を出した。

「……買い物つて何よ」

「だからあ、ここにはスクーターを買いに来たのよ。夕映も買わない？」

「はあっ!？」

何がどうしてそういう話になるのだ!? 思わず立ち上がって貴絵を見つめた夕映の前で、先ほど男性が出てきたドアが開き。盆に四つの客用らしき蓋つきの湯呑みを乗せた人物が姿を現した。

「親父、お客さんか……」

その人物の顔を見た夕映の瞳が、更に驚愕に彩られる。たったいま目前に現れた人物こそ、つい昨日夕映をナンパから救ってくれた、例の青年だったのだ――!!!

S i d e 夕 映 ・ 1 (後 書 き)

ようやく始まりました、夕映と暁の物語。

まだまだお互いを何も知らないこのふたりは、
いったいどんな物語
を紡いでいくのか？

少しずつ、ゆっくり歩んでいく予定です。

Side 暁・1

人生、いつどこで何が起こるかわからない。

そんな言葉を、早坂暁^{あきつ}はしみじみと噛みしめていた。23年生きてきて、ここまで驚いたことなどそうそうなかった気がする。

いつもと変わらぬ平日の夕刻、客から預かっていた中型バイクの整備を終えて、今日はこのへんにしておくかと思いつながらガレージから住居である棟に戻ったとたん、通りかかった母親から茶の載った盆を託され、店舗兼事務所へとやってきたところで、もう二度と会うこともないだろうと思っていた相手と再会を果たしてしまったのだから。

「あ…あなた…！」

「あんた…昨日の…？」

自分の顔を見るなり、露骨に眉をひそめる相手にムツときて、こちらも思わず顔をしかめてしまう。そもそも、暁は見ず知らずの彼女を強引なナンパから救ったというのに、謝意のひとつも表さず、勝手な先入観を抱いて罵倒の言葉を投げかけられて、更には反論の余地も与えられずに去られてしまったのだ。これで、彼女に好意を抱けというほうが無理な相談だろう。

「あんだよ、おめえこっちの娘さんを知ってんのか？」

まだ茫然としている暁の手から盆を受け取った父親が、驚きに軽く目をみはって問いかけてくる。父親と相對して話していたらしいところを見ると、父親と知り合いなのか、まさかの客なのかのどちらかなのだろう。

「昨日、ちよつと…な」

彼女にされたことを、改めて口に出すのも腹立たしい。

「夕映、暁さんのこと知ってるの？」

彼女の隣に座っていた貴絵が声をかけているのを見て、おやと思う。貴絵のほうは、父親の古い友人の息子さんの恋人ということで、最近その彼と共に店に訪れていたから、暁とも顔見知りなのだが、貴絵の友人だったとは思ってもよらなかった。こう言うのも何だが、二人はかなりタイプが違うように思えたから。

「昨日…強引なナンパから助けてもらっただけど…」

「へえっ そんなことがあったの？ ならこれから仲良くなっちゃえば？ 夕映、男友達少ないんだし、ちよつどいいじゃん」

「で、でも…暴走族の人となんて、仲良くしたくないわよっ」

やっぱりまだ誤解しているか。「夕映」と呼ばれた女性は、ほとんど吐き捨てるように言い切る。

「ちよつ 夕映、何言ってるのよっ!？」

それを聞いた父親は、実の息子への暴言を怒る訳でもなく、むしろ

る楽しそうな表情を浮かべながら、隣の椅子にどつかと腰を下ろした暁を見やってくる。

「…何だよ」

不機嫌な顔を隠しもしない暁には、まるでお構いなしだ。

「ほれ見ろ。バイクやメットにあんなもん貼ってるから、善良なお嬢さんに誤解されんじゃねえか。普段の行いが悪いからそうなんだよ、少しは反省しろ」

「何で俺が反省しなきゃなんねーんだよっ！！あのステッカーは、ただのバイク仲間で作ったツーリングチームのグッズのひとつだぞ！？『他人に迷惑をかけない』ってのを全員一致で第一信条に掲げて、交通違反だってひとつも犯しちやいねえってのに、何で俺が族なんぞと一緒にされなきゃならねえんだよっ！？」

堪えきれなくなつて、目の前にいるのが女性だということも忘れ、怒りのままに言いたいことを全部吐き出してしまっていた。普段から、自身の容姿とあいまって誤解されることが多くて、鬱憤が溜まりまくっていたのだ。目の前の夕映が驚愕のためか目をみはっているが、そんなこと知ったことか。どうせ自分に対する印象は既に最悪なんだろうから、いまさらそれが更に悪化しようが、暁にはもう知ったことではない。

そもそも、暁は暴走族というものにいい印象を抱いてはいない。暁はただ、バイクに乗って走るのが好きなだけで、意味のない暴走など何が楽しいのかわからない。あの風を切る感覚や大気と一体になったかのような感覚が好きただけなのに、わざわざ改造してよいなオプシオンをつけたり騒音をまき散らす行為や、縄張り意識に

とらわれてよそと抗争まで起こす心理はまったく理解できないものだ。ケンカが嫌いかと言われればそりゃあ決して嫌いなほうではないが、それでも意味もなくケンカを売ることもしないし、するとしたら向こうから売ってきた時や他の弱い人間を相手にいちやもんなどをつけているのを見かけた時ぐらいで、暁自身気が弱いとか長いとは決して言わないが、自分からふっかけるような真似はほとんどしない。

なのに、世間の人間は、暁の容貌やバイクやヘルメットを見ただけで先の夕映のように勝手に勝手に誤解し、嫌悪の情をあらわにする。暁でなくても、辟易するというものだ。

「ふんっ」

言いたいことを一気に言っただけで、少しは気がまぎれたので、椅子に横向きに座り直して、夕映から顔をそむける。もう、どう思われようが知ったことか。勝手に誤解して他人を罵倒する相手など、初めから仲良くするつもりもない。

「…夕映？」

貴絵の、非難を多分に含んだような声が、暁の耳に届く。その数秒後に、意外な人物の声がその場に響いたので、予想もしていなかった暁は驚いて、ほとんど無意識にそちらを向いてしまった。更に驚いたことに、視線の先で本気で恥じ入っているように顔を赤くしている夕映がそこにいた。

「私……すごい誤解をしちゃったみたいで………」

夕映はもう、表情などほとんど見えないぐらいに俯いている。暁

の言葉に、もしかして心の底から反省して、申し訳なく思っているのだろうか？

「う…ごめんなさい――」

まさか、そんな素直に謝ってくれるなんて思わなかったの、これには暁のほうが悪気を抜かれてしまって、先刻までのたぎるような怒りさえあつという間にどこかへ行ってしまったようだ。

「あ…いや、わかってくれたんなら、俺はもう全然気にしないけど……」

自分でも気が抜けているのがありありとわかるような声で、答えてしまう。

「そつえば、助けてもらったお礼もちゃんと言ってなくて……そもそもそれを伝えるために後を追ったっていうのに。頭に血が上っちゃったせいで、何も考えられなくなっちゃって…助けてくださって、ありがとうございました」

めちゃくちゃ恥ずかしそうにだったが、夕映はそれでも顔を上げて、真っ赤になってしまっている顔を隠すこともせず、暁をまつすぐに見やって言葉を紡いだ。その様子があまりにも愛らしかったの、で、暁の胸が一瞬高鳴り……どう応じていいのかわからなくて、ほとんど無意識に答えを返していた。

「あ、いや…別に礼が欲しくて助けた訳じゃないし。単に二対一で嫌がつてる女を無理に誘うような奴らが許せなかっただけで……」

それは、ほんとう。自他共に認める単純な性格をしている暁には、

そんなに深く考えて行動することなどできないのだ。成人した身でそれもどうかとも思うが、嬉しければ素直に笑い、腹が立てばまずいと思いつつもつい顔に出してしまう。客商売をする身としても、かなりよろしくないことはわかつているのだが――本人としても一応努力はしているのだが、無理に不機嫌なのを隠そうとすると、より怖い表情になってしまいうらしく、結局努力が水泡に帰したこと、も一度や二度ではない。

「誤解も解けて、和解もできたところで」

それまで黙ってふたりを見守っていた貴絵が、実に楽しそうに口を開いた。

「この際だし、お詫びも兼ねて、夕映もスクーター買わない？」

「だから、どうしてそういう話になるの！？　そもそも、貴絵は何で買おうと思ったのよ！？　家だって職場からそんなに遠くないじゃないっ」

「だって、トオルが『就職してそれなりに経つし、そろそろ自分で買えるぐらいの資金は溜まっただろ。帰りが遅くなる時とか心配だから、そういうので通勤してくれないか』って言うてくるんだもん」

『トオル』とは、暁の父の友人の息子で、貴絵の恋人である青年だ。歳が微妙に違うので、あまり親しく話したことはないが、それなりに顔見知りの相手だった。それはともかくとして、確かに自分の彼女が夜道を独りで歩くことを想像したら、彼の危惧ももつともなことといえよう。しかし。

「けどよー、貴絵ちゃんはともかく、こっちの彼女？ ホントに大丈夫なんか？ 言っちゃ悪いと思うけど、昨日のナンパを断れないトロさとか見たら、ちゃんと乗れるのかって心配になってくんだけど」

バイク屋としてせっかく売った新品のものをさっそく傷つけられるのも嫌だし、何より若い女の子に怪我をさせるのも嫌だったので思わずぼろりと本音をこぼしてしまった。すると、とたんに夕映が先刻までとはまるで違う険しい表情——昨日の別れ際ほどのものではないにしても、明らかに気分を害したとわかるようなキツイ表情をしてみせた。

「それって、あんまりにも失礼じゃないですか！？ 私のことなんて何にも知らないくせにっ」

これにはさすがに暁もムツときて、つい言い返してしまう。

「だから、『悪いと思うけど』って前置きしただろっ こっちだって客商売といえど、すぐにズタボロにしてくれそうな相手に売るのは、二輪を愛する者としてプライドが許さないんだよっ」

「実際、私の運動神経その他が鈍いかどうかも見たこともないくせに、よくもそこまで言えますねっ 先に予防線張つとけば何言ってもいいと思ってるんじゃないんですかっ！？ 物を大切にすることはいいことだと思いますけど、それで他人を傷つけるようなことを平気で言うようじゃ、ついさっきまでの私のことをどうこう言う資格なんかないじゃないですかっ！」

…何て口の減らない女だと、暁は思った。ほんのつい先刻までは、暁に対して誤解していたことを、あんなに愛らしい様子で恥じてい

たというのに。あんな風にしつこくナンパされても仕方ないぐらい、確かに美人だとさえ——「ここだけの話、少々好みのタイプかも、などと思っていたというのに。」

「……………」

ギリギリギリ…と歯ぎしりの音が聞こえてきそうなほどに歯を食いしばって、ふたりは互いに相手の顔を睨みつけ合う。彼女の身長は、ほぼ180cmの暁より15cmは確実に低そうだというのに、一歩も退かなさそうな強い意思を宿す瞳は、まるでそらされる気配はない。

「おじさん、どうしましょー？　夕映って外見に似合わず、かなり強情なんですよー」

「こいつもなあ、頭に血が上ると女相手でも怒鳴りつけたりすっからなあ。まあ、手上げるようなら俺がただじゃ済まさねえけどよ」

茶をすすりながらのん気に会話を交わす貴絵と父親の声がその場に響くが、暁は元より夕映の耳にも入っていないようだ。何と表現していいのかわからない、一種不毛ともいえる空気が数秒ほど流れた直後、店の外——それも十数メートルほど離れているらしき場所から響き渡ったのは、絹を裂くような女性の悲鳴！

「!？」

それと同時に、近付いてくるのは原付バイクのものらしき排気音。「泥棒ーっ!」「ひったくりよっ　誰かそいつら捕まえてーっ!」という大きな声が続けて響いた瞬間、貴絵と夕映が即座に動いた。貴絵は湯呑みを盆に戻すと同時に立ち上がり、夕映はそれまで睨み

合っていた暁のことなど忘れたかのようにすぐに視線をそらし、近くに立てかけてあった竹刀——父親がたまに運動不足解消を目的に素振りをするために置いてあったものだ——を手に、「ちよっとお借りします！」と言い置いて、二人は無駄など一切ない動きで店の外へと駆けだしていく。それを茫然と見送っていた暁は、ようやくハツとして、父親の顔を一瞬見ってから二人の後に続いた。

「おう暁、何する気だよ」

「決まってるだろ、ひったくりを捕まえんだよ。あのコら二人だけじゃ危ねえだろうがっ」

「ああ、そら無用な心配つてもんだ。まあ、黙って見てな」

「!？」

父親の言葉に疑問を抱きながらも、暁は数秒遅れで店の外へと飛び出していた。父親も緩慢な動作でその後に続く。そうして、二人に遅れて外に出た暁が見たものは。まるで臆することなく、自分の家の店の前で迫り来る原付バイクを待ち受けている二人の女性の姿だった！

「何やってんだ、危ねえっ！」

「おらどけよ、邪魔だ!!」

暁と、原付を運転している男が叫ぶのは、ほぼ同時だった。それでも退かず、むしろ意地でも通さないと言わんばかりに、両腕をめいっぱい広げて立ちはだかる二人に辟易してか、ほとんどギリギリでブレーキをかけて、男が原付を停める。二人を蹴散らしてすぐに

また逃げようと思っっているらしく、エンジンはかけたままで、どう見ても女性が持つようなハンドバッグを手にその後ろに乗っていたもう一人の男と共に、凶悪な顔を張りつけたまま、二人に迫ってくる。

「よけいなことをすると痛い目に遭うつてことを、教えてやるよ」

「世の中、おとなしくしてたほうがいいつてこともあるんだぜ？」

同じ男の暁から見ても、嫌悪感しかもよおさないような下卑た笑顔と声で、男たちが二人に襲いかかる！

「馬鹿、早く逃げろ！」

とつさに駆けだしかけた暁の肩を背後からつかんで、止める存在があった。誰でもない、自分の父親だ。

「黙って見てろつて言つたら」

「！？」

貴絵と夕映の表情は、冷静そのもの——恐怖のあまり固まっているのかとも思ったが、そういうことではないことは、すぐにわかった。何故なら、男の一人の片手に光るものを一瞥して、貴絵が落ち着きはらった声で夕映に対して言葉を発し、夕映も同じように落ち着きはらつて答えたからだ。

「夕映、オモチャ持つてるほうはまかせるわ」

「了解」

男が持っていたもの——小型の折りたたみナイフを広げたものが夕映に向かって繰り出された瞬間、夕映の姿は一瞬にしてその場から消え失せ、男のナイフが空を切った。

「!？」

よく見ると夕映は消えたのではなく、最小限の動きでそれ avoidance だけの話で、右手に持った竹刀の持ち手にそつと左手を添え、すぐに姿勢を正してまっすぐに背を伸ばした。

「あんたたちの言葉、そのままそっくり返してやるわよ」

その声にハッとしてそちらを向くと、貴絵がいつもとはまるで違う、相手を小馬鹿にするような……まさに鼻で笑うとしか表現のしやうのないような笑顔を浮かべ、そつとみずからの手を上げた。

「天原警察署^{あまはら}巡查、山下貴絵!!」

そのまま自分に向かって伸ばされる男の腕を横からつかみ、その勢いを利用して、みずからの背や身体全体を使って男の身体を投げ飛ばした。

「柔道二段!」

その叫びと同時に男の身体が宙を舞い、地面に叩きつけられる。男は派手な叫び声を上げた後、悶絶している。

「な……ポリ公だどっ!？」

「…っ！」

驚きを隠せない顔のままだった暁はハッとして、今度は声の聞こえてきた反対側の夕映を見やる。そこでは、夕映が無駄などまったく感じさせない動きで、何度も突き出されてくる男のナイフをかわしている光景が繰り広げられていた。

「同じく天原署巡查、有川夕映！！」

夕映が両手で握った竹刀がまるでそれ自身が意思を持っているかのように自由に動き、男の手首に振り下ろされて、その手からナイフを叩き落とした。

「剣道二段！」

いままで暁が見たこともないような凛とした表情で、夕映は告げる。痛むらしく、うめき声を上げながら手首をもう片方の手で押さえる男の前で、夕映は竹刀を手から放して。背後の貴絵を振り返り、ほとんどアイコンタクトで何かを伝え合ったようだった。

「特技その二！」

二人がほぼ同時にそれぞれの目の前の男の手首をつかみ、腕を閃かせる。そして、ほぼ同時に上がる声。

「合気道三段っ！！」

受け身をとる暇さえ与えずに男たちを地面に叩きつけ、そのままみずからの体重で抑え込むように片腕を自身の両腕でしっかりとつかんだまま、その身体に乗り上げる。

「おじさん、あたしのバッグから携帯取って！」

その言葉に従い、父親が貴絵のバッグの中から携帯を手にとつて、「邪魔だ」と言いながら暁を押しつけて表に出て、貴絵に歩み寄っていく。「そしたら、『職場』って登録してあるところに電話かけて、あたしの顔に当てて」という貴絵の言葉に従い、その通りにしたようだった。

「あ、課長ですか？ お疲れさまです、山下と有川ですが、たつたいま窃盗犯二名確保しました。至急、応援を寄越していただだけませんでしょうか。はい、場所は……」

貴絵が淡々と電話を続ける中、一部始終を目の当たりにしていた暁は、ただ茫然としていた。

ついさっきからいままで……俺の目の前で何が起こった？ 昨日の失礼な女とまた出くわしたと思つたら、実は意外に素直で誠心誠意謝ってきて……その上トロくさそうなのに周りがスクーターになんぞ乗せようとしてるから、とっさに止めたらまた食つてかかってくる。やっぱり可愛くないかもなんて思つていたら……貴絵ちゃんと二人で？ 全然ビビりもしねーでひつたくり犯の男に向かつていて？ 見事なお手並みでのしてみせて……しかも、剣道二段に合気道三段だ！？ とどめに警察官だ！？ うそ、だろう……誰か嘘だと言ってくれよ、頼むから！

あまりにも信じられない出来事の連続で、暁のキャパシティはもう限界を超えてしまっていた。いままでは主に自分に向かって使っていた、「人はみかけによらない」という言葉が、頭の中をぐるぐると回っている。

ふと目が合った夕映が、勝ち誇ったような笑みを浮かべて。前述の言葉と共に、暁の心に、強く強く焼き付いてしまった――
|。

S i d e 暁・1（後書き）

今回は暁視点で暁の内面を語ってみました。
予想外だった夕映の真実の連続。

暁、限界を超えてしまったようです（笑）

Side 夕映・2

何故こんなことになったのか。夕映にはわからなかった。自宅の庭先に駐められた白を基調とした色彩のスクーターを眺めながら、本日何度目かわからないため息をつく。

あの後——貴絵と共にひったくり犯を確保して、署からやってきた応援の人員に引き渡し、被害者である女性を託して事後処理を任せて別れた後、店主である男性に礼を言いながら竹刀を返却して、淹れ直してもらった茶を飲みながら一服していたところで、貴絵が唐突に言い出したのだ。

「……で。運動神経も反射神経も何の問題もないと証明できた訳だし、夕映はどのスクーターにする？」

「は！？」

そもそも、「スクーターがほしい」と言い出したのは貴絵のほうなのに、何故自分までつきあって購入しなければならぬのか！？
そう伝えると、貴絵はきょとした顔をしてあっさりと答えてみせた。

「トオルはあたしのことだけ心配してるんじゃないの？ 夕映のことだって同じように心配してるのよ？ 同じようにいくら家が近くて腕に覚えがあるからって、徒歩や自転車じゃいつどんな危険な目に遭うかわからないって。書類の処理で手間取ったりして、帰りが遅くなる日もあるじゃない？ それでもスクーターなら変な人に

もそうそう捕まらないし、万が一凶器とかで頭を殴られてもヘルメットがあるから安心だろって」

貴絵だけでなく、トオルにまで言われると、夕映はもう反論のしようがない。別にトオルに友情以外の感情は抱いていないが、その性格と判断力は信用しているので、純粹に恋人の貴絵のみならず自分をも心配してくれているのがわかるからだ。

……けれど。

「やっぱり…まだバイクとかには、抵抗がある…？」

夕映の過去を全部とは言わないまでも、かなり深いところまで知っている貴絵が、微妙に表情を曇らせる。いつも明るく元気な貴絵に、そんな表情をさせるのは心苦しくて、何も答えずに立ち上がり、店内に所狭しと並べられている二輪車の群れに目をやった。正直、やはりまだ見ていて気分のいいものではない。悪いのは二輪車そのものではなく、それを運転する人間の心根次第だということもわかつてはいる。あの辛い体験から十年以上経った現在だからこそ、何とかそう思えるようになった事実だった。

陽香ちゃん……私、どうしたらいい…？

答えが返る訳がないことをわかっていながら、心の中で問いかける。そんな夕映の感傷を打ち砕くかのように、無頓着そのものの声を投げかけてきたのは……それまで沈黙を守っていた暁だった。

「過去に二輪がらみで何があつたか知らないけどよー。二輪は何も悪くないんだぜ？ 何しろ自分だけじゃ動くことすらできねーんだから。結局は、それを操る人間の性根がいいか悪いかってことなんだしよ」

重々わかつていたことを駄目押しのようにつきつけられて、それまでの感傷はどこへやら、夕映の頭に一瞬にして血が上った。

「そんなことわかつてます！ それでも…頭でわかつてても気持ちがついていかないんだから、仕方ないんですっ」

それは、まぎれもない本音。世間一般に出回っている二輪車の大半はあの時のそれとは別のものだし、二輪に乗っている人間すべてが悪人でないこともわかつているけれど、それでも。あの時の恐怖は、十年経つたいまでも払拭しきれるものではないし、怒りや悲しみも忘れられるものではない。

「あー。それとも、乗るのが怖いとか？」

「え？」

心の奥底を見破られたかと思つて、一瞬どきりとする。

「チャリンコとは別もんだもんなー。スピードも段子だし、コケた時の痛みも半端ねえからなー」

「そんなんじゃないやありません！」

「どうだか」

暁の顔は、まるで他人をからかう悪ガキそのものだ。それを見た瞬間、夕映の中の負けず嫌い魂に火がついた。

「そんなに言うなら、乗って見せてやろうじゃないですかっ！ 矢でも鉄砲でも持ってらっしゃいっ」

激情のまま、そう言い放った瞬間。「にやゝっ」と人の悪い笑みを浮かべた貴絵と暁にハツとする。

「わーい、貴絵も一緒にスクーターデビューだゝ！」

「毎度ありゝ！」

「しまった」と思った時には、もう遅い。そんな訳で、貴絵と共に夕映までスクーターを購入する羽目になってしまったのだ……。

「でもさあ。交通課所属の警官として、乗ってる人の気持ちを知らずとも大事なことだと思っわよ？」

確かにそれは正論ではあるが……。

「で、夕映はどれにする？ あたし、さっきからこれ可愛いなあとか思ってたのよね」

貴絵が楽しそうに指差したのは、全体的に丸みのあるフォルムの、ショッキングピンクを基調としたスクーター。実は結構可愛いもの好きな貴絵が、いかにも気に入るようなデザインだった。貴絵はハンドルを握ってみたり、シートに座ってみたりと、なかなかご機嫌の様子だ。

「ああ、HONDAのジョルノか。若い女の子に結構人気あるんだぜ」

「お値段もお手頃だし、あたしこれにしちゃおっかなあ。夕映はどうする？」

「別に…貴絵と色違いでいいわ。シンプルなこのへんならいいかも」
そう言っただけ夕映が触れたのは、貴絵が気に入ったものの色違いで、やわらかな印象をかもしたす白のスクーター。いかにもバイク、という感じのものには乗りたくなかったので、目についた中でのできるだけシンプルでソフトな感じのものを選んだのだ。

「あ、それいいんじゃない？ 清楚な感じが夕映にぴったり」

「白かあ。どうせなら、もちっと華やかなものにしときゃいいのに」

「お客さんが選んだものに文句つけるなんざ、生意気だっつーんだ」

暁の後頭部に、店主の拳骨が飛んだ。

「いてーな、クソ親父っ！」

しかし店主は、暁には目もくれず、夕映の前に歩み寄っていく。そして、それまでとは段違いの優しい瞳で彼女を見つめながら、そつと口を開いた。

「…夕映ちゃん、俺はその気のない人を無理に寄せようなんて思っていないから、正直に言っただけなんだぞ？ ほんとうに、大丈夫なの

かい？」

「……！」

夕映の事情など何も知らないはずの店主の瞳は、すべてを見透かすような穏やかな不思議な色をたたえていて。夕映の心を、まるで波が凪いでいくように、ゆっくりと少しずつ鎮まらせていく。今日初めて会ったばかりだというのに、この人はほんとうに夕映のことを心配してくれているのだと悟った瞬間、夕映は半ば無意識に、ゆっくりとうなずいていた。

「……はい。いつまでも逃げていても、仕方ありませんから」

先刻までは、あんなにも二輪に対して抵抗感を抱いていたのに。この男性にそう静かに問われると、そんな抵抗感などささいなもののように思えてくるから不思議だ。

大切だった陽香の命と未来を奪い、自分の心と身体に決して消えない傷を負わせた二輪とその運転手はいまでも許せないし、憎くて仕方がない。けれど、だからといってずっと二輪やそれを運転する人々全体を憎んで生きていく訳にもいかないのも、また事実で。陽香の仇をとることを誓ったのも自分なら、少しずつ……自身の心の鎧を外していくことを決意したのも、また、自分なのだ。

「だから……いいんです………」

何故だろう。この男性が相手だと、穏やかに素直に本心を吐露できる気がする。

「あんだよ、二人にしかわかんねー会話してんじゃねーよっ」

… 晝相手だと論外ではあるが。

「ではおじさま、貴絵と一緒に会計… と言いたいところなんです
が、私は買う予定なんてなかったので今日はほとんど手持ちがなくな
って……」

「ああ、いいいいいよ、いつでも。まだ、登録とかいろいろやらな
きゃなんないこともあるし。二人とも警察官ならわかってるよな？」

「はい、交通課所属ですし。では後で、改めて用意してまいります」

「あ、じゃああたしも夕映と一緒に払おうかなあ。金額ほとんど一
緒でしょ？ そのほうがそっちも手間が省けるんじゃない？」

「ああ、それで構わねえよ。それまでに登録やら整備も終わらしと
くし」

そんな風にとん拍子で話が進んでしまつて、気付いた時には
すっかり購入することになっていたのだ。もちろん、トオルと同じ
ような危惧を自分の両親も抱いていたために—— 帰りが極端に
遅くなる時は、迎えに行くから電話をしろと毎度毎度言われ続けて
いたのだ—— 反対される理由もなく、スクーターの購入、乗用
についてはむしろ歓迎している感じだった。

それでも、夕映の気持ちが晴れない理由は別にある。

おじさんとおばさんは…… と思うかな。

そう思った瞬間、いても立ってもいられなくなって、夕映は立ち上がった。

「あたし……ちよつとでかけてくる」

「どこへ？ もうすぐ九時になるわよ？」

「すぐそこよ、陽香ちゃんち」

母親に言うだけ言って、夕映は返事を待たずにスクーターを押して、ゆっくりと歩きだした。エンジンもかけないしいまは乗る気もなかったので、ヘルメットもかぶらないままで歩き続ける。

陽香の家は、幼なじみだけあって夕映の家の真近くにあり、スクーターを押した状態でも二分とかわからずに着いてしまった。突然訪れた夕映に、陽香の両親は驚いたものの、すぐに笑顔でリビングへと通してくれて、茶を出してくれた。

「まあまあ、夕映ちゃん、どうしたの？ こんな急に」

陽香を亡くして以来少々年齢不相応に老けたものの、ふたりは相変わらず夕映に優しい。自分たちの娘は亡くなったのに、どうして夕映だけが助かったのか、などというような言葉を、夕映はふたりから一切聞いたことがない。夕映自身、件の事故で数日間生死の境をさまよったせいもあるのだろうが……。

「私……」

自分の口から話すと決意したにも関わらず、夕映の唇は肝心な言葉を一向に紡いではくれない。けれど、話さなければならぬことだ。正座をした膝の上でぎゅっと両手を握り締めて、夕映はバツと顔を上げて、ふたりをまっすぐに見た。

「あのっ 言い訳じみてると自分でも思うんですけどっ」

二輪によつて愛娘を亡くしたふたりの前で、無神経だと思う気持ちもあるのだけれど、自分がスクーターを買ったことを後から別の人間から伝えられて傷つけるよりは、自分の口から告げるべきだと思ったから。その結果、ふたりにどう思われようと……これだけは自分の口から伝えなければならぬと、夕映は思ったから、だから、だから、ふたりから視線をそらすことなく、包み隠さずすべてを話した。

「……………」

はあっと息をついてから、夕映は再び俯いてしまふ。伝えるべきことは、すべて伝えたと思う。あとは、ふたりの思うままにまかせしかない。たとえ軽蔑されたとしても、仕方がないと思う。自分でさえ、みずからが二輪に乗ることはいまだ抵抗があるのだ、陽香の両親であるふたりにはなおさらだろう。この際、同僚兼友人に半ば強引に勧められたことなど、何の免罪符にもならない。

「……バイクのせいであんなことになったというのに、違う種類だから大丈夫なんて、自分でもバカなことを言ってると思います。だけど……………」

「夕映ちゃん」

夕映の言いかけた言葉を遮ったのは、それまで黙って話を聞いていた陽香の父親だった。昔から夕映のことを、陽香同様実の娘のように可愛がってくれていた相手だった。

「夕映ちゃんの気持ちは、痛いほどにわかるよ。私たちだって、未だに二輪を見かけるたびに複雑な気持ちになるんだから。だけど、それと夕映ちゃんがスクーターに乗る件は、全然別の問題だよ」

「…っ！」

思わず顔を上げた夕映の瞳に映ったのは、優しく微笑むふたりの笑顔……。

「そうよ、夕映ちゃん。陽香や私たちのことをそこまで思ってくれるのは嬉しいけど、それで夜道なんかで夕映ちゃんに何かあったら、私たちはそっちのほうで悲しいわ」

「でも…！」

「そりゃあ、陽香を亡くした時は悲しかったし、すべての二輪を憎んだわ。だけど、時間が経つにつれて、そうではないことに気付いたの。夕映ちゃんと同じようにね。自分たちが大切なものを奪われたからって、世の中のすべての人間が悪い訳じゃないって、夕映ちゃんだってわかっていてるでしょう？」

「…はい……」

「それと同じよ。だから、夕映ちゃんがたとえ二輪に乗ったところで、私たちにとっての夕映ちゃんはいままでと何の変わりもなく、

陽香と同じ、可愛い娘なの」

泣くつもりなんてなかったのに。瞳から、涙がこぼれ始める。

「夕映ちゃん。夕映ちゃんは今年も、陽香の命日に墓前に花を持って参ってくれただろう？　いつも陽香が好きだった花を持ってきてくれるから、すぐわかるよ。毎年…早い時間にいつも新しい花が供えられていることに、気付いているかい？」

そういえば…夕映が訪れるのは、学生時代——それには警察学校時代も含まれる——には学校が終わってから、就職してからはできるだけその日に非番をとって、午前中だったけれど……何時に行っても、誰かが先に花を供えていて。てっきりそれは、陽香の両親が供えたものだと思っていたけれど…違うのだろうか？

「あれはね。陽香をはねた……あの時の少年が供えているものなんだよ。その彼ひとりだけじゃない。夕映ちゃんをはねた少年も、同じようにね」

「——っ！！」

「夕映ちゃんが一命をとりとめたことは知っているけれど……とてもあわせる顔がないと言って、夕映ちゃんが意識を取り戻したあの時以来、夕映ちゃんと同じように、陽香の月命日にも必ず早朝にやつてきて、墓を綺麗にして新しい花を供えてくれているんだ」

初めて聞く話だった。信じられなかった。あの真つ白い部屋で夕映が目を覚ました時、視界にまず飛び込んできたのは、瞳いっぱい涙をためた自分の両親の顔と……その後ろに控えるように立っていた陽香の両親。そして……ベッドで寝たままの夕映からも見える

ような位置で、床に頭をすりつけんばかりに土下座する、ひとりの少年の姿――。後で、それが自分をはねた二輪を運転していた少年だと聞かされた。自分が、数日間も生死の境をさまよい、生還できたのは奇跡に近い事実だったということも。そして、陽香はほとんど即死状態であつたということも……………。

「嘘だ」と叫びたかった。だけど、夕映の瞳をまっすぐ見つめる陽香の両親の瞳は、真剣そのもので――。

「私たちもね。初めは許せなかったよ。大事な娘の命も未来も…すべてを奪った相手のことを。けれど彼らは、あれ以来二輪に乗ることをやめて…人の命を助けるためのこと…看護師やヘルパーになるための勉強を始め、いまは立派に働いているんだ。それを知ったら、いつまでも憎み続けることができなくなってしまったね。悲しみは消えないけれど…許す努力をしよう。残された陽香のきょうだいたちと共に、あの子の分まで前を向いて生きようと…決めたんだよ」

もう、涙が止まらなかった。どこまで…どこまで優しいのだ、この人たちは…！

両手で顔をおおって再び俯いてしまった夕映の肩を、ふわりと包み込むあたかなぬくもり…………。

「だからね。夕映ちゃんももう、陽香のことばかりに縛られて生きていかなくていいの。陽香のことをいつまでも忘れずに、仇をとろうとして警察官にまでなってくれたというだけで、私たちはもう十分救われたから。だから、これからは…夕映ちゃん自身の幸せを考えてくれて、いいのよ。素敵なひとを見つけて、恋愛して結婚して子供を生んで…陽香の分まで、あの子ができなかったことを存

分に楽しんで幸せになってくれれば、私たちはそれで十分だから」

「おばさ……！ お、じさ……っ」

もう、言葉にならなかった。陽香の母親の胸に顔をうずめて……

陽香の父親に頭を、母親に背中をなでられながら。夕映はあれ以来――陽香を喪ったあの頃以来、初めて存分に声を上げて泣いた。まるで小さな子どものように、あの頃と何も変わることなく……泣き続けた――。

*

*

*

次の日の朝。夕映は、いつもとは比較にならないほどの晴れやかな気分で、自分のベッドの上で目覚めた。泣き過ぎたせいか、瞼が腫れぼつたくて仕方ないけれど、それでも気分は、いままでのどんな時よりも軽やかで……カーテンの外の朝日に負けないくらい、明るい光に満ち満ちていて。これまでとは違う何かを、夕映に予感させた。

いつもと同じように鏡を見るが、いつもであれば額の傷に意識がいくところなのに、今日は違っていた。

「……やだ。こんな顔じゃ、仕事に行けないじゃない！」

時計を見ると、いつもよりまだ余裕のある時間だったこともあり、タオルを数枚取り出してキッチンへと駆け込み、一枚は凍らせた保

冷剤を包み、あとのものは一枚ずつ蒸しタオルにして、交互に瞼の上に乗せる。そうやって血行をよくするといいと、聞いたことがあったのだ。

努力の甲斐あって、まだ少し腫れぼったい気はするものの何とかいつもとそれほど変わらない感じに戻ってくれたので、夕映はほうと息をつく。そうして、いつもより少なくなってしまった支度の時間で一気に身支度を整え、いつもより軽めに朝食を摂って家を出る。いくら、時間がギリギリだからと言って、警察官みずからが制限速度を守らないのではしめしがつかない。それでも何とかギリギリ一歩手前に職場に着いて、急いで着替えを済ませて帽子その他の装備を身につける。何しろどこよりも秩序を重んじる組織なのだ、だらしのない格好は許されない。

「夕映、珍しいじゃん、ギリギリなんて」

先に支度を終えていたらしい貴絵が、声をかけてくる。が、すぐに夕映の小さな異変に気付いたようで、声をひそめて問いかけてきた。

「何か… あったの……？」

「——スクーターを買ったこと、陽香ちゃんのご両親に話したの。なりゆきも、全部包み隠さず」

貴絵になら、それですべて通じるはずだった。案の定、とたんに心配そうな表情になって、夕映の手を握ってくる。

「……大丈夫、だったの……？」

貴絵を安心させるために、夕映は心からの、嘘偽りのない微笑みを見せる。

「うん。私が二輪に乗ろうがどうしようが、陽香ちゃんと同じように可愛い娘だつて……これからは、陽香ちゃんの分まで恋愛や結婚もして幸せになれつて……言ってくれたの」

「そ、か……よかったじゃん。実はトオルと一緒に、そっちのことを心配してたんだよね。もしかしくなくても、よけいなことだったかもつて」

「ううん……そんなことない。ある意味、いいきっかけだったのよ。おじさんとおばさんのいまの気持ちをすることもできたし」

「それにしても……夕映は、実のご両親の他に、もう一組素敵なご両親がいるんだね。いいなあ。結婚式の花束贈呈は、大変だこりゃ」

「貴絵つたら……相手もまだ全然いないのに、気が早過ぎよ」

言いながら、廊下を歩き所定の場所から専用の装備を持ってきていつものように貴絵と二人でミニパトに乗り込む。今日は駐車禁止車両の取り締まりの当番なのだ。

「あー、そっか。まずは相手を見つけて恋愛しなきゃなのよね、夕映の場合は」

「そうそう。貴絵とトオルくんとは違うのよ」

高校の頃からつき合っているふたりをからかうように言っただけで、そんな冷やかしには慣れている貴絵は、運転席から即座に反撃

を繰り出してきた。

「ならさー。せっかく最近知り合えたことだし、暁さんなんてどうよ？　ちよつと短気だけど、いい人じゃん」

夕映の脳裏に、現物以上に恐ろしい顔つきになって極悪非道な表情を浮かべる男性の顔がよぎった。本人が見たら、「あんまりじゃねえか!？」と叫びだしそうなほどの悪辣さだ。

「じよ、冗談やめてよっ　私は、もっと優しい人が好みなのっ!!」

貴絵の笑い声が、春の空に響き渡った……………。

S i d e 夕 映 ・ 2 (後 書 き)

大切なのは、過去か未来か……。

今回は、夕映の葛藤にスポットを当ててみました。すべてとは言いませんが、時間はある程度の傷は癒してくれます。夕映もこれからは、未来を見据えて歩いていけそうです。

そして、今回こそは出番が回ってくるかと思っていたトオル…時間切れのため、また次回に（苦笑）

Side 暁・2

少しずつ、暖かさを増していく春のある日。

「お久しぶりです、暁さん」

実家でもある二輪車専門店のガレージで客の二輪の整備をしていた暁は、唐突にかけられた声に思わず顔を上げる。そこに立っていたのは、やわらかそうな茶色の髪の毛、眼鏡がよく似合うインテリ風の青年だった。見覚えは、これ以上ないというほどある。

「あれ、トオルくんじゃんっ 珍しいな、こっちに来るなんて」

父の友人の息子であるトオルこと志野田達^{しのだとおる}は、暁より二歳ほど歳が下で、妹しかいない暁にとってはまるで弟のような存在だった。二輪に乗らないために店のほうには滅多にやってこないというのに、珍しく顔を出した弟分に、暁の表情も自然にほころぶ。高校を卒業してからほとんどすぐ整備工に就職した暁と違い、検事が弁護士になるためにそこそこのレベルの大学に入学した達は、見た目と等しく中身もなかなかの秀才だが、暁とは昔から何故だかウマが合うのだ。

「いや、最近貴絵がお世話になったと聞いたもんで」

「あー、貴絵ちゃんな、売上にご協力いただいてあざーすっ」

達が高校時代からつきあっている彼女だという貴絵は、暁と性格的にタイプが似ているらしく、初めて会った頃から意気投合してし

まって、達を驚かせたこともある。

「しかし、貴絵はともかく、夕映ちゃんまで買うと思ってなかったんで、話を聞いた時には驚きましたよ」

夕映、という名を聞いて、暁の眉が一瞬ぴくりと動いてしまう。

確かに彼女にも商品をお買い上げいただいたが、いかんせん第一印象が最悪過ぎた。その後、暁の内面を知ってちゃんと謝ってはくれたものの……どうも貴絵の時のように、打ち解けられないのだ。悪いコではないと思うのだけど。

「ああ、彼女との出会いの話も聞きましたよ。なかなかユニークな出会いだったようで」

「…思い出させねーでくれや、いまでも腹立つんだから」

「でも、彼女も一見とっつきにくそうに見えて根はいいコだから、仲良くなれそうでしょ？」

「あー……」

他人事だと思つてのん気なことを言ってくれと、暁はそつと思つ。

「そついやあ……トオルくんも彼女と知り合いなのか？ 貴絵ちゃんとは同僚だつて聞いてるけど」

「中学・高校と一緒だったんですよ。親しくなったのは、高校に入ってからですけど」

「へえ…彼女さ、昔からああいう性格なんか？」

「と、言いますと？」

「いや…族と聞いたらすんげー勢いで罵倒するような、さ」

いくら交通課の婦警で真面目な性格といっても、あれはちょっと行き過ぎではないかと思うのだ。

「ああ……彼女は、二輪…というか暴走族にトラウマを持っているから………」

トラウマ？ 偏見とかでなくて？ それ以上は自分が言うべきことではないとも思っているのか、達はその先を語ることは決してなかった。

ちょうど整備が一段落ついたこともあって、「茶でも入れようか」と言いながら暁が立ち上がりかけたところで、脇からかけられる声。

「もしかしたら、ふたつ追加かも知んねえぞ」

机に向かって書類整理をしていた父親だった。

「え？」

自分の背後を顎で示す父親の視線を追って、振り返った暁の視界に飛び込んできたのは、店の駐車場に乗り入れてくるミニパト。運転をしているのは、いままさに噂に出ていた貴絵で……その助手席に乗っている夕映は、厳しい表情で何ごとかを貴絵に訴えているようだったが、貴絵は涼しい顔でそのまま駐車場にミニパトを停車さ

せて、シートベルトを外して運転席から降りてくる。

「どおもーっ　ちょうど通りかかったらトオルの姿も見えたから、
つついっ寄っちやいましたー」

けろっつと言っ貴絵は、きちんと警察官の制服を着ているにも
関わらず、現役警察官には見えづらい。身も蓋もない言い方をすれ
ば、まるで婦警のコスプレをしている一般女性のようなのだ。

「貴絵！　いまはまだ勤務中なんだから、ダメだつて言ってるでし
よう！？」

たしなめるような口調と表情で助手席から降りてくる夕映も、も
しろん制服を着用しているが、こちらはその全身から醸し出す雰囲気
その他からかちゃんと婦警に見える。というより、二人の制服姿
を見たのはこれが初めてであったことに、暁はいまさらながらに気
づく。

ああ、そういえば……あっちのコはともかく、貴絵ちゃんの見
たことなかったなあ。みんな同じ制服だったのに、スタイルがいい
からかなあ、グラビアアイドルかなんかみてーだ。んでも……。

「まあまあ、夕映。後は署に戻るだけだし、ちよつとぐらいいいじ
やない」

「そっいう『ちよつとぐらい』なんて意識がエスカレートして、不

祥事に結びついちゃったりするのよっ」

「まあまあ、夕映ちゃん落ち着いて。こいつには俺からもよく言っとくから」

「あーっ トオルの裏切り者ーっ」

そんな三人のやりとりをじっと見ていた暁は、ちょうど目の高さにあったそれを見つめながら、ぽつりと呟く。

「……キレーな脚してんなあ」

ほとんど無意識に呟いた言葉に、目前の三人の動きが止まった。

いままでは、長いスカートをはいているところしか見たことがなかったから、今日初めてほぼ膝丈のスカートをはいているのを見たらかたか珍しくなって——しかもご丁寧に脚がよく見えるような肌色のストッキングをはいているので、ついしげしげと見つめてしまっていたのだ。ちょうど暁の目の高さにあったせいもあるが、実は暁は女性の脚フェチともいえる嗜好の持ち主だったので、つい熱心に視線を注いでしまったということも否定できない。

「な……いきなり何言い出すんですか、セクハラですよ、セクハラっ！——」

明らかに、先刻までとは違う様子で——ハッキリ言ってしまうえば、羞恥心全開で顔を真っ赤にして、両手で脚を隠すようにして夕映が叫ぶ。

「んなこと言ったって、しょーがねーじゃん。ちょうど目の高さに

あるし、俺がすすんでスカートをめくったりした訳でもなくて、自分でんな丈のスカートはいてんだから、見てくれと言わんばかりじゃねーかつ」

「好きではいてる訳じゃありませんっ 制服なんだから、仕方ないじゃないですかっ」

「だーかーらー、こっちも仕方ねえって言ってんだろー。だいたい、もともとこのポーズでいる俺の目の前にやってきたのはそっちじゃねーか。俺が文句言われる筋合いはねーな」

「お、思うのは勝手だけど、それを本人の前で口にするのが問題なんですっっ」

口調は厳しいままだが、夕映の顔はもう噴火寸前というほどに真っ赤に染まっていて、もしかしてこのコはあまり男慣れしていないのかもな、などと暁は思った。

「べつつにいいじゃん、夕映。けなされてる訳でもなく、褒められてるんだし。実際、夕映の脚ってすごい綺麗だとあたしも思うわよ？ 私服でももっと脚を見せるような服を着ればいいのに」

「……っ！」

暁に続いた貴絵の言葉に、夕映はもう絶句寸前だ。

「わ…わたし、もう署に戻りますっ 貴絵、いい加減にしないと置いていくわよ！」

それだけ言い置いて、夕映は慌ただしくミニパトの運転席へと駆

け込んでいく。

「あつ　待つてよ、夕映ーっ　というワケで、みんなまたねっっ」

置いていかれちゃたらまらんとばかりに、貴絵はその後を追いかけて助手席に乗り込んで手をひらひらと振っている。そのとたん、ミニパトが急発進したので、シートベルトをまだしていなかった貴絵の身体が、座席の上で豪快に体勢を崩したので、その場に残された三人は思いきり笑ってしまった。

「……ほら、ね？　案外可愛いところもあるでしょう？」

達が誰を指して言っているのかは、暁にも訊かずともわかった。確かに、可愛いといえば可愛いし、あれだけウブなら異性としてちよっかいでもかけてみたらどんな反応が返るのか楽しみなような気もする。そこまで考えて、暁はハツとする。

べ、別に俺は、ああいうタイプは好みじゃねえってのに、何考えでんだよっ　俺が好きなのは、もっとノリのいい大人の女だっつのよ。

誰に言うでもなく言い訳めいたことを考えながら立ち上がった暁は、その背後で達が意味深げな表情で自分を見つめていることにも、まったく気付けないままであった。

*

*

*

それから二日ほど経ったある日。実家の近所にアパートを借りて一人暮らしをしている暁は、仕事の後夕飯の買い物をするべく帰る途中のスーパーへと立ち寄っていた。多少は料理も作れないことはないが、面倒だし弁当か惣菜でも買おうかなどと考えながら中を歩いていて、曲がりかけた通路の手前で、思わず驚いてしまう存在を発見して、つい足を止めてしまう。別にやましいことなど何もないのに。

それは、スーパーの備え付けのカゴを持った達と、貴絵ではなく夕映の姿。親しいとは聞いていたが、何だか珍しい組み合わせのような気がして、つい様子をうかがってしまう。二人は目の前の調味料の棚を見ながら、ひとつふたつ商品を手にとって会話しているようだった。何を話しているのかまではわからないが、楽しそうなその様子が、暁の心を何となくざわめかせる。

…何だよ。俺の前ではあんなキツツい顔しか見せねえくせに、他の男の前ではあんなに簡単に笑うのかよ。

達とは中高生からのつきあいだというし、親友の彼氏ともなれば、つい最近最悪の出会いを果たした暁とではそりゃあ比較にならないのはわかっているが、それでも何となく面白くない。暁自身にも、

理由はよくわかっていないのに。

そんなことを考えていたから、背後から近付いてくる存在に、まるで気付かなかった。いつもなら、もっと早く気付くというのに。

「あーきらさんっ 何やってんの？」

背後から突然肩を叩かれて、暁は不覚にも口から心臓が飛び出しそうなくらい驚いてしまった。

「あ、ああ、貴絵ちゃんかつ」

「何見て……ああ」

何も答えないのに、暁が見ていたものに気付いたらしい貴絵は、いつもと変わらない明るい笑顔で暁の手を引っ張りながら、二人のほうへと近付いていく。

「あれ？ 暁さん？」

「いまそこで見つけちゃったから、連れて来ちゃったー」

「よ、よう……」

やましいことは何も無いはずなのに、何となく居心地が悪い。

「暁さんも夕飯の買い物ですか？ そういえば、この近所で一人暮らしされてるんですね」

「えっ そうなの？」

貴絵が、どんぐりまなこを更に丸くする。

「あつ　じゃあさ、ねえ夕映、今夜は暁さんも招待しちゃう？
三人分作るのも四人分作るのも大して変わんないでしょ？」

いったい何の話だ？

「き、貴絵っ　急に失礼よっ　こちらにだってご予定があるかも知れないのにつっ」

「暁さん、今日これから予定ある？」

「いや…メシ食って風呂入って適当にくつろぐくらいか」

訳がわからないまま、素直に貴絵の問いに答えると、夕映の顔が目に見えて曇りだした。

「今日ねえ、夕映の家の人誰もいないって言うから、これから夕映の家に行って、ご飯作ってみんなで食べようって話してたんですよ。よかつたら暁さんも来てくださいよー」

「き、貴絵っ」

夕映の、たしなめるような声。その響きが、何となく暁の気に障った。

何だよ。そんなに俺には来てほしくねーのかよ。

そう思った瞬間、暁の唇が意図せず言葉を紡いでいた。

「構わないぜ、どうせ暇だし。手作りのメシを食わせてくれるってんなら、喜んでご相伴にあずかりたいところだな」

そう答えたとたんに夕映の表情が焦り出したように見えたので、暁は何となく胸がすく思いを感じていた。そんなに関心することが嫌なのなら、それを逆手にとってとことん嫌がらせをしてやろうではないかと。それは、小学生の男児が気になる女の子に抱く感情と何ら変わらないものだということに、暁自身まるで気付いていなかった。これまでそれなりに恋愛経験があるにも関わらず、だ。それまでの相手の中に、夕映のようなタイプがいなかったせいかも知れないが。

「ね？ 夕映、暁さんもそう言ってるんだし、たまには一人暮らしの男性にあつたかい家庭の味を味合わせてあげたいとか思わない？」

貴絵の駄目押しが効いたのか、不承不承といった感じではあるが、夕映も最後にはうなずかざるを得なくなったようで、了承の言葉を返してきた。

「よかったねー、トオル♪ いくら親しいあたしたちだって、やっぱりよく知ってる男友達も一緒のほうがいいでしょ？」

「まあ…な」

本気で喜んでいる風の貴絵に対して、達は何か思うところがある

ような表情だ。

それから、好みなどを簡単に訊かれ、買い物を済ませてスーパーを後にする。

「じゃあ、買った物はあたしと夕映のメットインのところにに入れて持っていくから、タオルは暁さんの後ろに乗っけてもらって、夕映の家までナビしてってあげてね」

貴絵の提案に沿って、貴絵と夕映は先日買ったばかりのスクーターに乗って先に行ってしまった。世の中の他のスクーター乗りに比べて走る速度が遅い気もするが、そもそも原付は法定速度が時速30kmで、二人はそれを順守すべき交通課の婦警なのだからそれも納得のことといえよう。

「さて…俺らも行くか。あんまり速く走っても二人より先に着いちまうから、のんびり行こうぜ。そのほうがナビもしやすいだろ。よろしくな、タオルくん」

いつも愛車に載せている予備のヘルメットを達に渡してから、暁はエンジンをかける。

「はい」

メットをかぶって、後部座席に達がちゃんと乗り込んだのを確認してから、再び口を開く。

「で？ 例の彼女の家はどのへんだって？」

「T町のほうですよ。ほら、最近新装開店したコンビニの近く」

「前は道の向かい側にあったヤツが移転したヤツか？」

「そうです、こっちから行ったら、あの新しいほうの手前で左に曲がってちよつとのことですよ」

「ああ、わかった。あのへん住宅街だもんな」

達には両腕でしっかり自分につかまらせてから、暁は愛車のアクセルをふかし、発進させる。頭の中には地図を思い描き、達が告げたあたりの風景を脳裏によみがえらせながら。

あんまり先に着き過ぎても仕方ないし、交通課の現役婦警なら簡単に走行速度を割り出しそうな気もするので、いつもより少々大人しめのスピードで慎重に運転して——でなくても将来有望な検事が弁護士のお卵を後ろに乗せているのだ、無茶な運転をして怪我などさせる訳にもいかない——進む暁の背後から、声が聞こえてきた気がした。

「あ？ いま何か言ったか？」

赤信号で止まった際に振り返って訊いてみたが、達は「何も言つてませんよ」と答えるだけだ。気のせいにしてはヤケにハツキリ聞こえた気がしたが——内容はさっぱりわからなかったが——達が言っていないというのならそうなのだろう。何となく納得のいかない思いを抱えながら、信号が青になるのを見届けてからアクセルをふかす。達がメットの中で再び呟いた言葉に、今度はまるつきり気付かぬままで。

「暁さんって。結構天の邪鬼ですよね」

暁は、何も知らない――。

達に教えられてたどり着いた夕映の家は、予想通り立派な一戸建ての家で。いかにもごく普通の中流家庭の娘だということを、暁にしみじみと実感させた。

あの性格からして、よっぽどお堅い家の娘かと思ってたぜ。

「はい、いらっしゃーいっ 調理にはもう取りかかってるから、二人はそのへんに適当に座っててねー」

貴絵に促されるまま上がって、リビングへと通される。

「貴絵、お前まるで自分ちみたいにふるまうなよ」

苦笑いしながら言う達に、貴絵は「勝手知ったる他人の家よ」と素知らぬ顔だ。そんなふたりの会話も耳に入っていない暁の目に映ったのは、小学校中学年くらいの少女が二人並んで笑顔で写っている写真の入っているフォトフレーム。片方はいまも面影を残しているから夕映本人に間違いないが、もう一人はどう見ても知らない顔だった。貴絵とは似ても似つかない顔立ちをしているし、貴絵と夕映は中学からの仲だと聞いているから、貴絵ではないのだろうが……ほんのささやかな、何気ない日常の一部を映したらしい写真なのに。何故か暁の心にいつまでも残って、消えることはなかった――

1.

Side 暁・2（後書き）

ようやく達^{トオル}登場です（そこかい！（笑））
少しずつ近付いていく、暁と夕映の距離？
心の距離はまだまだ遠いようですけれど。

Side 夕映・3

どうしてこんなことになったのだろう。

以前思った疑問を、夕映は再び胸に思い浮かべる。「今晚は一人で夕食だ」と話したとたん、貴絵が「ならトオルも呼んで、みんなでご飯食べようよ」と言ってきたのに快諾したはいいが、先日最悪の出会いを果たしたばかりの相手までついてくるなんて、夢にも思っていなかったからだ。

最初に抱いた嫌悪感は誤解とわかってからは既にないが、つい最近言われた言葉が夕映の羞恥心を刺激して、彼の前ではどんな顔をしていいかわからないのだ。

『……キレーな脚してんなあ』

あんな言葉、男性に言われたのは初めてだった。同性には何度も言われたことはあるが、それは女の子同士の単なる社交辞令のようなものだと思っていたし、そもそも男性と友人以上のつきあいなどしたことのない夕映には、十分恋愛対象になり得る同年代の男性にそういうことを言われるのがこんなに恥ずかしいことだなんて、思ってもみなかったのだ——暁を恋愛対象として見られるかどうかは別として、だ。だから、暁や達より先に家に着いてから、貴絵と買ってきた食材をとりあえず袋から出して、「動きやすい服に着替えてくる」と言って自室に入った時には、脚が見える服を着るの

が恥ずかしくて、迷わずジーンズを手を取っていた。普段はそんなに好んで着る訳でもないのに。だから。

「あれ、珍しいね、ジーンズなんて」

「う、うん、やっぱり動きやすいしね」

貴絵に指摘された時も、曖昧に微笑んでごまかしてしまった。そういう貴絵も、下ろすと軽くウエーブのかかった風になる長い髪を軽く束ねていて、仕事中とは別人のようだ。

下ごしらえを始めたところで、外から聞こえてくる、スクーターとはまるで違う排気音。暁たちが到着したのだろう。

「あ、トオルたちが着いたみたいね」

いつも父親が車を駐めている場所が今日は空いているから、駐める場所には困らないはずだ。それでも一応出迎えには行かなければならないかと思っただが、先に貴絵が行ったので大丈夫だろう。そのまま夕映は下ごしらえを続け、三人がやってくるのを待つ。

「お邪魔しまーす」

楽しそうに話しながら、低い声の主が入ってくるのを耳で聞きながら、振り返る。

「いらっしゃい、リビングの適当なところに座って待っててくださいね」

「何か手伝おうか？」

「大丈夫、女が二人もいるんだし」

遠慮深げに提案してくる達に答えながらそちらを見ると、意外そうな表情を浮かべている暁とふと目が合つて、何となく気まずさを覚えて視線をそらそうとしたところで、一瞬不思議な表情をされて――驚いたような、怪訝そうな……？ けれど、別に気分を害した訳でもないような、奇妙な表情だった。

なに？ なんなの？ 私、何かした？

そうは思つても、まさか暁本人に訊けるはずもなく、暁のほうに先に目をそらされてしまい、夕映はどうしていいのかわからなくなつてしまった。

「夕映？ どうしたの？」

先にキッチンに戻っていたらしい貴絵に、背後から声をかけられてハッとする。

「あ…何でもないわ」

いったい何がどうしたのかさっぱりわからないが……確かめようもないものは仕方なく、夕映も気を取り直して、調理の続きに戻ることにした。

「貴絵、もうお肉切った？」

「あ、いま切ってるー。夕映、スープの味見てくれない？ あたし
が作るとどうも大雑把な味になっちゃうらしくてさー、弟たちもト
オルもうるさいのよねー」

「お前の味覚が大雑把なんだって」

達も呆れ顔だが、何だかんだ言ってこのふたりも長く続いている
のだから、波長が合っているのだろーなと夕映は思う。

「どれどれ」

お玉から小皿にとって味を試みるけれど、確かに大雑把な味わ
いだ。悪くはないけれど、何にでも大らかな貴絵の性格が表れてい
る気がして、何となく笑えてくる。

「何笑ってんのよー」

「何でもないわよー。…もう少し塩コショウを入れてみたらいいん
じゃないかしら」

言いながら腰を落として、流しの下収納から塩コショウの容器
を取り出してから、再び立ち上がる。そのまま料理の話に夢中にな
ってしまったから、そんな自分を背後から見つめている存在がいる
ことになど、まったく気付かなかった。後でそれを知って、夕映本
人はめちゃくちゃ恥ずかしい思いを味わうことになるのだが、それ
はまた別の話。

「そっち、どう？」

「んー、後はお皿に盛り付けるだけかな」

「そう、じゃあお皿出してくるわね……」

言いながら、夕映がくると振り返って、歩きだそうとした瞬間。夕映の足元に目をやった貴絵の表情が一瞬にして凍りついた。それに気付いた夕映がどうしたのかと問いかけるより早く、貴絵が切羽詰まった声を上げた。

「ゆ…夕映っ あ…んたの、足元…っ」

「え？」

夕映がはいっている愛用のグリーンのスリッパのそばにあった――否、いたのは。一瞬ボタンかと見まがうような、黒光りする物体……。

「ゆ…ゆゆゆゆっ」

「お、落ち着くのよ、貴絵っ 警察学校で習ったじゃない、人質をとつて犯人の対処法っ あ、あれと同じよっ」

いくら武芸に秀でているといっても、多少のことでは動じない精神力を身につけたといっても、プライベートでは二人とも普通の女の子なのだ。突発的な、女の子が基本的に苦手としている弱点まで、克服しきれた訳でもない。それでも、何とか動揺を最低限に抑えて、できるだけ冷静に二人は会話を交わす。

「な、なるべく刺激しないように、できるだけ静かな動きと声音で

行動する、だっけ」

「そ、そう。ちょっと…待ってて。いま、道具取ってくるから……」

道具、とは蠅たたきのことだが、「武器」と言いたいところをそう呼んだのは、とにかく相手を刺激しないため、だ。ゆっくりと…そろりそろりと足を動かしながら、足元のソレから視線をそらさないようにして、後ずさるようにキッチンとリビングとの境目へと向かう。蠅たたきは、いつもそのへんに置いてあるのだ。

少しずつ…ゆっくりと後ずさりながら、残りの距離を推測する。もう少し…もう少しだけ後ろに下がれば、蠅たたきのある場所にまでたどり着けるはずだ。そう思いながら、剣道で行うすり足のごとく進んでいた夕映の肩が、固い何かにぶつかってそれ以上進めなくなる。

「!？」

えっ 何っ!？ あたしまっすぐ下がってきたわよね、前に見える風景からしてこんなところに壁や家具はないはずだけどっ なの
に何でこんなところに障害物があるの!？

焦りを覚えながらも、何とか冷静に障害物の正体を見極めるために振り返りかけた夕映の目前で、先刻まで自分がいた位置のすぐそばにいたはずのソレが、こちらに向かって動き出し始めたのが見えたっ！

「やだうそ、こっちこないでよ、ばかーっ！　ちょ、何よこれ、邪魔よ……」

障害物を確認するより早く、こちらに向かって迫ってくる黒い物体に、夕映はもうパニック寸前だ。普段の彼女からはめつたに出ないであろう切羽詰まった悲鳴にも近い声を上げながら、後方の障害物を押して退かそうとするが、びくもしない。前方と後方と、どちらを見ていいかわからず、あたふたと焦り始めた夕映の身体が、ふいに宙に浮いて……何が起ったのかと思っっているうちに、黒いソレはスリッパをはいた夕映のものではない別の誰かの足の間を通り抜けて、その後方へと走り抜ける。足の主はまるで動じていないのか、動く気配すら見せなくて。

え……誰これ、もしかしてトオルくん？　なら冷静なのもうなずけるか、な……。

夕映がそう思いながら、普段より高くなった視線の先、夕映を抱き上げているらしい誰かの肩越しにその背後を見やったとたん、夕映の腰をつかんでいる誰かが唐突に叫んだ。

「まかせた！」

「はいっ……！」

それと同時に、棒状に丸めた新聞紙で黒い物体を思いきりたく、

誰かの姿。その茶色い髪には、見覚えは山ほどあつて……。夕映の視線に気付いたのか、夕映にとっての恐ろしい敵を仕留めてくれた相手が、笑顔で顔を上げる。

「あ、安心してくれ。コレは夕映ちゃんちの新聞じゃなくて、暁さんが読み終わったスポーツ新聞だから」

夕映の言いたいことはそういうことではなくて……。達がそこにいるということは、自分を恐らく抱え上げているこの人物はいつたい……？

「……しっかし軽いな。ちゃんとメシ食ってんのか？ 警察官なんて特に体力勝負の職業だろ？」

眼下から聞こえてくる声に、思わず視線を落とすと。そちらからまっすぐこちらの顔を覗き込んでくるのは、鋭い双眸の男性で――。

「……………」

夕映の細腰に巻きつくように回されているのは、力強い二本の腕で。その腕が、夕映の身体全体を何の苦もなさそうに抱え上げて、床から十何センチも離れている地点で留まっている。

え……これって…どういう状況――？

だんだんと冷静になった思考回路が再び働き始めて、夕映はいまになってようやく、自分が現在置かれている状況に気付いた。

「きゃああああっ！ 下ろしてっ 下ろしてくださいっ！！」

自分でも、信じられないほどの声が出てしまった。

「ひとの耳元でいきなりんなデカい声出すなっ！ 下ろしやいいんだろっ」

いらつきを多分に含んだ声の主が、口調とは裏腹に信じられないぐらいの丁重さで、夕映の身体をそつと下ろしてくれる。

「ゴキにビビるなんて女の子らしくて可愛いかと思いきや……あー、やっぱり可愛くねえ」

これにはさすがに夕映もムツとした。

「可愛くなくてすみませんでしたねっ」

が、ティッシュを何枚にも重ねて例のモノの後始末をしている達が見界の端に入ったとたん、一瞬冷静になる。

「でも……助けてくれて、ありがとうございました……………」

さっきのいまでいきなり素直になるのは、何だか恥ずかし過ぎて、つい語尾を濁して言いながら振り返ってしまったから。その背後で、暁がどんな表情を浮かべているのかは、わからない。

「さ、さあ貴絵、残りを片付けちゃいましょっつ」

言いながらパタパタと流しのほうへと戻って、調理の続きを再開する。貴絵はというと、何となく意味深な笑顔を浮かべているので、どうも居心地が悪い。

「…何よ」

「んー？　べつつに〜」

まったく、意味がわからない。

それから間もなくして夕食も出来上がって、テーブルへと並べ始める。

「はい、できましたよ。集合集合っ」

貴絵の声に反応してやってきた男どもが、テーブルの上で所狭しと並んだ料理を見て歓声を上げた。

「おーっ　すげー、美味そうじゃん」

「さすがに夕映ちゃんと一緒に作れば、貴絵の料理も繊細に見えるな」

「ちょっとトオル、それどういう意味!？」

貴絵も自覚があるのか、顔と声は半ば笑っている。人数分のスープレスを盆に載せて夕映がテーブルにやってきた時には、既に三人は席についていて、夕映が座る席は貴絵の隣。暁の真面目がなく、さすがにさっきの出来事の直後では何となく気まずいが、他に空い

ていないのだから仕方がない。なるべく平静を装って、席につく。

「それでは。いったきまーすっ」

貴絵の声を号令にして、皆で食前のあいさつを述べてから食事を始める。男性陣はさすがに腹を空かせていたのか、スピードがこちらの二人とは段違いだったので、夕映は驚いてしまった。夕映にも兄はいるが、成長期の頃もここまで食欲旺盛でなかった気がする。

そのうちに、かけられる声。

「これ美味しいな。こんな、初めて食ったよ」

暁の声だった。

「ああそれ、夕映が作ったの。昔からの得意料理なのよねー」

貴絵が答えると同時に暁がこちらを向いたので、一瞬どきりとしてしまう。

「へー。意外に料理上手いんだな、見直した」

「い、意外って何ですかっ」

「褒めてんだから、素直に受け取れよ。ったく……」

先刻告げた礼が耳に届いていたのか、今度は暁も「可愛くない」とは言わなかった。その事実が、夕映の心をますます落ち着かなくさせる。何故なのかは、自分でもわからないのに。

「可愛くない」なんて……いままでだって、さんざん言われてきた言葉なのに。何でこの人に言われると、いまさら胸が痛くなるんだろう――。

いままで言われたのは、ほとんどがプライベートの時ではないという事実にも、夕映自身まだ気付いていなかった。もしこの時気付いていたとしても、やはり理由がわからなくて悶々とするのには間違いなかっただろうが……。

「そっぴいあ。家の人がないって、ご両親はともかく、きょうだいかもいないのか？」

唐突に、普通の世間話を振られたので驚いてしまう。

「兄と姉がいるにはいるんですけど……兄のほうは就職してから一人暮らしを始めて、姉はチャンスとばかりに彼氏の家に泊まりに行っちゃって」

「ならあんたも彼氏のところでも行っちゃえばよかったのに」

「そ……そんな真似、できますかっ」

「暁さん暁さん、夕映ってばフリーだから、そんな相手もいないんですよー」

夕映はそういう意味で言ったのではないのだが……貴絵が見当違

いなフォローを入れる。

「暁さんもしフリーだったんなら、このコなんてどうです？
すれてなくてお買い得ですよー」

お…「お買い得」とは何たる言い草だ！

「いやあ、やめとくわ。女の子としてはかなりいい線いってるとは
思うけど、バイク乗るたびにスピードやら何やら監視されるのはち
っと…なあ」

「あ、それはやりそう」

けらけらけらと貴絵が笑う。

「おい貴絵、本人の意思を訊きもしないで話を進めるなつての。お
前は見合いを仕切りたがる親戚のお婆はんか」

「お婆はんつて何よーっ」

「そうにしか見えないつての」

そのまま貴絵は達と軽口の応酬に入ってしまったって、夕映たちのこ
とをすっかり忘れてくれたようなので、夕映はほうと安堵の息をつ
く。

陽香の両親と腹を割って話して、ようやく未来へと目を向けられ
るようになったのは、ほんのつい最近のことなのだ。そうすぐに頭
を切り替えて考えられるものでもない。それは、誰が相手でも同じ
ことだ。

「ところで貴絵、おかわりくれ」

貴絵との軽口は慣れたものの達が、貴絵に向かって空になった茶碗を差し出している。それを見てハツとした夕映は、自分の目前に座る暁に向き直って口を開く。

「早…坂さん、おかわりは？」

「あ、ああ、俺ももらうかな…悪いな」

驚いたような表情で暁がこちらを見たので、夕映のほうこそ驚いてしまう。そういえば、暁のことを名前でちゃんと呼んだのは、これが初めてだったことに気付き、更に驚きながらもなるべく顔に出さないようにして茶碗を受け取る。

「……ところでさ」

「え？」

達の分をよそった貴絵からしゃもじを受け取りながらそちらを見ると、何となく言いづらそうな顔に見える暁が、やはり言いづらそうに言葉を紡ぐ。

「その…『早坂さん』ってのやめてくんないかな。親父と一緒に仕事してるせいで、そう呼ばれるとややこしくて仕方ねえんだよな」

「じゃあ…何と呼べばいいんですか？」

まさか、「早坂ジュニア」などと呼べという訳ではないだろう。

「『暁』でいいよ。周りの奴らはみんなそう呼ぶし。名字で呼ばれるのなんて、銀行とか役所とか陸運支局ぐらいしかねえからさ、そう呼ばれるとまだ仕事してる気分なんだよな」

それは……わかる気がする。夕映も、制服を着ている間は、たとえ定時を過ぎたとしても仕事が終わった気がしないから。

「じゃあ……『暁さん』、と呼ばせていただきますね」

身内以外の男性を名前で呼ぶのなんて、達以外にはほとんどなかったから、何だか気後れしてしまう。

「ああ」

「それなら、暁さんも夕映のことを名前で呼べば？」

貴絵がとんでもないことを言い出したので、夕映は危うく左手に持った茶碗を取り落とすところだった。

「何言い出すのよ、貴絵っ」

「だって、夕映が名前で呼ぶのに暁さんは名字のままって、何か片手落ちじゃない。それとも年上の人にそうさせて、夕映は平気なの？」

「……」

それを言われると、普段から礼儀を重んじる夕映としては弱い――
——警察官という職に就かなかったとしても、性格上そのへん

の性質は変わらなかっただろうから。

「そ…それは確かにその通りだけど……」

「ね？ だから暁さんも、夕映のこと名前で呼んでみて？」

達も同じことを思っているのか、今度は何も言わない。

「貴絵ちゃんと同じように呼べばいいのか？」

「そうでーすっ だって夕映とあたしって暁さんからしたら似たような立場だし」

頭では納得したらしいが、感情のほうがついていかないのだろう。暁も先刻よりもつと言いつらそんな表情で、思案に暮れているようだった。

「ほんじゃあ……『夕映、ちゃん』って呼べばいいのかな——
——？」

夕映に問いかけるといふより、自分自身に確認しているような言い方だった。達以外の同年代の男性にそんな風に呼ばれたのはほとんど初めてなので、夕映の全身がとたんに緊張感に包まれる——
達については、そう呼ばれ出した頃は既に貴絵とつき合い始めていたから、意識することもまるでなかったので気楽なものだったが、暁は違う。何というのか……背中がむず痒いような、気恥ずかしいような、変な感覚だった。

「か…構いません。はい、おかわりです……」

答えながら茶碗を渡すと、暁も何だか奇妙な表情を浮かべている。恐らく夕映と同じような感覚を味わっているのだろう。

「あ、サンキユ…」

「じゃ、それで締めつけてことで、皆さまお手を拝借」

「『伝七取物帳』かっての」

達の素早いツッコミに、その場がどっとわいた。

S i d e 夕 映 ・ 3 （ 後 書 き ）

何だか丸々一話ご飯話で終わってしまったような…（笑）

『伝七取物帳』がわからない方は、検索するか親御さんに訊いてみてください。

少しずつ暁と夕映の距離は近付いているのかな？ まだまだ初心者？なふたりです。

Side 暁・3

予想外、としか言いようがなかった。

「いらっしやい、リビングの適当なところに座って待っててくださいね」

キツチンでせわしく動き回って告げる相手の足元に何気なく視線を落とした瞬間、暁は我が目を疑った。いままで見せたことのないジーンズ姿を、相手が披露していたから。

恐らくは、先日暁がほとんど無意識に言った「綺麗な脚だ」発言を意識してのことだろうが、夕映には悪いが、残念ながら暁は女性の脚が好きだけでなく、腰から尻にかけてのラインも別の意味で大好物であったりするのだ。なかなか好みの脚だと思った相手が、そんな服装をして目の前でくると動き回って、時にはしゃがみ込んだりして、存分にそのラインを暁の目の前で披露してくれているのだ、目を離すことなど誰ができようか。

ああ、いかんいかん、このままじつと見ててバレでもしたら、今度こそ変態の称号を戴くことになるぞ、俺。

いつまでも見つめていたい衝動を抑え、できる限り表情に出さないようにして達が先に座っているソファへと向かう。

「…ただ待つてるだけつてのも手持無沙汰ですね」

ついさつき手伝いの申し出を断られたばかりの達が、何だか申し訳なさそうに呟くので、仕事などの時には汚れものを入れるために持ち歩いているボデイバッグを開けて、朝コンビニで買ったスポーツ新聞を取り出す。

「読むか？ 俺もう読み終わったし」

「あ、じゃあ…」

真面目な秀才でもやはりスポーツに興味のある普通の男の子だなと思いつつ、自分はリビングのテーブルの上にあった新聞に手を伸ばす。が、仕事場でつけっ放しのラジオのニュースで流れていたことほとんど同じことばかり載っているので、あっという間に読み終わってしまった。

そのうちに、キッチンのほうからはいい匂いが漂い始めてきて…
…暁と達の嗅覚と腹の虫を刺激し始める。成人した年に、「お前ももう大人なんだし、歳の離れた妹に悪影響を与えないうちに出ていけ」と言われて半ば強制的に一人暮らしを始めざるを得なくなった身にとつては、こういう温かな家庭の空気は、何よりのご馳走だ。そりゃあ実家も帰ればいつでも温かく迎えてくれるだろうが、やはり独り立ちした身としてはそうちよくちよく帰る訳にもいかない。その上、可愛い女の子たちの賑わいもオプションとしてつくるとあつては——たとえばそれが自分の恋人でも想い人でもない相手であつたとしても——年頃の男としてはこちらのほうにより魅力を感じるといふもので。「幸せって何だっけ」などと懐かしいテレビCMのようなことを思ってしまったとしても何ら不思議

はない。

そんな時だった。

「ゆ… ゆゆゆゆつ」

「お、落ち着くのよ、貴絵っ 警察学校で習ったじゃない、人質をとつて犯人の対処法っ あ、あれと同じよっ」

それまではきやつきやつと楽しそうにしていた二人の声が、とても同一人物のそれとは思えない響きを宿して、こちらに届いたのは、いったい何事が、と思いながら立ち上がってそちらに歩いていくと、ちょうど夕映がこちらを見ずにじりじりと後退してくるところだった。「危ないぞ」と言う暇もなく、暁の胸のあたりにぶつかつてきた瞬間、夕映の肩がぎくりと強張つたような気がしたが、彼女は振り返ることなく前を見据えたままだ。何が起つたのかと思ひながら彼女の肩越しに向こうを見やつた瞬間、まるでオイルで磨かれた部品のような黒光りするソレが、こちらに向かって動き出したのが見えた。ソレについては、暁も実家やアパートでたまに見かけるものだったので、正体についてはすぐわかったが、驚いたのは夕映の反応だった。

「やだうそ、こっちこないでよ、ばかーっ！」

普段の強気な態度はどこへやら、黄色い声と表現してもいいような甲高い声を上げ、半ばパニック状態に陥つたような様子で、暁の胸や肩に手を当てて押し退けようとするが、女の子、しかもそんな状態の相手に簡単に退かされるほど暁もひ弱ではなかったのだ、とくに他意もなくそのままでいたのだが…それは、夕映にとっては

最悪の事態であつたらしい。

「ちょ、何よこれ、邪魔よ……」

ほとんど泣きだしそうな声を聞いた瞬間、身体が勝手に動いて、夕映の細腰をしつかりとつかんで、ひよいと持ち上げていた。暁自身、腕力もそれなりがあると自負しているが——何せ仕事は肉体労働だし、学生時代からさんざん手伝わされてもいたので——初めて抱え上げた夕映の身体は、予想以上に軽かった。まだ中学生の自分の妹とそんなに変わらないのではないかと思うほどに。けれどやわらかさは未だ成長中の妹とはやはり格段に違っていて、彼女は間違いなく成人している女性なのだということを暁に知らしめる。まだ完全ではないにしろ、成熟し始めた女性特有の匂いともいうのか、とにかくそんなものを存分にまき散らして、暁の感覚のすべてを刺激してくれているのだから。

ああ、こんなことを考えている場合じゃなかったか。

黒い物体が自分の脚の間を通り過ぎていくのを見届けるのと同時に、背後にいる達に向かって叫ぶ。

「まかせた！」

自分の脚で踏んづけてもよかったのだが、一応ここはひとさまの家で、履いているスリッパもひとさまの家のそれだ。勝手にそんなことをして、結果使い物にならなくなるようなことにする訳にもい

かない。だから達にまかせたのだが、達は首尾よく標的を仕留めてくれたようで、軽快な音が背後で鳴り響いた。いい音がしたなーと思う一方で、ふと別に思った言葉が口をつく。

「……しっかし軽いなー。ちゃんとメシ食ってんのか？ 警察官なんて特に体力勝負の職業だろ？」

それは、社交辞令などではなく本心からの言葉。いままでにも何人かの女性を抱え上げたことがあるが——恋人といえる存在のみならず、相手が貧血で倒れたなど、不可抗力でそうなった場合ももちろんある——夕映は、その中の誰よりも軽いと暁は思った。確かに見た目からして細いほうだとは思ったが……。

「……………」

宙で絡み合う、視線と視線。いつものように気の強さを前面に出したそれでなく、穏やかな湖の水面を思わせる、深い色の瞳が……暁の姿を映し出していて。暁自身、自分が何を考えているのかわからない状況を自覚したその時。先に冷静に戻ったらしい夕映の悲鳴が響き渡ったので、耳が一瞬役に立たなくなってしまった。

「ひとの耳元でいきなりんなデカい声出すなっ！ 下ろしゃいいんだろっ」

いくらいらついたとはいえ、ここで乱暴に放り出すほど暁も人非人でもない。できるだけ丁寧な夕映の身体を床に下ろしてから、みずからの耳に指を差し込む。難聴にでもなったらどうしてくれると思いつつ。だから、いつものように憎まれ口をたたき合っている

とばかり思っていた夕映の、それまでとは打って変わって小さくなつた声に、気付くのが遅れた。

「でも……助けてくれて、ありがとうございました………」

さすがに恥ずかしかったのか、夕映は暁のほうを振り向きもしないで、再び貴絵のいる流しのほうへとせわしなく走っていく。だから、いま言われたのは幻聴かと暁は思ってしまったほどだったのだが。

「……よかったですね。ちゃんと感謝してくれてるみたいですよ」

丸めた何枚ものティッシュを手にした達が、楽しそうに笑みでみせるのを見た瞬間、暁はいまのはちゃんと現実だったと認識した。

「べ、別にあれくらい何てことねーよっ それより、その諸悪の根源をとつと処分して、手え洗ってこいよっ」

「はいはい」

達はそれ以上何も言わずに、ゴミ箱と洗面所のあるほうに行ってしまったので、暁はホッとして再びソファに戻って腰を下ろした。

そうだよ……あれくらい、何だっただよ。たかだか、初めて礼を言われたって程度で――。

そうは思っけれど、つい赤くなってしまう頬は止められなくて。達が戻ってくるまでに平常の状態に戻すのに、暁はえらく苦勞を強いられてしまった。笑顔すらろくに見たことのない相手の、素直な一面を目にしまったからだろうか。

その後は、何とか普段の自分に戻れたと思っていたのに……不覚にも、彼女に初めて名前——といっても名字だが——を呼ばれた時には、再びどんな顔をしていいのかわからなくなって、心底困ってしまった。いったい何だというのだ、ウブな少年でもあるまいに、これくらいのこと……。

だから、その後の貴絵の提案には、今度こそどんな反応を返していいのかわからなくて……断るのも変だし、かといって貴絵が言うように呼ぶのにも抵抗があつて——女の子を名前で呼ぶのなんて、初めてな訳でもないのに、言葉が喉の奥に張り付いてしまったかのように、なかなかその名が出てこない。

「ほんじゃあ……『夕映、ちゃん』って呼べばいいのかな——
——」

ああ、何たる有様だ。昔からの友人たち——達とは別ベクトルの、学生時代からの友人たちのことだ——がいまの自分を見たら、何を言われるかわからないなと暁は思った。たかだか知り合いの女の子ひとりを名前で呼ぶことに、こんなに苦勞しているなんて、自分が一番驚いている状態なのだから。

自分でもわからないけれど、彼女を前にすると、いろんな意味でどうも調子が狂う。恐らくは、お互いに——確認したことはないが、彼女にとっても自分はそういうタイプに違いないと、暁は根拠もなく確信していた——周囲にいなかったタイプだからだろ

うと思っていた、この時まででは。

*

*

*

だから。

それから三週間ほど経った、仕事終了間際の頃。

「曉。そろそろ仕事終わりでしょ？　一緒にご飯食べに行こうよ」

招かれざる客と会ってしまつて、どうしたものかと思つていたその時、ほんとうにたまたまやってきた夕映——正確には貴絵も一緒だったのだが——を見て、天の助けとまで思つてしまった。

「こんにちはー。点検をお願いに来たんですけど……あ、もしかして先客さんですか？」

それには答えず、即座に立ち上がつて、曉は夕映の前へと足早に歩み寄る。

「いや、そんなんじゃないから、気にしないでいい。それより、今日点検終わってから暇か？」

「暇…ですけど？」

その答えを聞いて、曉はしめたと思つた。先日夕食時に聞いた

話がほんとうなら、夕映には誤解されて困るような相手はとりあえずいないことになる。この困った現状を打破するには、まさに適役といえる存在だろう。

「それが何か…」

「夕映」

予告も何もなしに名前を呼び捨てにしたとたん、夕映が目を丸くして、貴絵が歓喜の叫びでも上げそうな表情を浮かべるが、何とか自分の身体を盾にして、先に来ていた女性からは見えないようにする。

「もう少ししたら、仕事終わるからよ。そしたらメシ食いに行こうぜ。ここんどこ、ほとんど一緒に出かけられなかっただろ。次の休みは合わせて、どっかツーリングにでも行くか」

口を挟む暇もなく言い切ると、背後にいた相手が走り去る音が聞こえた。思わずホッと息をついた瞬間、夕映が初めて見せるような満面の笑顔でにつこりと笑って。

「……暁さん」

「あ？」

「まだ夕方は寒いし、とりあえず中に入ってお話しませんか？」

と言ったので、簡単に返事をして三人で中に入ったのだけど。よもやまさか、一言の言い訳もさせてもらえずに竹刀で一発食らおうとは、夢にも思っていなかった……。

「……どういことですか」

先刻までの笑顔はどこへやら、いまの夕映はすさまじい権幕だ。

「あれじゃまるで、私と暁さんがつきあってるみたいな言い草じゃないですか　何で私がそんな扱いを受けなければならないんですかつ！？」

暁に対してのこの仕打ちも相当なものだと思いが、とりあえず暁も空気を読んで、そのことについてはふれないでおく。

「ま、まあ待て、俺の話を聞け」

「何ですか」

さすがに有段者だけあって、夕映の気迫は半端ない。だがしかし、暁とて簡単に引き下がれない理由があるのだ。

「さっき、すぐそこに女がいただろ。あいつは真由香つつて、もとも男も女もなくつきあってたダチのひとりだったんだけど、先週急に告白されたんだ」

「わーお、暁さん、モテるんだあ」

父親と一緒に茶を飲んでいた貴絵が茶化すが、暁はそれどころではない。

「さっきも言った通り、あいつ他数人とは性別なんか関係ないダチ

関係やっていて、女として見たことなんかなくて、告白なんかされたところで困るだけなんだよ」

「ならちゃんとそう言っただけならいいじゃないですか」

「断ったさ、何度も！　そういう風になんか見たことないって。だけど、『ならこれからそういう風に見て』ってあいつも聞かないんだよ」

「なら前向きに検討したら……」

「できないんだよ」

そこで暁は、海より深いため息をついた。

「あいつには、ずっと昔からそばにいてあいつだけを見てきた幼なじみの修二って奴がいて……俺は真由香より修二のほうがよっぽどつきあいが長いから、あいつがどれだけマジで真由香だけを見てきたかよく知ってるんだよ。そんな奴がいるのに、元から好きだった訳でもない真由香をいまさらそういう風になんか見れっかよ!？」

そう。暁にとっては、修二のほうがよっぽど付き合いも長く、気持ちもわかり過ぎるほどにわかるのだ。だけど、それを真由香に伝えることはできない。これまで黙って真由香だけを想ってきた修二に対しても失礼だし、真剣に気持ちを伝えてきた真由香に対しても失礼だから。だから、どうにか当たり障りがなくて確実な断り方はないかと考え続けていたのだ。そんな時に、夕映がやってきたものだから——性格的にはこういうことは貴絵のほうが向いていると思うが、達のこともある。達を裏切るような真似はできないし、万が一真実がバレでもしたら、目もあてられない——渡りに船

とばかりについ頼ってしまったのだ。

「そ…それは確かにそうですね……」

「だから頼む！ 真由香があきらめるまででいいから、俺の恋人役やってくんねえかつ！？」

真由香が修二の気持ちに気付かなかったとしても。それは、修二自身の問題だから、暁にはもう手の出しようがない。だから、いまはとにかく真由香が暁をあきらめてくれれば、それだけでいいのだ。その後、いままでと同じように慰め役に徹しようが告白しようが、あとは修二自身が決めることだから。

「とにかく俺は、真由香を女として見ることはできないし、これからも見る気はない。あとのことはあいつらふたりの問題だからいいにしても、いまこのままでいられちゃ困るんだよ」

真由香も修二も、できることならこの先も友人としてずっとつきあっていきたい。だから、いまここで下手にこじらせる訳にはいかないのだ。

「おめーにしちゃ、ずいぶんマジで考えてるじゃねえか」

父親が、少々驚いたような顔で茶々を入れてくる。

「たりめーだろ、大事なダチのことなんだから」

そんな暁の真剣な気持ちが通じたのか、夕映の全身から少しずつ怒気が消えて……真剣に考えているような表情に変わったので、ホツとする。ここで夕映に断られてしまったら困るからだ。

「——その…真由香さんという方が、暁さんをあきらめるまででいいんですか？」

「あ？ ああ……」

「暁さんのほうからは、その…修二さんという方の気持ちもご自分の本心も、おふたりには伝える気はないと。そういうことなんですね？」

「まあな。それは、あいつらの問題だと思ってるから」

それは暁がやるべきことではないと思っているし、そこまで世話してやるほど暁もおせっかい焼きではない。

「……のなら」

それまでのきはきはした声はどこへやら、とたんにか細い語尾だけが聞こえてきたので、暁は思わず耳を寄せる。

「え？」

「私で……いいのならって言ったんですっ 恥ずかしいんですから、何度も言わせないでくださいっ！」

夕映の顔は、もう真っ赤だ。それだけで、夕映がどれだけ男性に免疫がないかわかるというものである。それを見たたん、暁は何だか嬉しくなって、ほとんど無意識に笑みを浮かべていた。何故なのかは、自分でもわからないのに。

「……ああ。よろしくな、『彼女』ちゃん」

夕映の持っていた湯呑みに、みずからの湯呑みをコツン…とぶつけて、満面の笑みで笑ってみせた……………。

S i d e 暁・3（後書き）

唐突の申し出は、夕映は元より暁にとっても予想外のものでした。果たしてふたりはボ口を出さずに任務（？）を遂行できるのか？

Side 夕映・4

どうして暁がからむと、自分は何かしら面倒なことに巻き込まれることになるのだろうか。

そう、夕映はしみじみと思い返していた。そういえば、そもそも
の出会いからして最悪だった。自分の誤解が大半を占めていたとはいえ、よりにもよって陽香の命日の墓参りの直後に暴走族としか思えないような相手と出会うなんて、誰が予想できようか。あの晩は、怒りと哀しみのあまりなかなか寝付けなかったことを覚えている。

その翌日には、あのスクーターを買う買わないの騒ぎで、その後は夕飯にご招待までする羽目になったし……そして今度は恋人役。よくよく考えてみると、最初と最後以外はほとんど貴絵に引きずられる形だったようにも思うが、それはまあいつものことなのでスルーしておく。

「……とりあえず、そんなとこかな」

暁の勤め先兼実家でもある二輪車専門店の応接コーナーで細かい話——暁とどういうきっかけで出逢って、どういう経緯の果てに付き合うことになったか、などという辻褃合わせと言ったほうがいいかも知れない——をとり決めて、「着替えてくる」と言う暁にうなずいて、暁の父であり雇い主でもある店主と、親友の貴絵と共に椅子に腰かけたまま待つ。今日はとりあえず、貴絵のスクーターだけ店主である男性に点検をしてもらって、夕映のものは明日の昼間に暁がしてくれるというのでこのまま暁と共に夕食を摂りに

行こうという話になったのだ。何しろ、例の真由香がどこで見ているかわからないから、久しぶりに逢えた恋人同士としてはそのほうが自然だろうということだ。

「……………」

妙なことになったものだと思いつつふと横を見ると、貴絵が何か言いたそうなニマニマ顔でこちらを見ていたので、飲みかけていたお茶のお代わりを危うく吹きこぼすところだった。

「な、何よ貴絵、その顔はっっ」

「ん〜？ べっつに〜。『面白いことになった』なんて思っていないわよ〜。夕映ってば、大変なことになっちゃったな〜って同情してたところよ〜」

「その顔は、全然そう思ってない顔よっ どうせ、前者のほうが本音でしょうにっ」

「あら、わかる？」

「あんたと何年つきあってると思ってるのよ」

思わず貴絵の両の頬をつまんだところで、帰り仕度を終えてきたらしい暁がドアを開けて住居部分から戻ってきたので、慌てて手を離す。

「何やってんだ？」

「な、何でもありませんっ あ、準備できました？」

「ああ。あ、ほらメット。これかぶってな」

「え、バイクで行くんですか？ 歩いていけるお店でいいんじゃないですか？」

「いや、下手げに近いとこに行くと、真由香に尾けてこられそうな気がしてな。今日はまだ打ち合わせしたばかりだし、あんま会いたくねえかなと思ってよ」

友人としては大事に思っているからだろう、普段は何でもテキパキしている印象の暁にしては、どことなく齒切れが悪い。渡されたヘルメットを手に立ち上がろうとすると、視界の端に再び貴絵の人の悪い笑みが見るともなしに飛び込んできて、何とも落ち着かない。

「じゃあ貴絵、悪いけど、私はお先に帰らせてもらうわ」

「どうぞどうぞ、ごゆっくり」

暁との恋人としての付き合いは演技だと、貴絵もわかっているだろうに——否、わかっているから余計かも知れない——ニマニマは止まらない。居心地の悪さを感じながらも、暁に続いて店舗から出ようとしたところで、その背にかけられる声。

「おうタ映ちゃん、そいつが何か悪さしようとしたら、遠慮なくこっちに言いな。いつくらかでも制裁加えてやつからよ」

「するか、んなこと！」

苦笑いを浮かべながら挨拶をして、ガレージへと歩いていく。シ

ヨルダーバッグを念のため斜めがけにして、それから自分の今日の服装に気付く。フレアのロングスカートとはいえ、あまり大股を開いて乗りたくはないなと思っていたところで、何か気付いたらしい暁が声をかけてきた。

「あ、今日はスカートをはいてきちやったから、どうしようかなと思つて…」

「気をつけて運転するし、横乗りでも構わねえよ」

ほんとうに気にしていない口調で暁が答える。最近気付いたことだが、言い方はぶっきらぼうではあるが、暁は根は優しいらしく、相手に気を遣わせないすべを心得ているように思える。相手が女性ならなおさらだ。真由香についても、これからも友人としては付き合いたいと思つているからか、取り返しのつかない事態にはならないよう気をつけているように見える。外見がこうだから、誤解を招きやすいけれど。

いつか、そういうところをわかってくれる女性と出逢えるといいのに。

と、夕映は他人のことを心配しているところではないだろうことを、ぼんやりと考えていた。

「おい？ 何ボーっとしてんだ、ちゃんとつかまってないと危ねえぞ」

そう言われてハッとした瞬間、腕をつかまれて、ぐいと引つ張られて……ぼす、という音が聞こえるかのような軽い勢いのまま、暁の背に密着させられてドキリとする。思春期を経て以来、異性とこんなに密着した覚えがなかったからだ。

何ドキドキしてるのよ、いくら免疫がないからってっ 暁さんはきっとそれなりに女性慣れしてるんだろうから、こんなことぐらい多分平気なんだから。こんなことぐらいで慌てたら、この先思いやられるわよ、私っ

そんなことを思いながら、あんまり密着し過ぎない程度に暁の背に抱きつく。ここで必要以上に意識していたら、暁に変に思われるだろうと思ったからだ。

暁が連れて来てくれたのは、市内にあるファミレスのチェーン店のひとつだった。「悪いな、急だったからこんなところしか思い浮かばなくて」とほんとうに申し訳なさそうに言うので、懸命にフォロ―をして—— 実際、ファミレスで別段文句がある訳ではまったくなかったのだ、素直に笑顔でそう伝えたのだ——すると暁にもその気持ちがちやんと伝わったらしくすぐに浮上してくれたのでホッとする。

「今度どっかに改めて行く時は、ちゃんと考えて連れてってやつから、期待してくれな」

店に入る前にそう言いながらぼんぼんと頭を軽くたたいてくれたので、ほんとうに根は優しい人なんだなと夕映は思った。そうなる
と、ますます初対面の時の誤解が申し訳なく思えてくる。

店員に訊かれて暁が人数を答えると共に、ほとんど待たされずに
席に案内される。てつきり喫煙席を選ぶと思っていた暁が選んだの
は禁煙席で、夜のこの時間ともなれば煙草を吸う客のほうが多いだ
ろうし、漠然と暁も吸うものかと思っていたので、店員に訊かれた
時に迷わず禁煙席を選んだのが意外だった。

「…？」

そんな思いが顔に出ていたのか、夕映の視線に気付いた暁が振り
返って問うてくる。

「あつ あんたは煙草なんて吸うタイプじゃないなと思ってたから
禁煙席を選んじまったけど……喫煙席のほうがよかったか？」

「あ、違うんです、私は吸いませんが、何となく暁さんは吸う人
かと思っていたので……」

「俺？ 吸わねえよ」

席に着いたとたんに不思議そうな顔で返されたので、更に驚いて
しまう。

「煙草なんか吸ってるより、バイクで風切って走ってるほうがよっ
ぽど気持ちいいしな。それに、整備中に煙草なんざ吸ってたら親父
にぶっ飛ばされちまうよ、オイルやらに引火でもしたらどうすんだ
って」

それもそうだ。ただでさえガソリンやら危険なものを積んでいる二輪をいじるのに、そんなことをしていたら恐ろしくてたまらない。交通課に籍を置いているだけあって、信じられないことが原因で炎上したり、トラブルを起こして結果事故につながった車両を、いくつも見てきた夕映には納得のできる理由だった。

「さて。そんなことはいいとして、どれ頼む？」

そういう風に外見で誤解されることには慣れているのか、別段気にした様子もなく、メニューを広げ始める。そんな彼を見ていたら、またしても見た目で勝手に判断したことが申し訳なくなってきた、思わず小さな声でささやいてしまう。

「……ごめんなさい」

「？ 何が」

「気付かないうちに、また見た目で判断しちゃってたみたいで……」

本気で自分の視野の狭さに嫌気が差していた夕映の頭を、暁はテーブル越しに腕を伸ばして、優しく撫でてくれる。驚いて、俯きかけていた顔を上げると、暁は二カツとしか表現のできない表情で笑っていて……その笑顔には、嫌味たらしさの欠片も感じられない。

「まあ気にすんなって。実際、男の喫煙率は女に比べて断トツ高いんだ、吸ってると思ってたって何の不思議もないさ」

「ありがとつ……」ざいます……」

そう告げると、暁が少々驚いたような顔をして夕映を見つめてきたので、夕映も驚いて見返してしまう。

「な…何ですか？」

「いや…あんたも素直に礼が言えるんだなと思ってさ」

「な…っ 私をいままでどんな目で見てたんですかっ！？」

「だって、あんた俺相手だといつも何かケンカ腰っつーか変に構えてるじゃねえかっ」

「これでも初対面の時のことはいまだに悪かったと反省してるんですよ、なのにそんな風に思われてるなんてあんまりですっ」

「いや、悪い悪い。デザート奢っちゃるから許せや」

口ではそう言いながらも、暁の顔は楽しそうに笑っている。それを見た瞬間、夕映も本気で怒っているのが馬鹿らしくなって、「まあ、もういいですけど」と言いながら浮かしかけた腰を再び椅子に下ろした。そうして、暁に促されるまま食べたい料理とデザートを選んで、店員に告げる。

「277kcalか……」

夕映の頼んだデザートのカロリーの数値を呟く暁の小声に、夕映の耳がすかさず反応した。

「何ですか？ 奢るって言っておいて、『太るぞ』とか言っつもりですか？」

「何でそうなるんだよ、逆だ逆。もつと太ったほうがいいぐらいだつての。大体女は肉がついてるほうが抱き心地も触るのも楽しいってもんで…って、何でんな呆れた目で見えるんだよ!？」

「…いえ。男の人というものは、いつもそういうしょうもないことを考えているのかと思ひまして。ああでも、男の人の皆が皆そういう人種と思ひ込むのも失礼ですね、トオルくんのような理性的な人もいるんだし」

「俺に言わせりゃトオルくんがそういう面を出さな過ぎなんだよ。ああいうタイプは意外にむつつりだったりするんだぜ、今度貴絵ちゃんに訊いてみな、絶対ふたりきりの時にはすごいだろうから」

「そんなこと訊けますかっ」

「何でだよ、女同士なんだし、堂々と訊いたらいいじゃん……」

それまで楽しそうに話していた暁の表情が、一瞬にして凍りついて。まるで頭を抱えるかのように、まだ料理の来ないテーブルに突っ伏してしまったので、夕映は驚いて声をかける。

「暁さん？ どうしたんです？」

「うつそ…だろお……」

「え？」

それまでとは打って変わったような小声になって、暁が答える。

「真由香。尾けてきやがったのかよ……一人じゃ入りにくいとも思ったのか、ご丁寧に修二まで連れてきてやがる……………」

「！」

その言葉に、考える間もなく夕映は振り返っていた。その瞬間、いくつかテーブルを挟んだ向こう側で、先刻暁の実家で見た覚えのある女性と目が合って…キツと鋭い目つきで睨まれて、一瞬怯んでしまった。真由香の変化に気付いたのか、こちらに背を向ける形で座っていた男性が振り返って、夕映と目が合うと同時にすぐに前を向き直って真由香に何ごとかを告げている気配。その言葉を受けてか、真由香の表情が不承不承という感じだったがいくらか和らいだので、夕映もホツとして前を向き直る。

それにしても、と思う。真由香は見るからに気の強そうな女性だが——これは暁の時に反省したように外見だけのイメージからではなく、その意思の強そうな瞳からもうかがえることだ——修二のほうは失礼だがそのへんで普通に歩いていそうな男性だった。良くも悪くも、アクが少ないタイプとでもいうのだろうか。

「あの男性が修二さんという方なんですか？」

「ああ。別にとくに気が弱いとかいう訳でもないんだけど、真由香に頼まれると弱いみたいでさ。いままでは幼なじみの範囲内で収まる程度の頼みごとだったから俺たちも別に何とも思ってたんだけど、これ以上修二を振り回すようなら、いっぺんハッキリ言ってたほうがいいかもな。もちろん、修二の気持ちは伏せた上での話だけだよ」

「……………」

真由香はともかく、修二ともこれが初対面の夕映には、何を言うこともできない。二人のこれまでの関係を知らない自分には、言う資格も権利もないと思っているから。だから、暁の考えに反論するつもりもなかった——下手に口を挟んでボ口を出さないとも限らなかったのだ。

そのうちに頼んだ料理もやってきて、一時的にはあるがゆっくりと舌鼓を打つ。高級レストランなどなくても、夕映を満足させるには十分なレベルの料理で、デザートまでしっかり食べ終わる頃には夕映の機嫌も完全に上機嫌になっていて、現在の状況をすっかり忘れてしまっていた。

「美味かったか？」

「はい！」

「満足したか？」

「はい！」

だから、暁が申し訳なさそうな顔をするのが不思議になって、思わず首をかしげていた。

「食後の行動としては最悪な部類に入ると思うけど、協力よろしくな」

伝票を持って立ち上がる暁の姿を訳がわからないまま視界にとらえながら、夕映はようやく現状を思い出した。そうだった。こんなにのん気に食後の充足感を満喫している場合ではないのだ。暁に続

いて出口に向かうと、暁があえて避けて通つたらしい通路のそばのテーブルから、二人の男女が立ち上がるのが見えた。

うそお……もしかしくなくても、いきなり直接対決ってヤツ？

じわじわとわき起こる焦燥感のおかげで、つい先刻までの満足感があつという間に霧散してしまった。暁の言う通り、「最悪の食後」となりそんな気配だ。

暁と夕映の危惧通り、ふたりが店の外に出たとたん、それは起こった。

「——暁。そっちの彼女も一緒に、ちょっと話があるんだけど」

苛立ちを隠そうともしない声が、夕映の中に学生時代から何度もあつた修羅場の気配を思い起こさせる。修羅場といつても、夕映はほとんど男女交際には縁がなく、たいてい勝手に男子側に想いを寄せられて、その相手の恋人なり彼を好いている女生徒なりからいやもんとしかいいようのない因縁をつけられるのが大半だったのだけだ。

暁が、「やはり来たか」と言わんばかりの顔で小さく舌打ちをする音が耳に届いた。他の人の邪魔にならないところへ行こうということで、駐車場の端に四人並んで移動して、二対二となるような位置関係で対峙する。

「……どういうこと？ 先週あたしが告った時には、確か『お前を女として見たこともないし、これからも見られない』って言ったわよね？ 彼女がいるなんて、一言だって言っていなかったわよね？なのに、何で今日になっていきなりそんな相手ができてる訳？ 不自然じゃない？」

鋭い切り口の言葉が真由香の唇から放たれる。けれど暁も負けてはいない。

「確かに『彼女がいる』とは言わなかったけど、俺はこないだに限らず最近『好きな女がない』とも言っていないよな？」

「どういう意味よ」

「こいつ……有川夕映っつーんだけど、お前らとは別方面のダチの彼女の親友でな。以前偶然会って以来、少しずつ好きになってたんだよ。んでこないだお前に言われた時には既に気持ちを伝えて……返事待ちだっつーんな状況で、他の女になんか応えられつかよ」

「ならその時にそう言えばよかったじゃない。何か、とってつけたみたいな理由で、一概には信じられないわよ」

「ならお前なら言えるってのか？ お前と違って、長く友達づきあいしてた訳でもない、自分のことどう思ってるのかすらわかんない相手に告って、断られる可能性のが断然高いってのに、いま返事待ちですー、なんてよ」

「……」

これにはさすがの真由香も返事に窮したようだ。それまで立て板に水とばかりに質問を重ねていた真由香が、言葉に詰まったように夕映には見えた。

「じゃ、じゃあ、そっちの彼女に訊くわ。こうなってるってことは、暁のことを好きってことよね、いったいどういふところが好きだったのよ、言ってごらんなさいよっ」

自分に話を振られるのも想定の範囲内だったので、半ばヒステリックな声に応えるかのように、夕映は暁の背後から大きく一歩足を踏み出した……。

S i d e 夕 映 ・ 4 (後 書 き)

ついに真由香と対峙する羽目になった夕映。果たして、無事に切り
抜けられるか？

次回、女の戦い勃発！？

Side 暁・4

「暁のことを好きってことよね、いったいどういうところが好きだってのよ、言ってごらんなさいよっ」

真由香のヒステリックな叫びにも似た声がその場に響く。何年も友人としてつきあってきた相手だが、こんなにもひどく感情的になっている姿を暁は初めて見た。女性というものは、色恋沙汰が絡むとここまで冷静さを欠くものなのだろうか。

そんな暁の思考を打ち切るように、夕映が暁の背後からスツと歩み出たのでハツとする。その背を見やると、同じように真由香の背後で呆気にとられているかのような修二と目が合った。修二にも、理解しがたい感情なのだろう。

「どこが好きか、ですか？」

そんな暁や修二の気持ちとは裏腹に、夕映は冷静そのものの声で答える。

「そうよ。言えるもんなら言っごらんなさいよっ」

すると夕映は、口元に片手の人差し指を軽く当てて、少々考え込む素振りを見せた。

「……優しいところ…でしょうか」

夕映がそう答えたたん、真由香の表情が意地の悪さを感じさせる笑顔に変わった。

『ほらごらんなさい、そんなありきたりなところしか見ていないくせに、暁を好きなんて笑わせるわっ』

声こそ違えど、一言一句違わぬ言葉が、二人の女性の唇からほぼ同時にほとばしった。あまりの衝撃に、暁と修二、そして当の真由香さえも驚きに目をみはって夕映を見やる。

「あらやだ、こう返すんじゃないかと思ってた言葉が、ぴったり当たっちゃったみたいですねー。さすがに私も驚いちゃいましたわ」

「な…！」

再び鋭い視線を向ける真由香に、先刻——店の中で初めて顔を合わせた時だ——には一瞬怯んでしまっていたらしい夕映は、いまはまるで動じていない。以前自分と父親の前でひったくり犯たちを捕まえた時と何ら変わっていない冷静さだ。

「……もしここで私が全然違う理由を述べたとしても、貴女は結局同じようにして認めやしないのでしょうか？　なら、真面目に相手をするほうが馬鹿みたいじゃないですか」

夕映の言葉は凶星だったらしく、真由香は顔を真っ赤にしてとたんに言葉に詰まったようだ。

「そもそも暁さんは、貴女の真剣な告白に対して、真摯に向き合ってお断りの返事をしたと聞いています。そして私も暁さんの気持ちに忖えて、おつきあいを始めました。貴女にとっては辛い事実でし

ようけど、暁さんにも私にも何ら非はありません。それでもこうしてつきまとったり言いがかりとしかいいようのない議論をふっかけてくる貴女の行為は、私たちにとっては迷惑以外の何物でもありません。一度でもご自分の行動について省みたことがありですか？ 貴女がそうやって自分のことしか考えずに行動することによって、いままで暁さんの中に築いてきた友人としての評価まで下げることになりかねないんですよ？」

「な、何よ、つい最近ぽつと出てきただけの女がえらそうにつ！」

反論の余地をまったく残すことがないほどの正論を一気にまくしたてた夕映の前で、真由香が右手を高く掲げ、夕映に向かって振り下ろした！

「夕映っ！」

「真由香っ！！！」

とつさに止めようと動きかけた暁と修二の目前で、夕映の身体がゆるやかに動き——決して速度は遅くはない。けれど、その躊躇いも無駄もない動作が、暁の目にゆるやかなそれに見せつけるのだ——まるで舞踊でも見ているかのような錯覚を与える。恐らくは、武道で培った鍛錬の賜物だろう。真由香の平手は夕映にかすりもせず、虚しく空を切った。

「な…っ！？」

「…状況や議論でかなわなかったら、次は暴力ですか？ それでは、そこいらへんの品のよくない方々と何ら変わりはありませんね。貴女がそうして足搔けば足搔くほど、ご自分の立場を悪くする一方だと

いうことに、気付いておられます?」

なおも容赦のない言葉を、夕映が投げつける。恐らくは、真由香をとことん怒らせて、それから冷静に戻らせるつもりなのだろうが――人間、一度怒りたいだけ怒ってしまえば、落ち着いた時には冷静に考えることができるようになるものだ――わかっていても、真由香の心情を思うとやはり胸が痛む。そして同じようにハラハラとした表情で女性二人を見守っている修二に気付いて、もしかしたら夕映のこの糾弾の言葉は、修二に真由香への想いを伝える決心を固めさせるためのものかも知れないと思った瞬間、真由香が信じられない言葉を口走った。

「あーそう、あんたの言うことはすべて正しいんでしょね、ご立派よ。どうせあたしはどうしようもない馬鹿ですよ、生きててもしょうがないわよねー。あーもう、ならもういつそ死んじやおうかしらねー。あんたたちも、そうすりやせいせいするでしょ!？」

完全に自暴自棄になっていて、恐らく真由香自身にも自分が何を言っているのかわかっていない状態なのだろう。いままで見たこともないような投げやりな表情になって、ファミレスに隣接している片側二車線の道路に向かって走り出した!

マジかよ、冗談じゃねえぞっ!?

暁とて、こんな結末を望んでいた訳ではない。ただ、真由香が自分を以前のように友人として見てくれさえすればそれでよかったの

だ。決して、彼女を傷つけようと思って夕映に恋人役を頼んだ訳ではない！

「真由香っ！！」

必死の形相で真由香を止めようとした暁や修二より速く、誰かが動く気配。信じられないことだが、四人の中で一番小柄な夕映が、誰よりも速く真由香に追いついてその手首をつかみ、手加減など感じさせない勢いで彼女を引き倒した。そしてそのまま彼女の上に馬乗りになって、起き上がることさえできないような体勢に持ち込む。

「な…邪魔しないでよ、あたしは死にたいんだからっ！！」

「！」

次の瞬間、暁は更に信じられないものを見た。真由香の上に馬乗りになったままの夕映が、無言のままに右手を閃かせ、目にも止まらぬ早業で真由香の頬を張り飛ばしたのだ！

「ゆ…っ！？」

誰も、声が出せなかった。暁も修二も…殴られた当人の真由香さえも。

「な…何するのよっ！！」

一拍の間を置いて、ようやくハツとしたらしい真由香が、勢いよく上半身を起こしかけて声を上げた…が。それに応えることなく、立て続けに見舞われる夕映の平手打ち。普通のもののみならず返る手の甲で浴びせかける裏拳と呼ばれるものも含め、まさに往復ビン

夕の嵐だった。さすがに見かねて暁は夕映の両手首をつかみ、真由香の上から引き剥がし、自分の前で丁重に立たせる。その間に修二は真由香を助け起こし、手を貸して何とか立ち上がらせていた。

「信じらんない、言葉でひとをさんざん傷つけた後は、今度は本物の暴力！？　それでよくひとの性格のことなんか言えたわねっ！」

真由香の言うことももつともだ。けれど、暁の胸に背をあずけるような形で立っていた夕映が、これまで聞いたこともないような悲痛な響きを宿した大声を上げたので、そんな思いも一瞬で霧散してしまっただけだ。

「口で言ってもわかんないような馬鹿には、身体でわからせるしかないでしょうっ！！」

先刻までの冷静さはいったいどこへいったのかと思うほどの、余裕のない叫びだった。

「『死にたい』だなんて……本気で思ってもいなくせに、軽々しく口にするんじゃないわよっ！！」

「なっ！？」

「生きてくても生きられない人だっているのに、よくもそんなことが言えるわねっ　本気で死にたいってんなら、その人たちにその命をあげてよっ　死にたいと思いがら生きるぐらいなら、そんな人たちが生きたほうがどれだけ有意義だか知れないわよ！」

最後のほうは、もはや言葉にならないほどに震えていて……暁の手のひらに伝わってくる感覚から、顔を見なくても、夕映が泣いて

いることはすぐにわかった。だから、抑え込むようにつかんでいたその手を放して、夕映の身体の向きを変えさせてみずからの胸の中に抱き締める。

理由はわからない。けれど、これほどまでに傷ついている夕映を放っておくことなどできなくて——他の人間の目に晒すことなどしたくなくて、強く強く…抱き締めていた。

「——修二」

茫然としているのは二人とも同様だったが、いま真由香に話しかけることは、自身の心の導火線の短さをよく知っている暁には無理なことだったので、あえて修二一人の名を呼んだ。

「あ…な、何だ？」

「悪いけど、いますぐそいつ連れて帰ってくんないか。いまの俺はたとえ女でも許せる気がしねえから」

それは、偽らざる本音。夕映とはほんとうはただの友人同士で——それもつきあいは他の誰よりも浅く、彼女の性格すら完全に把握しきつてもいない——そういう感情など一切持っていないというのに、彼女を傷つけるものをすべてを許せないとさえ思っている自分がそこにいた。暁自身にも、みずからの抱くこの感情がどういう類いのものかわかっていないというのに。もしかしたら、妹に抱くそれと変わらないものなのかも知れないけれど。それでも、夕映を悲しませたくないと思う気持ちは確かだったし、できるならいつでも笑っていてほしいと思っっているから——。

「……わかった」

修二はそれ以上何も答えず、片腕で真由香を促してその場から立ち去っていった。真由香はまだ納得していないようだったが、暁の迫力に気圧されたのか、何も言わないまま修二に連れられて歩いていった。夕映を抱き締めたまま端に避けた暁の前を、見覚えのある車が一台、停まることもせずに通り返っていく。

さすがに店の中にいる他の人間から見えない位置ではあったが、このままではいつ店から出てくる人間に見られるかわからないと思い、夕映を胸に抱いたまま少しずつ歩を進めて、夕映が落としたバッグを拾いつも店の裏手へと移動する。夕映は暁の胸に顔を埋めたまま、ひとことも発しようとはしない。夕映の過去など何ひとつ知りはないが、普段はあれだけ理知的な夕映がここまで取り乱したのだ、真由香の言動の何かがよほど彼女の心を傷つけたに違いないのだ。そしてそんな顛末に至らせるきっかけになったのは、誰でもない自分自身で——いくら真由香の押しに困っていたとはいえ、他にも方法がない訳でもなかったのに、半ば強引に夕映に恋人役を押しつけたのは自分なのだ——だからこそ、真由香に対してより自分自身に対して更に大きい怒りがわいてくる。

何やってんだよ、俺は……自分のことだつてのに自分自身で対処しきれないで、結果こんな風に女の子泣かせて——。

以前の夕映宅のキッチンでの騒動の時にも思っただけで、こうしてしっかり抱き締めていると、夕映の肩の細さをより意識させられて、少々気が強いだけでほんとうに普通の女の子なのだという事

をまざまざと痛感させられる。

「う……ごめ、んなさ……もっ、とうまく……やる、つもり……だったの、に……」

みずからの胸の中で、小さく身じろぎをした夕映がささやいた声が耳に届いた。

「気にすんな。悪いのは、元はといえば俺と真由香なんだから」

それはまぎれもない本音。つい数時間前に頼んだばかりだというのに、夕映をこんなにも傷つけてしまったことで、もう自分自身の行動を後悔していた。だから、夕映の気が済むまで、いつまでもこうしていてやりたかったのだけど。夕映は気丈にも、片手を暁の胸に当てて、その身を離れたのだ。さすがにもう片手で、顔の下半分を覆ってはいたけれど。

「ごめんなさい……ジャケット、ひどいことにしちゃって……クリーニング代、払わせてください」

まだ涙も止まっていけないようなのに、自分のことよりも暁の服のことを気にしているらしい夕映に、胸が熱くなる。こんな時ぐらい、自分を抑えなくてもいいのに、と。

「気にしなくていい。そんなことより、どれだけ詫びても足りないくらいあんたを傷つけて……誰より自分に腹立ててるんだ。ホントに……ごめん。真由香の気性の激しさを甘く見てた」

「べ、別に暁さんが悪いんじゃない……」

ポケットからハンカチを出して涙を拭いたり顔に当てていた夕映の肩を片手でつかんで、ぐっつと引き寄せる。申し訳ないと思う気持ち思いきり込めて、夕映の艶やかな黒髪に顔を埋める。かすかに香るのは、シャンプーの匂いだろうか。そんなことを考えている場合でもないのに、暁の思考力を一瞬奪うほどの芳香が鼻腔をくすぐった。

「あ…暁さん…っ」

慌てふためいたような夕映の声が耳をついて、そこでようやくハッとする。

「あ…っ わ、わり……」

暁の腕の力が緩むと同時に、夕映は暁の手からバッグを受け取って、暁に背を向けて身支度を整え始めたようだった。さすがにそんなところは他人に見られたくないだろうと思い、暁も無言でそっと反対側を向く。つい先刻まで、夕映の肩を抱き締めていたみずからの腕や片手を見つめながら。

何…やってんだよ、俺は……。謝ったり詫びたりするのが先だろ、何抱き締めちまったりしてんだよ……………。

自問しても、「抱き締めずにはいられなかったから」という答えしか返ってこない。そんなことは理由にならないことは、暁自身が一番よくわかっている。けれど、あんな夕映を見たら、抱き締めず

にはいらなかったのだ。男だから、女の涙に弱いというのもちろんあるだろうけど、それだけではない何かが、あの時の自分の中には確かに存在した気がして……けれど、それが何かと問われると、まったくもって手がかりさえもつかめはしない。

そんな風に内心で混乱している——表面にはまったく出さなかったけれど——暁の背に、かけられる声。

「お待たせして……ごめんなさい。もう、大丈夫、ですから……」

振り返ると、まだ少し赤い目をした夕映がそこに立っていた。目は少し腫れぼったくなっではいたけれど、涙はちゃんと止まっていて、少なくとも明日には元の可愛らしい顔立ちに戻っているだろうと思えるほどのものだった。

「大丈夫か？ そんじゃ、これ以上遅くなっても悪いし……家まで送ってくわ」

言いながら、バイクを駐めておいた場所までふたりで歩いていて、来た時と同じように夕映に予備のヘルメットを渡す。夕映の家は、既に一度行っているから訊かなくても場所はわかつている。夜間ということもあって、あまりスピードを出し過ぎない程度の速度で夕映の家へと向かって……夕映の家の前で、一度エンジンを切ってからバイクを下りて、夕映からヘルメットを受け取って定位置に収納してから、みずからがかぶっていたものも外してハンドルに引っかける。

そして、不思議そうな顔をしている夕映の前で、深々と頭を下げた。

「ほんとうに……悪かった。俺がよけいなことを頼んだばかりに、嫌な思いをさせて……。軽率だったと、心から反省している」

とたんに、夕映が慌てだす気配。

「そ、そんなつ　暁さんが悪い訳じゃないってさつきも……っ　あれはただ、私が個人的なことで勝手に腹を立てて後先考えずにやっちゃっただけで、あの真由香さん？にもちゃんと謝らなきゃって思ってるぐらいで……！」

それでも。たとえ暁や真由香とは関係のないことが理由だったとしても、原因は自分たちにある訳で。それこそ、夕映には申し訳のないことをしたと暁は思っているから。だから。

「こつちこそ勝手だと思うけど、今夜悪い夢を見ないで済むまじないをしてやるよ」

「え？」

言うが早いか、目の前の夕映に一步大股で近付いて、ほんのちよつと手を伸ばすだけで簡単に触れられる位置に立ってから、そつとそのまっすぐな前髪を持ち上げる。そして、そこに予想もしていなかったものを見出し、ぎよつとする。古いものなのか、かなり目立たなくなっているものの、少々斜め気味に横一文字に入った傷跡――。

そんな暁の様子にハツとしたのか、夕映が慌ててその傷を隠そうとするが、それよりも速くそつとその傷跡の上から唇を押し当てる。驚きはしたが、別に触れたくないとかそんなマイナスの感情を抱いた訳ではなかったから――むしろ、こんなにか細い身体の女

の子にこんな傷跡が残っていることに痛々しさというのか庇護欲と
いうのか、とにかくそんな感情を刺激されたのだ。だから、ありっ
たけの想いを込めて、あえてその傷跡の上から口づけた。

夕映から離れると同時に、ヘルメットをかぶり直して、バイクに
またがって再びエンジンをかける。

「じゃあ、な。おやすみ、またな」

「あ、はい……おやすみなさい……」

いつもの彼女らしくなくぼんやりとしている夕映の声を聞きなが
ら、暁はバイクを発進させる。バックミラーで、ようやくたったい
ま自分に起こった出来事を認識して、顔を真っ赤にして慌てふため
きだす夕映を確認して、口元に笑みを浮かべながら――

S i d e 暁・4（後書き）

暁の想像を絶する女の戦い。

女とて、負けられない戦いが存在するのです。

そして、暁のおまじないは効くか否か？

Side 夕映・5

もっとうまくやるはずだったのに――。

夕映の心は、その思いのみに支配されていた。だから、あえて真由香を傷つける言葉をぶつけて怒らせたというのに、とっさに飛び出たに違いない真由香の言葉に、我を忘れてどうするというのは。

ほとんど売り言葉に買い言葉のようなもので、真由香自身ほんとうにそう思ってたのではないことは、頭ではわかっている。けれど、夕映にとってあの言葉は、どうしても聞き流すことなどできない言葉で。脳裏を、最後に見た陽香の笑顔がよぎったと思つた次の瞬間には、気付いたら真由香の身体を抑えつけて、何も考えられない状態のままに何度もひっぱっていた。もし暁に止められなかったら、いつまでだって殴り続けていたに違いない。

それほどに、真由香が口にした言葉は、夕映にとっては許せないものだったのだ。けれど、それは夕映個人が抱く感情であつて、暁や修二、そして真由香には何の関係もない。だから、夕映があそこまで真由香を責めるのは筋違いというものだが、どうしても自分を止められなくて……気付いたら、心に浮かぶ激情のまま、真由香に向かって怒鳴りつけていた。言つても栓ないことを。

いまさら……陽香ちゃんが生き返るなんてこと、あるはずがないのね。

それでも涙は止められず、暁のジャケットを容赦なく濡らしている。止めなければいけないことはわかつているのに。何も知らないはずの暁が困り果てているに違いないことも、わかっているのに……。けれど暁は何も言わず、夕映をその広い胸の中に抱き締められる。ほんとうに愛しい存在にそうするかのように、事情も知らないまま、夕映のために長い付き合いの友人にまで強い怒りをあらわにして――。

「……ごめ、んなさ……もっ、とうまく……やる、つもり……だったのに………」

切れ切れの、涙声で告げる言葉にさえ、暁は優しく応えてくれる。ほんとうに、優しい人なのだと、夕映は再確認することしかできなくて。止まらない涙を無理に堰き止めて、平常の状態に戻るのに精一杯で、とても暁や真由香をそれ以上思いやることはできなかった。自分でも、身勝手だとわかっているのに。

けれどそんな夕映に対しても暁はどこまでも優しくて、「気にするな」と告げてくれる。家にまで送ってくれて、夕映のことだけを労わってくれるその優しさが心に染みて……またこぼれそうになる涙を懸命にこらえた。だから、暁が口にした言葉と行動を正確に把握するのに、普段より格段に時間がかかって。

「こっちこそ勝手だと思うけど、今夜悪い夢を見ないで済むまじないをしてやるよ」

そう言われて、前髪を上げられてからきっかり二秒後、暁の驚いたような表情を見て、ようやく現実に戻った。

傷！！

額の傷も、身体の傷も、夕映は決して自発的に他人に見せたりはしない。無遠慮に事情を訊かれるのも嫌だったし、同情を買おうとしているように思われるのも嫌だったからだ。だから、すぐさま暁の手を払いのけて、いつものように前髪を下ろし直そうとしたのだけれど、行動に出たのは暁のほうが速かった。まるで躊躇う様子を見せることもなく、夕映の額に、傷の上から唇を押しあててきたのだ。

「……っ！！」

いままで、異性に——まあ同性でも同じだが——そんなことをされたことなどなかったから、夕映の頭の中はパニック状態だ。暁が、いったい何を思っただんなことをしたのかはわからないけれど、「悪夢を見ないおまじない」という言葉から考えて、夕映の恋愛経験の少なさを見抜かれてのことだということは……何となくわかった。何故なら、暁の言葉通り、つい先刻まで思考のすべてを占めていたはずの怒りや哀しみ、悔恨の念すらすべて吹っ飛んでしまっただけ、もう暁の唇の感触や温かさ、抱き締められていた時の腕の強さだけしか思い出せなくなってしまうていたから。それが暁の狙いだったとすれば、夕映は完全にその策略に嵌ってしまったことになる。

私に対して恋愛感情なんて持ってないくせに、どうしてそんなこ

と平気のできるの？ それとも、相手が女の子だったら誰にでもそういうことができる人なの？

考えても、答えは出ない。

とにかくにも、そんな考えに完全にとらわれてしまつて、他のことなどもう何も考えられなくなつて、眠れないと思う前にベッドの中ですっかり眠りに就いていて……気付いた時には世間は完全に朝を迎えていて、そんなことを考えているどころではなくなつてしまつて、慌てて支度を始める。今朝は、帰りにスクーターを取りに行く都合上徒歩で出勤しなければならないから、いくらか早めに出なければならぬのだ。

「それじゃ、行つてきまーすっ」

いつもよりすべての支度に時間をかけずに家を飛び出したとたん、夕映はおのれの家の前で信じられないものを見い出して、驚きに目を見開く。

「…はよ。よく眠れたか？」

それは、エンジンのかかつていないバイクにまたがっていた暁。本人は既にヘルメットをかぶつて、昨夜も借りた予備のヘルメットを手にたたずんでいる。

「おはようございます……ど、どうしたんですか…？」

「送つてやろうと思つて待つてた。昨日は俺の勝手に愛車をうちの店に置いていかせちまつたからな、いつもより早く家を出なきゃな

んないのは大変だろ」

そう言って、ヘルメットを渡そうとしてくるので、夕映は思わずそれを押し戻す。

「あ、もしかして、迷惑だった…とか？」

暁の顔が曇るのを見て、夕映は慌ててかぶりを振った。

「ち、違うんですっ 後ろに乗せてもらうなら、それに適した格好に着替えてきますから、ちょっとだけ待っててくださいっ」

言うだけ言って、夕映はきびすを返して再び家の中へと入っていく。そのまま階段を駆け上がって自室に戻り、履いていたスカートを脱いでジーンズに履き替える。上半身には、どちらでもおかしくないような服を着ていてよかったと思う。まさか暁がそんなことを考えていたとは、思いもしなかったというのに———そういえば、「明日は何時頃家を出る予定なのか」と世間話のついでに訊かれていたことを、いまさらながらに思い出す———驚いたなどというレベルではない。

「お待たせしましたっ」

着替えて再び姿を現した夕映に、暁は満足そうに微笑んで、改めてヘルメットを渡してくる。夕映も今度は拒否しなかった。けれど、昨日の今日でどんな顔をしていいのかわからなくて、暁に対してどう接していいかわからない。だから、

「もう少ししっかり捕まってねーとあぶねーぞ？」

と言われて、信号待ちの際に前を向いたまま腕を伸ばされてきて、手を引っ張られた時にはどうしていいかわからなくて、戸惑いまくってしまった。

暁は、誰にでも平気であんなこと——昨夜の「おまじない」のことだ——やこんなことができるのだろうか？ 夕映の心中が戸惑いに支配されていく。もしも、誰にでもできるというのなら、自分にはしないほしい。後で馬鹿を見るとわかっていても、つい誤解してしまいそうになるから——。

「ほい、到着つと」

夕映の職場の裏手にバイクを停めて——そうしてほしいと、夕映が先に伝えていたからだ——暁は片脚を地面につける。完全に停止したのを確認してから、夕映は暁の後ろから降りて、ヘルメットを外して軽く頭を振って髪のを整える。

「わざわざありがとうございます。助かりました」

「いや…帰りは迎えに来てやれなくて悪いな。意外と夕方は客が多いんだ」

「いえ、そこまで甘える訳にはいきませんから」

暁の職種からすれば、仕事帰りに寄る客も多いことは聞かなくてもわかる。

「じゃ、仕事頑張れよ」

「暁さんも」

なるべく普通にあいさつを交わして、職場の入り口に向かって歩き始める。背中に暁の視線を感じていたが、どうしても振り返れなくて……気恥ずかしさと申し訳ないと思う気持ちと感謝の思いが入り混じって、自分でもどんな顔をしていいかわからなかったからだ。

どうしてここまで優しくしてくれるのか。そして自分は、どうしていつの間にか暁の存在を自然に受け容れているのか——初対面の時は、あんなにも敵愾心を燃やしていたというのに……まあそれは誤解が元だった訳だけれど——暁の気持ちも自分の気持ちも何もかもわからなくなつて、夕映は仕事に没頭することで平常心を保つことにした。

* * *

夕刻。「今日は暁さんのところにスクーターを取りに行くから」と言つて、相変わらず意味深なニマニマ顔を浮かべる貴絵と別れ、夕映は徒歩で暁の元へと向かう。

昨夜のその後のことを多少訊かれはしたが、曖昧にごまかして答えているうちに貴絵は何かを察したのか、それ以上深く訊くことはしなくなった。夕映の目元も、今朝には普通に戻っていたからかも知れない。正直いって、昨夜のことは夕映にとっては醜態としかいいようのない出来事だったので、それ以上訊かないでいてくれることはありがたかった。

そうして、暁の実家兼職場である店舗にまず顔を出すと、店主の男性が暁はガレージにいる旨を教えてくれたので、丁重に礼を言つてからそちらへと足を向ける。店主が何も言わなかったので思いもし

なかったが、そこにいたのは暁一人ではなかった。

「お、来たか」

堅そうな箱に腰を下ろして部品を磨いていたらしい暁の前に、もう一人の人物の影を見出し、夕映はぎくりと身を強張らせる。真由香本人ではなかったが、昨夜彼女と共にいた修二青年その人だったからだ。

「あ……！」

修二当人にわだかまりはないが、何しろ昨夜の自分を見られてしまっていて、なおかつ彼の想い人であるという真由香を思いきり傷つけてしまった女なのだ、自分は。どんな顔をして会えばいいというのか。

「あ……昨夜はどうも」

修二本人はといえば、夕映に何ら負の感情を持っていないかのよう、むしろ修二のほうが自分を恥じているかのように会釈して挨拶をしてきたので、夕映は何だか毒気を抜かれた気分になってしまった。

「あ……こんにちは……昨日はその……お連れさまに思いきり失礼な真似をしてしまって、何とお詫びすればいいのか………」

気まずいものの、逃げる訳にもいかずそれだけ言った夕映に、こちらは暁と違って一般的なサラリーマンなのか、きちんと着込んだスーツのネクタイを所在なさ気に指でもてあそびながら——昨夜は一度家に帰ってから真由香に呼び出されたのか、ラフな私服姿

だったのだ——修二は意を決したように口を開いた。

「いえ…昨夜のアレは、真由香が悪かったんです。貴女は何一つ悪いことは言っていないし、やってもいない。真由香も根は悪いコじゃないんですが、何しろあの気性でしょう。深く考える前に行動に出ちゃって、何度失敗して後悔したか数えきれないくらいなんです、昔から」

なるほど幼なじみならではのと思える言葉を、修二は口にする。

「暁のこと…好きだったのはほんとうだと思いますけど、いまとなつてはもう半ば意地になっているだけと言っていていいでしょう。頭では解っていても、感情がついていかない。真由香にしてみれば、予想も何もしていないところにまさにトンビに油揚げをさらわれた状態だったのだから、無理もないでしょうけど」

「油揚げって俺かよ」

それまで黙って聞いていた暁は不満げだ。それに微苦笑で応えながら、修二は続ける。

「だからといって、暁と貴女を傷つけていいという免罪符にはなりませんけどね。真由香自身、自分が悪かったことはわかっているみたいです。自分が正しいと確信している時の真由香は、あんなにもおとなしく引き下がらないし、その後の車の中で一言も話をしないなんてこと、あり得ませんから。ただ、いまは…まだ気持ちの整理がつかないんだと思います。落ち着けば、きっと自分から謝りに来ると思います。この暁と同じで、熱しやすく冷めやすいけど、腹の底にはなんにもありませんから。都合のいい話だとは思いますが、どうかそれまで待っていてやってくれないでしょうか」

そう言って修二は、夕映に向かつて深々と頭を下げた。この人は、ほんとうに真由香のことが好きなのだのと、夕映は思った。でなければ、ここまで彼女のことを理解できないし、自分が悪い訳でもないのに頭まで下げられはしないと思うから――。

「あ……どうか、顔を上げてください。真由香さんのご気性については、何となく暁さんと似たものを感じていましたから、わかります。私だってさんざん酷いことを言ったりやったりしてしまっただし、一方的に謝ってもらおうなんてとても思えはしませんし。ただ、冷静にさえなっていただければそれでいい訳で……」

慌てて答えた夕映に、わずかに顔を上げた修二は、ふ……っと微笑んで。

「優しい方ですね……暁が貴女を好きになるのもわかる気がします」

「えっ そんな……」

「あそこまで言ってもらえれば、真由香ももう考えなしにあなたがたに突撃してくることはないと思います。止められないで便乗した奴が何を言ってるんだって話でしょうけども」

そこで修二は、初めて自嘲的な笑みを見せた。真由香のことではなく、自分自身のことを恥じているのだろう。

「おふたりにハッキリ言っていただけで、僕も目が覚めました。たとえただの幼なじみとしか思われていなくてもいい。都合のいい相手としか思われてなくても構わない。僕もまっすぐぶつかって……玉碎してきます。居心地のいいポジションに甘えて、いつまでもた

だ眺めているだけじゃなく…結果がどうであれ、自分の気持ちを伝えて、一人の男として見てもらえるよう…もう他の男に目を向ける隙なんか与えないぐらい、がんがん攻めていきます」

「おー。頑張れよ。ああいうタイプは、自分が押すのには慣れてても、意外と押されるのには耐性がないんだ」

茶化すように言う暁に、修二はいたずらっぽい笑みを向けて。

「…暁もそうだったりしたのかい？」

そう言われた瞬間、そばにあったペットボトルの飲み口を口に含んだ暁が思いきり吹きだした。

「やだ、暁さん汚いっ」

こちらに向いていた訳でもないが、夕映は思わず一歩引いてしまった。

「修二てめっ　よけいなこと言ってんじゃねえよっっ」

「はは。じゃあ、僕はこれで。また今度、次は真由香も一緒に改めてお詫びに来ます。どうぞ、おふたりともお幸せに」

もう一度深々と頭を下げて謝罪の言葉を口にしてから、修二はそばに置いてあったビジネスバッグを手に帰っていった。後には、どことなく気まずい雰囲気包まれたふたりだけが取り残される。

「あ、の…」

「ん？」

「あの修二さん？に私のこと何か言っただんですか……？」

暁相手にだつて、夕映は過去について何も話していないけれど、何か感付いているような修二の態度に疑問を抱いたのだ。こう言うては貴絵に失礼かも知れないが、少なくとも初対面でもある程度性格を把握されるような貴絵よりは、自分はわかりにくい性格をしている自覚はあったので。

「あ、ああ……アイツの職業は警察官で、無残な現場に行くこともあるだろうから、真由香のあの言葉は許せなかったんだろう」って、あんたが来る前に言っただけかな」

「……………」

そうか、そちら方面での見解か……確かに、暁の言う通り目を覆いたくなるほど凄惨な現場に訪れたことも一度や二度ではない。大人ばかりか、幼い子どもが命を落とした現場でさえも……そんな現場では必ず陽香の顔が脳裏をよぎって逃げたくなるけれど、そんなことが許されるほど甘い仕事でもなく。幾度、やりきれない思いで眠れぬ夜を過ごしたのか覚えていない。

「そう……ですか……」

「それより。次の休みっていつだよ？」

「え？」

「合わせられるなら、朝からどっかでかけようぜー」

何を…言っているのだ？

「何故ですか？ 真由香さんの件はもう解決したも同然でしょう？」

すると、暁のほうこそ「何を言っているのか」と言いたげな顔で、こちらを見た。

「…あのなあ。真由香が諦めたからって、はいそうですかってすぐやめられると思うか？ しばらくの間はそういうふりをしとかないと、すぐに嘘だつてバレちゃうじゃねえかつ」

と、いうことは。

「じゃあ何ですか！？ 私は、暁さん側の事情が片付かないと、他の人と恋愛すらできないということですか！？」

「だから最初にちゃんと頼んだじゃねえかつ それでもいいって了承したのはあんたのほうだろ！？ まさか、そこまで深く考えてなかったとか言うんじゃねえだろうなかつ」

「…っ！」

図星である。いままで、誰とも付き合ったことがなかったから、そこまで考えが及ばなかったのだ。ここまできてから、夕映はおのれの迂闊さを呪った。

「とにかく。いまさら『やめた』なんて言わせねえからな。それじゃ、何の意味もなくなっちまう」

その言葉が、まるで裁判長からもたらされる判決のように夕映の中に響き渡って……一瞬にして、頭の中が真っ白になった。

「な…何でそんな面倒くさい案件を持ち込んでくれるんですかつ！」

「俺だけが悪いんじゃないよっ！」

ガレージから店舗へと続くドアの陰で、店主の男性が必死に笑いを堪えていることに、ふたりは気付く由もなかった……………。

S i d e 夕 映 ・ 5 (後 書 き)

V S 真由香編、何とか終息です。
次回から新展開？

S i d e 暁・5 (前書き)

お待ちしました、ようやくの新規更新です。

Side 暁・5

夕映と出会って、三カ月。早いもので、世間は既に初夏の気配を見せ始めている。出会った頃は、春といってもまだまだ風も冷たくて、バイクに乗るのもまだ少し辛いくらいだったのに、いまでは半袖で乗っても平気なくらいだ。

そんなある日の昼休憩——職場といっても実家でもあるので、自力で弁当など作るはずのない暁の気性をよくわかつている母親が、昼食だけは暁の分も用意してくれているのだ——の時間、母親から味噌汁の椀を渡されて礼を言いながら受け取る。

「ところで暁よ」

そこにかけられる、向かい側に座る父親の声。

「あんだよ？」

そちらを見ないまま、味噌汁をまずは一口。

「おめえ、あの夕映ちゃんとはどのへんまで仲が進んでるんだ？」

予想もしない言葉を投げかけられて、思わず味噌汁を吹きだす。

「なななななっ!？」

「もうやだよ、汚いね、この子は!」

母親の投げつけてきたタオルで口元や胡坐をかいていた脚元を拭いたりしてから、信じられないものを見る目で父親を見やる。

「……『悪さしたら承知しねえ』んじやなかったんかよ？」

それは、数週間前に致し方ない事情で恋人のふりを頼んだ夕映に、暁がその立場に甘んじて彼女に何かしようものなら、すぐにでも自分に言いつけるとまで言い切った、他の誰でもない父親本人の言葉ではなかったか。

「そらあ、おめえがいい加減な気持ちでよそのお嬢さんに手を出したら、本人だけでなく相手の親御さんにも申し訳が立たねえつつう親心じゃねえか。んでも、おめえにしては珍しく？ それともあんな純情可憐なお嬢さんだからか、清く正しい男女交際をしてるって話だからよ、本気だっつーんならあたたかく見守ってやろうってのも、また親心つてもんだ」

「誰からの情報だよ……貴絵ちゃんかトオルくんか？」

暁がここに住んでいるのならともかく、近場とはいえバイクで10分はかかるアパートで一人暮らしをしているいまの状態で、夕映とどういつきあいをしているのかまで親が知っているはずもないとなると、答えは一つしかない。自分と夕映の共通の友人たちである、あのふたりの存在だ。とくに貴絵は、夕映がこれまで異性とつきあったことがないということもあって——いまだ信じられない話だが、ほんとうにその通りらしいのだ——ふたりの仲をおせっかいともいえるほどに過剰に応援しているふしがある。彼らなら、ふたりの仲の進展具合を把握するのもたやすいだろう。

「ネタ元は言えねえなあ」

にやり、と人の悪い笑みを父親が浮かべる。

何が「言えねえ」だ、他にねえじゃねえかつ！

「親心」と父親は言うが、どう見ても面白がっている様子なのは、火を見るより明らかだ。ちなみに母親は、面白がっているというより、息子の恋バナに興味津々といった風で、無言のまま目を見守らせて、暁の次の言葉を待っている。

「進展も何もねえよ。ときどき一緒に食事に行ったり、そのへんに遊びに行ってるぐらいだ」

それは、事実。例の真由香の騒動の時にはどさくさにまぎれて額にキスなどしてしまったが、それ以上のことは何もなく——ちよっと触れるだけでも気をつけているぐらいだ。暁のようにそれなりに恋愛経験がある相手ならともかく、異性とろくに触れ合ったこともなさそうな相手に、そうおいそれと手なんか出せるものか。本気で好きならともかく、あまり大きな声では言えないが、彼らふたりは仮初めの恋人同士なのだから。軽い気持ちで手など出して、いつか夕映がほんとうに好きになった相手と出逢った時に後悔するよなことは、絶対に避けねばならないのだ。

友人であり、仮初めの恋人とはいっても、実の妹に対するような気持ちで彼女に抱いている自分に、暁は気付いていた。

「何だよ、ほんとに何もなしだよ、つまんねえ」

「あに期待してやがんだ、バカ親父」

「親に向かって『バカ』だと!？」

「事実だろうがっ」

思わずいきりたつ男二人を、母親が近くにあった新聞でべしべしとたたいた。

「いいからさつさとご飯食べちゃいなっ 食べ終わらないうちにお客さんが来ても知らないよっ」

母親の活にハツとして、二人そろって座り直して食事を再開する。そうだった。客商売は、いつ客が訪れるかわからないのだ。そうして早々に食事を終えて、少々食休みをとった後、再び仕事に戻る。今日は、普段のような整備の他に、新しく商品を購入した客のための登録などの事務系の仕事も待っているので、忙しいのだ。

それから、二時間ほど経った頃。陸運支局に行つて手続きを済ませてきた暁は、昼間の市街地をバイクで疾走していた。ちなみに手続きに来るのは父親でも何の問題もないが、普段は元氣そのものはつらつさを誇っているくせに、こういう時には「二輪のほうが狭いところを通れる分早くていいだろ。俺? 俺はもう歳だからな、二輪なんざもう辛くてな」とここぞとばかりに歳を強調するから始末が悪い。おかげで、仕事を一通り覚えてからは、役所や陸運支局に行くのはすっかり暁の役目となってしまうていた。

まったく、あの親父。すっかり横着を覚えちまって、面倒くせえっ
たらありやしねえ。

内心で毒づきながら、目前の赤信号を睨みつけてからゆつくりと
視線を目の高さに落とす。すると、交差点の向こう、十数メートル
行った先で、端のほうに縦に連なって停まっている二台の車が目
に入った。後から来た他の車がその二台を避けるように隣の車線に移
つては走り去っていく様子からして、接触でもしてその処理をして
いるのだらう、双方の運転手らしい女性たちの他に、婦警の制服が
見える。

暁は次の交差点では左に曲がるつもりだったから、進行には何ら
障害になり得ないところだが、その制服姿の女性に多少どころでは
ない見覚えを見い出して、一瞬どきりとする。これも父親が変なこ
とを言い出すからだと思いつながら、自身の視力のよさを呪いたくな
ってくる。視線の先で女性たちの話を聞いているらしい夕映は、何
か困ったことでも起きているのか、何となく表情が陰っているよう
に見える。仕事中の姿などろくに見たことはないが、いつもはきは
きしている夕映にしては、何となく変な印象を受けた。あまりに気
になったので、左向けにウィンカーを出すべきところなのに指が動
かず、結局信号が変わると同時にそのままずっと走り始めてしま
った。

停止している車の陰にバイクを停めて、エンジンを切る。ヘルメ
ットを外すと同時に、夕映や貴絵、見知らぬ女性たちの話す声が聞
こえてきて……先刻は気付かなかった低い声も、耳に飛び込んでき
た。

「…それで？　こちらの方の車が急に、あなたの車の前に車線変更

してきた、と。そういう訳ですか？」

「はい……ウインカーは出ていたんですが、わりと寸前だったし……何より車間距離が足りなさ過ぎて、危ないと思ってブレーキをかけた時には、もう間に合わなかったんです」

「ちょっと！ あたしはちゃんと距離を確かめてから車線変更したわよ！？ そっちがスピード出し過ぎてたんじゃないのっ!？」

「そんなことはありませんっ 私はちゃんと標識に書いてある通りのスピードで走ってました！」

「んじゃ何だよ。こっちが無理に車線変更してきたからぶつかっちゃまったってのか？ てめえの腕のなさを棚に上げてうだうだ言ってるじゃねえよっ」

「……っ！」

「あなたが運転していた訳じゃないんでしょう!？ ややこしくなるから、当事者でない人は黙っててくれます!？」

話から察するに、真面目そうな口調と服装の女性が制限速度をちゃんと守って走っていたところに、もう一人の女性が運転する車が無理に割り込んできたせいでブレーキが間に合わず、接触してしまったという話か。あまりひとのことは言えないが、もう一人の女性を見るからにあまり善良そうに見えない。口調や服装は別として、その言い分や恐らくは恋人か伴侶かの同乗者が相手の女性を威嚇するようにしているのを止めもしないあたり、暁のその勘は外れてはいないだろう。

「どうなんだよ、はっきり言えよっ」

「……っ」

相手の真面目そうな女性は、もういまにも泣きそうな顔をしている。さすがに見かねたらしい夕映が彼女の盾になるように男の前に立ちはだかるが、婦警だと思ってなめているのだろう、男の横柄な態度は変わらない。恐らくは、こんな女相手に粹がるような男より夕映や貴絵のほうが腕っぷしも上だろうが、さすがに手を出してきた訳でもない相手を実力行使で黙らせる訳にもいかないので、ストレスがたまりまくっているのだろう、夕映も貴絵も苛立ちを懸命に堪えているのが表情や口調から見とれる。

とくに貴絵など、夕映より気が短い分、内心でどれだけ涙ぐましい努力をしているのかと思うと、はからずもこちらの胸が痛んでくる。以前達が、「あいつにしては、結構いろいろ我慢して頑張ってるみたいなんですよ」と少々心配そうに言っていたことを、いまさらながらに思い出す。

「だから、当事者でない方は引っ込んでくださいって、何度も言っているでしょう!？」

「ああっ!？」

貴絵の、切羽詰まっていたいまにもキレそうな声を聞いた瞬間、達の顔が一瞬脳裏をよぎって、気が付いた時には暁の身体は車の陰から飛び出していて、夕映が庇うようにしていた女性の背後でまっすぐ背筋を伸ばし、仁王立ちで立っていた。

「!？」

暁の顔を見た男の表情が、一瞬にして変化する。それまでの横柄そのもののようなそれから、戸惑っているようなそれに。心なしか、焦り始めているように見えるのは気のせいかな。

「……………」

暁は何も言おうとはしない。ただ、男の目を真正面から見据えているだけだ。相手の男は少々体格はよいが、とくに鍛えている風でもない。もし屈強な相手だったとしても、暁には一歩も退くつもりなどなかったが。こんな、明らかに弱い女性を相手に威嚇するような男など、同じ男としてとても許せなかったのだ。

「……」

貴絵の表情が目に見えて変わるが、夕映は何も気付いていないらしく、かすかに首を傾げたのと同時に、相手の変化に気付いたらしい夕映との間に挟まれる形になった女性が振り返ってくるが、貴絵とその彼女に向かってそつとみずからの唇に人差し指を当てる。何となく、夕映には知られなくなかったから。

「ちょっと、どうしたのよっ」

明らかに狼狽し始めた男を不審に思っただけ、相手の女性が男に向かって声を上げるが、男は首を軽く横に振るだけで、先ほどの勢いはどこへいったのかと言いたくなる。

「じゃあ、お話を続けさせていただきますね」

夕映が不思議に思っただけ振り返るのを避けるためか、貴絵が本題に戻る算段をつける。男の助勢もなくなつて、更には暁の眼力が効い

たのか——ちなみに暁は別に睨んでいる訳でも何でもなく、まったく平常の目つきであるので、それでここまで恐れられるのかと少々哀しくもなってくるが、こういう場合には見事な効力を発揮するのでまあよしとしておく——先刻までの勢いもなりを潜めて、至って平穩に事情聴取は終了した。

さすがにこちら側の女性が全面的に悪くないことにはならなかったが、彼女の主張通り相手の過失のほうが明らかに大きい結果となつたので、とりあえずよしとすることにする。

「何よ、この根性なしっ！」

男を罵倒する女性の声が聞こえてくるが、そもそも男の力をアテにして明らかに自分より気の弱い相手を威嚇して、自分の過失を軽くしようとしたお前こそ何なのだと呆れ果てて何も言えない。

「あ、あのっ」

相手のふたりにばかり気をとられていたので、目前で自分に背を向けて立っていた女性がいつの間にかこちらに向き直っていたことに、暁は気付かなかった。

「どこのどなたか存じませんが、ほんとうにありがとうございます。たっ！！もし貴方がいらっしやらなかったら、私いたいどうなっていたことか……！」

そう言つて深々と頭を下げる女性の声に、みずからの車に戻りかけていたらしいふたりが驚いたような顔で振り返ってくる。

「えっ！？」

ふたりは多分、暁が偶然通りかかった彼女の知り合いか何かだと思っていたのだろう。まあ確かに、まったく知らない相手をわざわざ庇にくる物好きが世間にそうそういるとも思えないし、これは彼らの勘違いを責めることはできない。「関係ない奴だったのかよ」とでも言いたげな目つきで暁を睨みつけてくるが、それぐらいで動じる暁でもない。

「いや……たまたま通りかかったただけなんだけどさ、まさかいかにもか弱そうな女に態度や口調で圧力をかけてくるような男がこの世にいるとは思えなかったけどさあ、何だか気になって来ちゃった。警察官もいるつてのに、野次馬みたいに悪かったなあ」

『まさか』の後にさりげなく力を込めて、睨みつけてくるふたりから目をそらすことなく暁は言い切った。その際に、視線にも力を込めることも忘れない。

「そんなことはありませんっ　ほんとうに助かりましたものっ」

暁とふたりの無言のやりとりに気付いていないらしい女性がほんとうに嬉しそうに告げてくるので、ふっと表情をやわらげて彼女を見下ろす。

「いやー、まさか暁さんが通りかかるなんて、思ってもみなかったわあ」

「ちょ、ちょっと貴絵っ　いつから気付いてたのよ？　私全然気付かなかったわよっ」

貴絵と夕映の対照的な声が響き渡る。

「いや、陸運支局からの帰りなだけどさ、二人が仕事してる姿が何か珍しくて、思わず見物にきちまった」

へら…と笑いながら言うと、貴絵は同じような表情で笑い、夕映は何となく気恥ずかしそうな顔でふいと横を向いた。

「おまわりさんのお知り合いだったんですかー」

のほほんとした空気を醸しだしている四人とは裏腹に、陰悪な雰囲気醸し出してふたりに気が付くが、暁は何も気付いていないような顔をして、素知らぬ様子で言葉を紡ぐ。

「まさか警察官もいる真ん前で、恫喝とか暴力沙汰とかやらかすようなバカはいないと思うけどさー。いまの世の中、信じられないことが平気で起きたりするからさ」

一歩も退かない意思を瞳に宿し、まっすぐに男の目を見てねめつけると、男にも暁の覚悟や自信のほどが伝わったらしい。幸か不幸か、この外見のせいでケン力を売られることも数多く、そんな風に鍛えられているうちにいつの間にか、そこいらの雑魚には簡単にやられはしない技量を身につけていたのである。

すっかり戦意を喪失したらしい男は、初めの勢いはどこへやら、自慢の牙を折られた猛獣のようにおとなしく車に戻って、女と共に去っていった。後は、双方の保険屋同士でうまくやってくれるだろうから、目の前の彼女が連中と直接会うことはもうないだろうと暁は思った。それならそれで、ひと安心である。

「じゃあ、私もこれで……皆さん、ほんとうにありがとうございましたー!!」

最後に三人にこれ以上ないというほどに丁寧に深く頭を下げてから、女性もみずからの車に乗って去ってしまったから。後には、貴絵と夕映、そして暁だけが取り残される。

「あーほんと、暁さんが来てくれて助かりました。あのままだったら、あたしがもう限界だったからさー、思いつきりキレて何やってたかわかんなかったわ」

それは事実だろう。気の短さでは暁といい勝負かもと達に言わしめた彼女の事だ。ついでにいうと、暁のように一般市民ではなくまがりなりにも警察官という立場の彼女が公的な場でキレたりしたら、どんな結果が待っているかは想像に難くない。達でなくても心配になるというものだ。

そしてそんな彼女とは対照的に、

「私からもお礼を言います。キレた貴絵を一人で宿める自信なんてなかったし……ほんとうにありがとうございました」

一応の謝意とお辞儀をするものの、どことなくよそよそしい感じのする夕映が、暁の心に妙にひっかかって、気になって仕方がなくなってしまうた……。

S i d e ・ 5 (後書き)

少しずつ外堀が埋まっていく？ふたりの周囲。
急によそよしくなった夕映の胸の内は？
そちらはまた次回にて。

S i d e 夕 映 ・ 6 (前 書 き)

ようやく二重投稿分を消化しました。てな訳で、いつもより少し早い更新です。

ストーリー的には新展開です。

Side 夕映・6

それは、嵐のような一日だった。

その日は内勤であった夕映は、上司に提出するための報告書を自分のデスクのパソコンで作成していた。そこにかけられる、女性の先輩からの声。

「有川さん、こっちの書類に記名してくれるー？」

「あ、はい、いまいいですよー」

先輩から書類を受け取って、さらさらと自分の名を書く。

「はい、どうぞ」

「ありがとう」

先輩に書類を渡して、再びモニターに向かい直す。先輩がそのまま脇に立ったままなので、不思議に思っただけ再びそちらを向いてその顔を見上げる。

「先輩？　もしかしてまだ何かご用がありました？」

気がつかなくてすみませんと続ける夕映に、先輩である女性が慌ててみずからの顔の前で手を振った。

「あ、ごめんごめん、違うの。ただちょっと、有川さんにプライベートで訊きたいことがあってさ」

「？ 何ですか？　すぐ済むことなら、いまでも構いませんよ」

「じゃあ……訊いちゃうけど」

「はい」

とくに気にしないで先を促した夕映は、次の瞬間、先輩女性の口から飛び出した言葉に、軽い気持ちで応えたことを心の底から後悔することとなる。

「こないだ、私と有川さんて非番の日一緒だったじゃない？　その時、偶然街中で見ちゃったのよね、有川さんが目つきの鋭い男の人と歩いているところ！　ねーねー、あれって彼氏！？」

「っ！！」

あまりにも衝撃的なことを言われて、キーボードの上に置いたままだった夕映の両手が、凄まじい勢いでキーボードの上を滑っていく。モニターに打ち出されるのは、訳のわからないアルファベットや平仮名の羅列……。

「あああああ　　報告書がーっ！！」

慌てふためきながら、キーを操作して元の文面に戻していく。

「せ、先輩　　いきなり何を言うんですかーっ！！」

「いいじゃない、いま課長は会議に行っちゃってていないんだし、ちよつとぐらい」

「えっ なに、有川さんの恋バナっ!？」

「いままで聞いたことないのよね、それってマジ!？」

付近にいた他の先輩女性たちもわらわらと集まってきた、夕映はもうパニツク寸前だ。困り果てて周囲を見回すと、ちょうど近くの給湯室から出てきた貴絵と目が合って、貴絵は既に状況を察しているような表情でこちらに向かって歩いてきたので、天の助けとばかりに手を伸ばしかける。

「先輩が見たのって、背が高くて髪の毛は肩を過ぎるくらい長い男の人ですか？」

「そうそうっ 山下さんも知ってるの? じゃあやっぱり彼氏なの?」

にまにまと顔をほころばせて貴絵に問う先輩に、夕映は貴絵の目をまっすぐに見つめて小さく首を横に振る。何とかうまくごまかしてほしい、お願いだから。そんな夕映の気持ちに通じたのか、貴絵はにっこりと満面の笑みをその顔に浮かべて答える。

「そうなんですよー、そのひとつでは夕映の彼氏なんですよー、もうできたてのほやほやっ 一ヶ月! もうすぐ二ヶ月になるんだっけ?」

「――」

心の底から後悔すること、本日二回目。貴絵の性格はよく知っているはずなのに、あまりに慌てたせいで、肝心なところで読み違えていたことに夕映はいまさら気が付いた。めまいを起こすかと思つた夕映の周囲で、女性陣の姦しい歓声が沸き起こる。そばの廊下を歩いていた署員たちが思わずびくりと身をすくませるようなそれもはやいまの夕映の耳には入っていない。

「えーっ　えーっ　ほんとにそうだったの！？　きゃーっ」

「ねえねえ、どんな人なのっ！？」

「見た目はちよつと怖いけど、根はすごく優しい人ですよー」

「山下さん、詳しいわねえ」

「あたしの彼氏の友達で、バイク屋さんなんですよ。あたしは彼氏づてで元々知り合いだったんですけどね、あたしたちのスクーターを買いに行った時に夕映と知り合つて、いつのまにか…つて感じで」

「きゃー、マジでーっ！？　やっぱり友達づてでって多いのねえ、あたしもそれで探してみようかしらっ」

「ねえねえ、有川さん、どっちから告つたの？　やっぱり彼のほうから！？」

「えっ　あの、その…っ」

既に思考回路の活動が停止してしまっていた夕映は、まともに答えることすらできない。周囲から向けられるのは、好奇心に満ちた

興味津々の瞳、瞳、瞳。もうどうしていいかわからなくなってしまった夕映を救ったのは、渋味を帯びた低い中年男性の声だった。

「何を騒いでいるっ 仕事はどうしたっ!？」

「きゃっ 課長っ!」

さすがに課長の一喝の威力は絶大で、周囲の皆が蜘蛛の子を散らすように三々五々に散っていく。

「やばっ 有川さん、後でねー」

後なんてないと言いたところだが、課長の前でもあるし先輩相手でもあるのでぐっ和我慢する。ハッと思い出して瞬時に貴絵のほうを見るが、騒ぎを大きくしてくれた張本人は、涼しい顔をして既に自分の席に戻って仕事を再開している。誰のせいでこんなことになったと思っているのだと、内心で思いきりアカンベーをして恨みがましい視線を投げつけてから、夕映は目前の自分の仕事の続きにとりかかることにした。

昼休み。今日は昼食を持ってきていないという貴絵につきあつて食堂で弁当を食べることにした夕映は——恨み事は、食堂に向かう前に廊下の人目につかないところで既に伝達済みだ。もっとも貴絵は、平然としていてまるでこたえてはいないようだったが——意気揚々と相席を申し出てくる先輩女性たちに、内心では辟易しながらも表面上は貴絵と共に快諾してしまう。彼女たちが何を言いたいのか訊きたいのかは、火を見るより明らかだったからだ。

「うちそうさまでした」

そう言って夕映が自分の弁当の包みの端をきゅ…と結んだとたん、待ってましたと言わんばかりに先輩たちの瞳が輝いたことに夕映は気付いたが、あえて見なかったふりをする。できることなら、このまますつとぼけて逃げきれないものだろうかと思った、ちょうどその時。

「ところで有川さ…」

「有川さん、ちょっといいかな？」

タツチの差で先輩より先に声をかけてきたのは、やはり先輩の男性署員だった。同じ交通課の同僚とはいえ、白バイ隊の彼とは職務上でもそれほど言葉を交わしたことはなかったが、少しも嫌なところなど見えずむしろ親切な面しか見たことのない誠実な先輩だった。

「はい、何でしょう？」

「あ、こんな公衆の面前では話にくいことなんで……ちょっと、あつちに一緒に来てくれるかな？」

「あ、はい、構いませんよ。じゃあ先輩方、それと貴絵、お先に失礼」

実にさりげなく笑顔で言いながら、夕映は軽い足どりで先を行く先輩の後に続く。あの包囲網から逃れられるなら、普段はそんなに接点のない男性の呼び出しでも嬉々として応じたいくらいだ。けれど、それは甘い考えであつたことを、本日三度目の後悔をもつてして味わうこととなる。

てつきり食堂の外の廊下で話をされるものと思っていた夕映は、

そこではなくもう少しひとけのない場所へと誘導されて、首を傾げる。まだ、人目が気になるというのだろうか？

「あの、せんぱ……」

声をかけようとした夕映の前で、男性が唐突に振り返ったので、思わずどきりとする。

「……………唐突で申し訳ないんだけどさ。有川さんて、つきあっている男がいるってほんとう？」

「——は？」

ほんとうに。まったく予想もしていなかった言葉を投げかけられて、夕映は間抜けそのものとしか言いようのない表情と声で、返事をしてしまった。

「あ、いや、午前中、他の女子たちと話してるのがちょっと聞こえてきて……」

どことなく言い訳がましい口調で言いながら、男性は続ける。

「実は俺、有川さんが就任してきた頃から、ずっといいなって思ってたさ。よかったら、そのうち一緒にどこかにでかけないかって誘おうと思ってたから、すごく気になって……」

このひとは、何を言っているのだろうか？ 夕映の真っ白になった頭の中に、その言葉だけがようやく浮かんできたところで、どこからともなく乱入してくる複数の男性署員たち。

「抜け駆けなんてきたねーぞ、俺だつてずっといいと思ってたんだからなっ」

「そうつスよ、先輩、ずっとこいつスよ!!」

「有川さん、俺も第一印象から決めてましたーっ　お願いしますっ
っ」

「てめー『ねるとん』なんて古いんだよ、ちよつと待ったに決まっ
てんだろ、おらあっ」

「ちよつと待って」と言いたいのは、こちらのほうである。いっ
たい、何がどうしてこうなっているの
だ？

「有川さんっ　どうなんですかつ!？」

「つきあつてゐる奴が、ほんとにいるんスカ!？」

唐突に矛先を向けられて、思わず後ずさつてしまふ。

「あ、はい……」

「うわあああつ　やっぱマジだったのかよーっ!」

「もっと早く動いておくんだつたーっ!」

この状況では、とても仮初めの恋人だなどと言えるはずがない。
とりあえずそれだけ答えた夕映の前で、男どもはそれぞれに阿鼻叫

喚の叫びを上げて、それこそ懐かしの『ねるとん』の如く走り去っていく。後に残されるのは、本気で訳がわからなくて茫然とする夕映ただひとり……………」

「……………」

そんな夕映の背後から、かけられる声。

「いやゝ、さすが夕映。やっぱり隠れファンが山ほどいたのねえ」

それは、先刻食堂のテーブルで別れた貴絵。まったく罪悪感など感じられないような表情で、驚いたような口調で小さく息をつく。

「元はといえば、あんたのせいでしょうっ!？」

貴絵の両頬を両手で左右にむにゅと引っ張りながら、夕映はストレートに文句をぶつける。そうだ。そもそも、貴絵がよいなことを言わず、恋愛に関しては口下手な夕映に代わってうまくごまかしてくれば何の問題もなかったはずで、夕映とてこんな面倒に巻き込まれることはなかったはずなのだ。いまはまだ暁以外の相手とどうこうすることはできないし、他の誰かとの恋愛を思い描くこともできない心境であったから、その手の話題からはさりげなく逃げていたというのに……貴絵のおかげでとんでもない騒動に巻き込まれたものだ。夕映でなくても文句を言いたくなるのも当然のことといえよう。

「いひゃいひゃいっ」

情けない声を出す貴絵にとりあえず気が済んだので、夕映は手を離してそっぽを向いた。

「あつ　夕映、怒らないでよ、謝るから」

「もう遅いわよ。まったく、面倒くさいったら」

「でもさあ、これである意味スッキリしたんじゃない？」

「どういう意味よ？」

「『恋人がいる』ってだけで簡単に諦められるような軽い気持ちの人は、これで見極められたでしょ？　それでも諦めないような人ならよっぽど本気で夕映を好きってことだろうし。また後でフリーになった時に申し込まれた場合の参考になるんじゃない？」

「……」

まあ、貴絵の言うことも一理ある気がするが…それでも、貴絵がやってくれたことへの恨みは消える訳ではない。

「うまいこと言っても、迷惑を被った慰謝料はちゃんともらっわよ」

脇で貴絵の舌打ちの音が聞こえた気もするが、聞こえなかったことにする。

「『アリス』のケーキ、二つでどうよ？」

「ケーキじゃ長もちしないから、ケーキは一個で他に焼き菓子いくつかね」

「えー、夕映のよくばりーっ　あ、でも夕映はもちよっと太ったほ

うが、暁さんも喜ぶか」

「そこでその名前を出すっ!?!」

「何よ、愛しのダーリンの名前じゃない」

「愛しくないっ!」

そんなやりとりを、物陰から見つめている人物がいることに、この時の夕映はまったく気付かなかった……。

*

*

*

怒涛の一日が過ぎて、ようやく帰れるという頃になって、着替えを済ませた夕映と貴絵はそろってロッカー室を後にする。

「まったくもうっ 今日貴絵のおかげで、えらい目に遭っちゃったわよっ」

「まあまあ。隠れた害虫をまとめて駆除できたと思えば」

「害虫って……」

共に働く同胞たちに向かって、何たる言い草だ。そこに、やはり唐突にかけられる声。

「有川、これからちよつと時間あるか？」

同期の市原希いちばらのぞむだった。白バイ隊員になることを目標に、日夜誰よりも真剣に仕事に励んでいて、夕映が尊敬する人間の一人である。

「市原くん？　どうかしたの？」

市原も既に私服に着替えているので、仕事のことはなさそうだが……けれど、彼の性格からして、昼間のような浮わついた話ではないだろう。と、思った夕映は本日最大の驚きに襲われることとなる。

「あ、いや……ちよつと……」

いつもはきはきしている市原にしては何だか齒切れの悪いその様子に、夕映は首を傾げるだけだったが貴絵は何やら感付いたようで「じゃあ夕映、あたしは約束があるからお先に」と言いながら走り去っていつてしまった。後には、夕映と市原だけが取り残される。

「とりあえず、ここじゃ邪魔になるから駐輪場に行くか。有川も今日は二輪だろ？」

「あ、うん」

それをもつともなので、素直に頷いて市原の後に続く。歩いている間に言うべきことでもまとめていたのか、駐輪場に着いてほとんどすぐ、市原が口を開いた。

「あの、さ。午前中と昼休み、聞こえてきたんだけど」

ああ、あの騒ぎのことか。真面目な市原のことだから、職場での私的な話、それも浮わついた話は控えたほうがいいと思っているのかも知れない。

「あ、うるさかったわよね、ごめんなさい。私もまさか先輩があんなこと言い出すとは思ってなかったし、貴絵まで悪ノリしちゃったから……って、これじゃまるで他人のせいにしてるみたいよね、私がきちんと対処していればあんな騒ぎにならなかったんだから、やっぱり私が一番不注意だったわ、ほんとにごめんね、これから気をつけるわ」

「あ、いや、そういう意味じゃなくて……」

違うのか？ 真剣に市原の意図がつかめなくて、夕映はそつと自分より10cmほど高い市原の顔を見上げるが、市原は軽く狼狽したような表情を見せてからそつと息をつく。それから、ようやく意を決したように話し始める。

「……その……つきあってるって言ってた相手、まだ一、二ヶ月しかつきあってないって話だったよね？」

「あ、うん」

自分でも忘れかけていたが、確かにそのくらいだったはずだ。

「有川は……そいつのこと、やっぱり好き……なのか……？」

好きといえば、好きと言えるかも知れないが——もちろんそれは、友人としての話だが、市原に言えるはずもない。

「ま、まあ、一応……」

「相手の奴は？ 有川のことをちゃんと好きでいてくれるのか？」

暁の気持ち？ そういえば、考えたこともなかった。そもそも恋人役を頼まれたのも切羽詰まった事情からだだし、もし貴絵が達とつきあっていなくてフリーだったなら、夕映ではなくて貴絵のほうが適任だった気さえする。友人としては好いてくれているだろうが——でなければ、いくら条件が合う相手だからといって、恋人役など頼んできたりはしないと思うから——それ以上の気持ちがあるかなんて、一度も考えたことなどなかった。

「……わかんない………」

暁は優しくしてくれるけれど、それは誰に対しても同じようにしているそれで、夕映だけに特別な何かをしてもらった覚えはあまりない。だから、言葉を選ぶ間もなく、正直な感想が口について出てしまったのだが。それを聞いたとたん、市原の表情が一変した。それまでのどこか自信がなさそうなそれから、険しさを帯びた、こちらが思わず気圧されてしまいそうなそれに。

「…何だよ、それ。自分のこと好きかどうかもわかんない相手とつきあってんのか？ お前は、それでいいのか!？」

「だ、だって……」

「『だって』何だよ？」

もう、隠しておけなかった。うまくごまかすすべなど、もともと恋愛経験に乏しい夕映が持ち合わせているはずもなく。頼りになる

貴絵もないこの状況では、何故だかわからないけれど確実に気分を害しているような市原に詰め寄られたら――それでなくても、もともと心身共に市原には勝てる気がしないのだ――夕映にはもう、白旗を上げるしか手は残されていなかった……………。

それから二時間後。さすがにこの場では込み入った話ができないということで、近場のファミレスに場所を移して、食事をしながら話すこととなった。

そして夕映は、人間とはここまで呆れ返った顔ができるものかという事実を、いま初めて知ることとなる……………。

「なん…だよ、それ……………」

その顔の持ち主は、言わずと知れた市原だ。

「……………」

夕映はもう何も言うことができず、食後のアイステイーをストロ―をくわえて飲むしかなかった。

「いくら、できるだけ穏便にことを済ませるためって言ったって、普通やるか？　そういうこと」

「私だって…できるなら、違う方法をとってたわよ。だけど、私に相談するより先に、向こうが演技を始めちゃったんだもの……………」

さすがに真由香とのひと悶着については詳しくは話せなかったけれど、その部分は省いても何ら問題はなかったなので、要点だけをかいつまんで話した。

「それに、もう少しだけ我慢すれば解放されるんだし。でもその前に、先輩に見られちゃったのは誤算だったけど」

「その上、山下まで悪ノリしちゃったしな」

「っ！　そうよ、貴絵！　あそこで貴絵がうまくごまかしてくれれば、あんな大騒ぎにならなくて済んだのにつ」

こらえきれなくてつい目の前のテーブルをパシンツとたたいてしまったので、隣のテーブルに座っていたサラリーマンが驚いてこちらに顔を向けたのに気付き、口元をおさえて俯いてしまう。その頭上に響くのは、低いくすくす笑い。驚いて顔を上げると、先ほどとはまるで違う、実に楽しそうな顔で市原が笑っていた。

「有川のそんなところ…初めて見たな。そういう意味では、件の男にちょっとだけ感謝したいかも」

「市原くん……ここまで話しちゃったついでだから、厚かましいとは思っけどお願いが…」

「わかってる。他の誰にもこの話は言わないでほしいってんだろ」

こくりと夕映はうなずく。

「初めから、誰にも話すつもりはなかったよ。有川にとっては不名誉以外の何物でもないからな」

「……………」

そうだろうとは思っていたけれど、やはり市原は実直で誠実な相手だった。

割り勘でお会計を済ませてから、二人はそれぞれの愛車の脇に立ち――市原は学生時代に免許を取得したという中型二輪に乗っていたのだ。そういうところは暁と似ているなと夕映は思う――夕映がメットインの部分からヘルメットを出している間に、市原は手早くメットをかぶって、シールド部分を持ち上げてこちらを見たので、一瞬どきりとしてしまう。

「な…なに？」

「いや。今日、話が聞けてほんとうによかったと思って」

言いながら、市原はバイクのエンジンをかける。

「なんで？」

他人のこんな茶番劇の内情など、知っても仕方ないだろうに。

「だって、有川がまだほんとうの意味では誰のものにもなっていないってわかったからさ。もう少しすれば、名実共にフリーに戻るんだろ？ そしたら俺にもチャンスはめぐってくるかもと思ったら、嬉しくてさ。だから、その時がきたら、覚悟しとけよ？」

親指と人差し指をまるで銃のように形作って、市原は夕映にその先を向ける。一瞬撃つ真似をしてから、メットのシールドを下ろして、「じゃあ、また明日」とだけ言って、走り去ってしまったから。後に残された夕映がその言葉の意味を正確に理解するのに、きっかり10秒ほどの時間を要してしまった。

「ええええええっ!？」

夕映の、心底驚ききつた叫び声が、夜風に乗って消えていった……。

S i d e 夕 映 ・ 6 (後 書 き)

夕映、受難の回です。そして暁にはライバル登場!?
ふたりの行く末はどうなる?

ところで『ねるとん』は下は何歳の人にまで通じるのでしょうか…。

Side 暁・6

それは、唐突に訪れた。

「すみません」

暁がいた店先にやってきたのは、ひとりの青年。暁と同年代と思しき、まっすぐな黒髪を短くした、外見からも内面からも爽やかさが香ってきそうな、実直そうな相手だった。

「いらつしゃい。何かお求めですか？」

「あ、いや、ちょっと単車の調子が悪いんで、見てもらいたいんですけど」

「わかりました、じゃあここのすぐ隣のガレージに持ってつてもらえますか？ 俺もすぐ行きますんで」

「はい」

それだけ告げてから、住居部分に続くドアを開けて、そろそろ夕飯の支度にとりかかっているはずの母親に声をかける。

「おふくろー、いまちつと整備関係のお客さんが来ちまったから、店のほう頼むわー」

「はい」

父親はついさっき、お得意さんでもある友人に、「エンジンがからなくなってしまった」と電話で言われ、念のため積んで帰って帰れるように二輪を載せられる車ででかけてしまったから、向こうで直せるにしろ預かってくるにしてもまだ当分は帰ってこれないだろう。そんな訳で、母親に声をかけてからガレージに向かう。

ガレージに入ると同時に目についたのは、暁のものと同じ排気量の中型二輪だった。更にいうと、自分のものを買う際に最後まで現在の愛車とどちらにするか悩みまくったものと同型のもので、思い入れは人一倍あるそれだ。何だか嬉しくなつて、中腰になつてしげしげと眺めてしまう。

「あの…俺のが何か？」

「あ、別に何でもないんすよ。ただ、俺のを買う時に最後まで悩んだやつと同じやつだったんで、ちっと個人的に思い入れがあつて」

「ひよつとして、あそこに駐まつてるやつっすか？」

「そうっす。いや、あの時はマジで悩んだな」

「俺もあれ、最後まで候補に入ってたよ。結局最後には、色合いで決めちまつたほど」

「形も性能もそう変わんなければ、最後はやっぱそんな単純な理由で決めちまいますよね。他の人から見たらほんとにささいなことなんだけど」

「ああ、それはわかります」

なかなか趣味が合いそうな客で嬉しいじゃねえか。いままで、来たことない客……だよな？

軍手をはめて、「調子が悪い」という箇所を見ながらさりげなく話題を振ると——もちろん二輪がらみの話だ——他のことでもなかなか好みに近いらしく、ますます嬉しくなってくる。こんなに好みに近い相手は、そうそう会えるものでもないだろう。

「お客さん、うちは初めて……っスよね？」

消耗している部品を取り外して、在庫の中から新しいものを捜しながら問いかけると、相手はあっさりとそれを認めた。

「だよなあ、こんなに好みに近いお客さんなら、俺が忘れる訳ねえもんなあ」

同好の士を見つけられた喜びで、暁はすっかり上機嫌だ。相手も悪い気はしていないらしく、機嫌は悪くなさそうだった。が、時折複雑そうな表情を見せていることに、浮かれきった暁は気付いていない。

その後、首尾よく部品交換を終え、相手にエンジンをかけて調子を見てもらうと、不満はすっかり解消したらしく、満足げに口元に笑みを浮かべていたので暁もホッとする。やはり、客に喜んでもらえるのが整備士として一番の喜びだから。料金を受け取り、釣りや領収書と共に名刺代わりのカードを手渡す。暁の家のような個人営業の店では、一見で終わらないように、こうして地道に営業活動を

続けるしかないのだ。

「あ、どうも……」

それだけ言って釣りその他を財布にしまった相手がそのまま黙り込んでしまったので、暁は不思議に思っただけで内心で首をかしげてしまっただけ。

「——『アキラさん』って、あなたですか」

答えを求めているというより、ほとんど確認のような口調だった。

「そうっすけど……どっかで会ったことありましたっけ？」

店の看板その他には『早坂モータース』としか書いていないから、ここに初めて訪れて暁の下の名前まで言える人間は、そう滅多にいない。だから、軽い気持ちでそう訊いたのだけれど。相手は、先刻までの二輪絡みでの同好の感情など完全に払拭したような真剣な瞳で、暁を見返してきた。懸命に記憶をさらうが、ほんとうに見覚えも何もない。

「俺、市原っていうんすけど」

「はあ」

やはり、名前にも聞き覚えはない。

「その天原署で交通課に勤務してまして、有川や山下の同僚っつーか同期です」

そこまで聞いてから、曉はようやく彼の言いたいことを理解した
——ほんとうの意味で、ではなかったけれど。彼女たちからこの店のことを聞いて、仕事帰りに寄って来たのかと、そこでようやく得心がいった。

「ああ！ 夕映…ちゃんや貴絵ちゃんと同僚さんかあ。これはこれは、さつそくご利用いただきありがとうございます」

言いながら深々と頭を下げると、相手の表情とその身を包む雰囲気が一瞬にして険しく、そして冷たくなった気がした。

「…有川から聞いたんスけど」

「え？」

「その気のない相手からのちょっかいから逃げるために、あいつを偽の恋人に仕立て上げてんですってね」

「！」

思わず顔を上げて、自分よりわずかに背の低い相手の顔をまっすぐ見据えた瞬間、相手の表情が苦々しいものに変わった。

「ああ、有川を責めないでやってくださいよ。職場で『恋人がいる』って暴露されたあいつの様子が何となくおかしかったんで、俺が勝手に問い詰めて訊きただけで、他の誰もそのことは知りませんから」

そんなことは、疑ってもいない。あの夕映が、自分からすすんでそんなことを口にするような性格ではないことは、出逢ってまだ数

カ月の暁でさえも把握していることだったから。

「いや別に、そんなことで彼女を責めたりなんかしませんかね。あのコの性格は、つきあいが短くてもわかってるし」

そう返したとたん、市原と名乗った青年の片眉が不機嫌そうに上がったのは、決して目の錯覚ではないだろう。

「なら、あいつがすすんでそんな茶番をやってられる性格かどうかもわかってるはずですよね？」

山下のほうならともかく、と付け足された言葉に思わず同意して吹きだしそうになるが、相手の真剣な表情を見ていたら、そんなことはとてもできなくて……。

「見ての通り、あいつはあんな素直な性格です。たとえつきあいがそう長くない相手でも、それなりに親しい相手が困っていたら、放っておけないほどに……あなたのやっていることは、そんなあいつの優しさにつけ込むようなことじゃないんですか」

「……っ！」

市原の言葉のひとつひとつが、見えない鋭利な刃と化して暁の胸に突き刺さる。いちいち正論であったからというのは、誰でもない暁には一番よくわかっていて……。

「あいつがまだ誰ともつきあったことのないまっさらな状態ってことも、わかってるんでしょう？ 職場でも男相手の時はどこか構えてるところがあるからわかるんスよね。そんなあいつを、いつまでそんな茶番に付き合わせるつもりですか」

言われてみれば、確かにその通りだ。暁とつき合っていることになっっているうちは、夕映は他の誰とも恋愛なんてできるはずもなくで。

「いい加減、あいつを解放してやってほしいんすよ」

「……………」

暁が何も言えないままでいる目前で、市原はこれ以上ないというほどに複雑そうに顔を歪めて、それから、最高に苛立っているかのように「あーもうっ！！」とほとんど叫びながらみずからの頭をがりがりとかいたので、暁は目を見はることにしかできなかった。

「そうやってもつともらしいこと言って、本人のいないところでろくに知らない相手を責め立てて、男らしくないことはわかってんすよ！ いまの俺は、誰よりもみつともねえことしてるって自覚も、ちゃんとあるんですっ だからもう、恥も外聞もなくぶっちゃけちゃいますけどっ！！」

あまりの勢いに、暁のほうが気圧されてしまう。

「俺は、有川のことが好きなんすよ、同じ交通課に配属された頃から！」

「！！！」

予想もしなかった言葉が市原の唇からほとばしった瞬間、それまで冷酷そのものと評してもよいぐらいだった市原の表情が、急速に赤くなっていく頬とほぼ同時に年齢相応の青年のそれになって、誰

よりもみずからを恥じているような様子に変わった。

「……『バカみてえ』って笑ってくれて構わないっスよ。事実、その通りなんだから。あーちくしょう、もつとスマートに済ませるつもりだったのに。有川のこと心配してるようなこと言って、結局あいつの彼氏ってことになってるあんたに嫉妬してるだけなんだ、あー俺超カッコわりいっ！ あんたも呆れ返ってるから言葉も出ないんでしょ、笑ってくれて構わないっスよ、そうされても仕方ないことしてんだからっ」

口を挟む暇がなかったから黙っていただけで、暁には市原を笑うつもりなど毛頭ない。何故なら、いまの市原が感じているような感情は、かつての自分にも覚えがあったからだ。その時の自分を思い出すと、いまの市原など目ではないほど恥ずかしい行動をした自覚があるので、とても他人のことなど笑えはしない。

「……笑わないっスよ。いや、むしろ笑えない、かな」

「!？」

「昔の俺も、似たような……いやもつとひどいことやった記憶があるから。他人のこと笑えるほど、いまの俺だってそんなに成長してないと思うし」

そう言っていると、頭を抱えていた市原が驚いたような表情で頭を上げた。

「——『彼女』の件も、できるだけ早く何とかしますよ。このままでいいなんて、俺も思っていないし」

何より、彼女のことを真剣に想っている相手がこんなに近くにいるなら、確かに彼女をいつまでも拘束しているのは罪としかいいようがない。彼女が彼をどう思っているのかは知らないが、少なくとも彼女が自由に恋愛する権利を奪うことなど暁に許されていることではない。

「そう言ってもらえると…俺も助かるんですけど……でもまあ、俺はただの同僚以上に思われてないみたいだから、先は長そうですね」

「んなこたないっしょ」

夕映の性格からして、こんなに真面目でまっすぐな性格の相手に好意を抱かない訳がないと暁は思っていた。暁でさえ、こんな短時間のやりとりで既に市原に好意を抱き始めているのだ、彼ともっと長い間接してきた夕映ならば、絶対に好意以外の感情は持っていないだろうと確信できた。

「そう言ってもらえると嬉しいけど、俺がそういう意味でいままで眼中になかったってことは、もう確認済みなんです。つい最近…そちらとのほんとうの関係を訊きだした直後ですけどね。俺、別れ際にあいつに告ってるんですよ。その翌日のあいつの緊張度合いといったら……いつもの冷静さはどこいったって感じで、すんげーミスしまくりで挙動不審で…あれは完璧に予想外の相手から告られての反応ですね」

苦笑いをしてはいるが、市原の落胆ぶりは、暁には何故か手に取るようにわかって……同じように告白をして、相手にとって自分は恋愛対象外だったとわかって愕然とした経験が、暁にもあったからかも知れない。

それから、二、三他愛のない話を交わしてから、市原は帰っていった。その後ろ姿からはもはや、途中までの気迫は感じられなくて……彼はほんとうに、夕映のことが好きなのだなと暁は思った。

それにしても。あの時のアレは、そういうことかよ。

あの時——つい先日、仕事中の夕映と貴絵に出くわした時のことだ。あの時、貴絵は普段とほとんど変わらなかったが、夕映はどこかよそよそしかった。アレは、市原青年に既に告白された後、つまり暁とのほんとうの関係を話してしまった後ろめたさ故のものだったのだろう。確かにあの態度は気にはなっていたが……無理に訊きだすのもどうかと思い、とりあえずふれないようにしていたのだ。けれどその原因が、自分との関係だとすれば、もう放っておくことはできない。市原はああ言ったが、もしも彼女も彼を好きなのだとしたら、邪魔なのは自分のほうということになる。想い合うふたりを引き裂いてまで、自分の都合を押し通すほど暁も自分勝手ではないのだ。

市原の後ろ姿が完全に雑踏に消えるのを見届けてから、つなぎの胸ポケットに入れていた携帯を手にとって、しばし前に登録した番号へと電話をかけ始めた……………。

*

*

*

翌日の夜。いつものようにファミレスで夕食を摂った後、暁は「話があるから、もう少しつきあってくれ」と言って夕映を後ろのシートに乗せて、ひとけのない河川敷へとやってきていた。ちなみに場所のチヨイスに意味はない。夕映に下心などないと示すためでもあり、話を聞かれる心配はないがとりあえず人目がまったくない訳でもない場所、という条件の中決めたただけだった。

「あ、の…話って、何ですか？」

先日よりはだいぶマシになってはいるが、やはりどこことなくよそよそしい様子で夕映が問うてくる。河に向かって石を投げていた手を止めて――昔よくやった水切りという投げ方をやってみていたのだが、さすがにブランクがあるせいか昔のようににはうまくできなかった――そつと後ろを振り返る。

「昨日の夕方さ、うちの店にご新規さんのお客さんが来たんだよ。買い物とかでなくて、単に愛車の調子が悪いんで見てくれってことでさ、部品をちよつと取り替えただけでそつちはすぐ終わったんだけどさ。そのお客さんのうちに来たほんとの目的ってのは、実は違つたんだよな」

「え？」

夕映は何も気付いていない様子だ。

「そのお客さん……天原署の交通課所属の署員だつて言つてさ。夕映、ちゃんと同期だつて、若い兄ちゃんだったよ」

ここまで言えば、さすがに夕映にも暁の言いたいことが通じたら

しい。それまできょんとしていた顔が、見る見るうちに赤くなつて、まるで昨日の市原青年のようにどうしていいのかわからないような表情になつて両手で口元を覆つてしまった。

「そ…その人つて、もしかして……」

「うん。もしかしくなくても、市原つて名乗つてた」

「やっぱり」とでも言いたげな表情で、夕映は俯いてしまった。

「おかしいと…思つたんですね。昨日までは普通だったのに、今日になつていきなり気まずそうに視線をそらしたりするんですもの。私は何もした覚えがないし、貴絵も何も知らないつて言うし。貴絵は時々悪ふざけをしたりするけど、こつちが真剣に訊いたことにはちゃんと真剣に答えてくれるから……いったい何があつたんだろうつて、二人で話してたんです」

あれは、そういうことだつたんですねと夕映は続ける。

「彼に…告られたんだつて？」

「！」

まさかそんなことまで市原が話しているとは思わなかったのだろつ、いつもの毅然とした態度とはまるで違つ、おどおどと表現するしかないような頼りなげな様子で、夕映はとたんに落ち着きをなくす。

「ごめんなさい、暁さんにとってはあまり他に知られたくない話だつたろうに、市原くんに話しちゃつて……まさか私も、後であんな

こと言われるなんて思ってもみなくて」

「ああいや、謝るのはこっちのほうだよ。夕映ちゃんが他の誰かと恋愛する機会を奪っちゃってんだから。あの彼みたいな相手がいたっておかしくない年頃だったのにな。だから、もし君もあの彼のことが好きだったんなら……」

「そ、そんなことはありませんっ!!」

豪胆を誇る暁でさえも度肝を抜かれるような大声が、夕映の唇からほとばしった………………。。

S i d e 暁・6 (後書き)

ついに初対峙の暁と市原…。

真実を知ってしまった市原くんは、黙っていられなかったようです。
夕映の真意は？ 次回、ドツボにハマる夕映？

Side 夕映・7

——わからない。何もかもが、わからない。

「よっ おはよう!」

「っ! お、おはよう……」

市原に暁とのことをすべて話してしまった翌朝、いままでと何ら変わりなく声をかけてくる市原に、夕映は何とか平静を保って返事をする。昨日の今日で、いつもとまるで変わらない様子を見せる市原のことわからないし、市原がいたい自分のどこを好きになっただいいうのかもわからない。おかげで自分は昨夜はなかなか寝付かれなくて寝不足だというのに。

「ねー、夕映。市原と何かあった?」

貴絵に唐突にずばり核心を突かれたので、とっさにとりつくろつこともできずに、赤くなっていくみずからの顔を止められなかった。いまがパトロール中のミニパトの中で貴絵と二人きりで、更に自分が運転している最中でなくてよかったと、夕映はしみじみと実感した。もしも自分がハンドルを握っていたら、操作ミスを起こさない自信がまるでなかったから。

「やっぱり。夕映つてば、朝から市原と顔を合わせた時だけ何か変わったんだもん。もしかして……市原に告られでもした？」

「な…っ！」

何でそんなことまでわかるのだ！？　そう思つて貴絵のほうを向き直った夕映は、「にまゝっ」としか表現のしようのない表情の貴絵とばっちり目が合つてしまつて、慌てて視線をそらした。

「市原があんたを好きなんて、見てりやすぐわかるつての」

「そ…そうなの！？」

では、周囲の人間すべてにバレバレだということなのだろうか！？

「ああ、気付いているのはある程度以上の恋愛経験がある人だけだと思つたよ？　市原もなかなか本心を隠すのうまいから。あたしもトオルとつき合つて長いからねー、それなりに修行積んでますつて」

ならばよいけれど……それにしても、決して少なくはないであろう人数にはばれているのかと思うと、恥ずかしくて仕方がない。

「んで？　あんたは何て返事をした訳？」

話をしながらも、眼はばかりなく周囲にまんべんなく視線を注ぎながら、貴絵は問う。

「へ、返事も何も…別れ際に、『フリーになつたあかつきには覚悟しとけよ』って言うだけ言つて帰られちゃったから、何も言えなかったわよ」

「『フリーになつてから』…？ あー、やっぱり暁さんとのことも吐かされちゃったかあ、そうじゃないかと思つたのよねー。夕映つてば、絶対犯罪とかやんないほうがいいわよー？ 取り調べとかする側ならともかく、される側になつたらあつさりボロ出しちゃいそうだから、完全犯罪なんかぜーったい無理！」

貴絵に言われてから、夕映は初めて自分が致命的なミスを犯したことに気付いた。顔が、ますます熱を帯びていくのがわかる。

「で、どうなの？ 市原のこと、どう思つてんの？」

「どうも何も…いままでそんな風に見たことなんてなかったし……努力家で、尊敬できる同僚つてこと以上には思えないわよ」

「えー、市原かつわいそー」

「…っ！」

貴絵は確か、夕映と暁をつき合わせようと——いまのように見せかけではなく、ほんとうの意味でだ————していたのではなかったか？ なのに、ここでどうして市原に同情的なセリフが出てくるのか。

「ね、ねえ、貴絵…？」

助手席の窓から身を乗り出して、駐車違反の車のタイヤと路面にチヨークで印と必要事項を書き込みながら、夕映は振り返らないまま貴絵に声をかける。

「なーにー？」

「貴絵は、私と暁さんをどうにかさせようとしてたんじゃなかったの…？」

なのになんとして、市原をも応援するような言葉を口にするのか。

「んー、暁さんもいい人なのはわかってるから、夕映をまかせてもいいなあとは思ってたんだけど、市原もなかなかいい奴だからさあ。ぶっちゃけた話、あんたを幸せにしてくれるなら、どっちでもいいのよね、あたしは」

「何よ、それっ 二人のどっちにも失礼な話じゃないっ」

「だって仕方ないじゃない。あたしはトオルと違って暁さんと元から友達だった訳でもないし、三人の中で誰が一番大事かって言われたら、あんたって即答しちゃうぐらいだもん」

「……！」

「冗談かと思われそうだが、貴絵が本気でそう言っていることは、付き合いの長い夕映にはよくわかってる。貴絵という人物は、そういう相手なのだ。」

『有川…夕映ちゃんっていうの？ あたし、山下貴絵っていうの。『夕映』と『貴絵』って、まるで姉妹みたいね』

そう言っただけなのに嬉しそうに笑った……初めて会った、中一

の春の日のことを、いまもよく覚えているから――。

「まったく、あんたって人は……」

「なーに？ 惚れ直した？」

くすくすくす。男二人に対してまるで罪悪感を抱いていないような無邪気な笑顔で微笑まれると、怒る気も失せてしまうから不思議だ。貴絵という娘は、こういうところがにくめないから人生を得しているように思える。本人は自覚しているのかわからないけれど、少なくとも達は、貴絵のこういうところに惚れたのかも知れないと、夕映はそっと思う。

「で、どうすんの？ 晴れてフリーになった時は、どっちを選ぶの？」

信号の下に出る矢印に従って右折しながら、貴絵が問ってくる。

「そんなの…わかんないわよ。暁さんが私を好きだなんて決まった訳でもないし。どう思ってるのかさえわかんないのよ…？」

だからといって、前述の気持ち以上のそれがないのに、市原つき合うなんて彼に対して失礼極まりない。

そう続けた夕映に、貴絵は「そっか」とだけ答える。

「あたしから見たら…」

「あつ 貴絵、信号無視車両発見！ 早く追ってっ」

ふいに見かけた違反車両のことで頭がいっぱいになってしまったから、貴絵の言葉の続きは夕映の耳にはまったく入っていなかった。

「あたしから見たら、暁さんは絶対夕映のことが好きだと思うけどね」

*

*

*

そんな会話を交わした二日後だったから、仕事中に予想もつかない形で街中で暁とばったり出会った時には、夕映は自分でも信じられないくらい挙動不審になってしまった。

何で…こんなに後ろめたい気分になるんだろう。市原くんに全部話しちゃったから？ でも暁さんとの交際のふりはある意味人助けで…市原くんなら、他の人に話さないって約束してくれたことを話すようなことはないと思うし…。

そうは思っているけど、暁の目をまっすぐ見ることができない。暁なら、市原のことを話しても怒りはしない気がするけれど、何故だか心は晴れなくて……。恐らく、暁の目にも自分の態度は不自然に映っているだろうけれど、どうしてもいつものようには振舞えな

ったのだ。自分はいつたいいつから、こんなに臆病になってしまったのだろう？

だから、それから数日経った頃に暁から呼び出しを受けた時には、ついに来たかという気分になってしまった。

食事の間は、暁は普段とまるで変わらない態度で、自分の考え過ぎかと思いかけていたのだけれど。会計を済ませて表に出たとたん、「悪いけど、もう少しだけ付き合ってくんねーか？」と言われて、心臓の鼓動が一瞬にして早まった気がした。けれど懸命に表には出さないようにして、暁の後ろに乗って河川敷へとやってくる。

「あ、の…話って、何ですか？」

そう切り出した夕映の前で暁が語った内容は、予想もしていなかった内容で……。

「そ…その人って、もしかして……」

「うん。もしかしくなくても、市原って名乗ってた」

途中から半ば予想はしていたが、まさか市原がそんな直截的な行動に出るとは思っていなかったので、驚きもひとしおだ。

「ごめんなさい、暁さんにとってはあまり他に知られたくない話だったろうに、市原さんに話しちゃって……まさか私も、後であんなこと言われるなんて思ってもみなくて」

「ああいや、謝るのはこっちのほうだよ。夕映ちゃんが他の誰かと恋愛する機会を奪っちゃってたんだから」

暁の返事にホッとしたのも束の間、その次に続く言葉に、夕映は自分の耳を疑った。

「…あの彼みたいな相手がいたっておかしくない年頃だつてのにな。だから、もし君もあの彼のことが好きだつてんなら……」

え…もしかして、私が市原くんのことを好きだつて誤解されてる？
？ っていうか、むしろ市原くんとき合うことを奨励されてるの？
私が、他の男の人とき合うほうが、暁さんは嬉しいの……？

「そ、そんなことはありませんっ！！」

自分でも、思ってもみなかった言葉が口をついていた。それも、信じられないくらい大きな声で、ほとんど反射的にいつていいぐらの速度で。これではまるで……。

「いまの…どついつ…？」

自分でも自分の気持ちが変わらなくなって、真っ赤になっていくみずからの顔を自覚しながらも、これ以上よいけいなことを口走らないように両手で口元をおさえて視線を暁の足元に落とした夕映に、半ば混乱しているような暁の声がかけられる。訊かれたって、自分でも自分の心がわからないのだ、答えられる訳がない。もうどうしていいかわからなくなって、思わずぶるぶると首を横に振って、何とか言葉を紡ぎ出す。

「わ…わたし、何言ってるんでしょうね…ごめんなさい、今日はもう帰ります！」

もう、何を言っているのか、どんな顔をしているのかわからなくて、即座にきびすを返す。

「あつ　待つ…！」

もう恥ずかしくて、この場にいることすら耐えられなくて、暁の引き止める声も聞こえないふりで駆け出しかけた夕映の片足が乗ってしまったのは、他の石とは段違いに大きい石。あまりにも高さが違ったせいで、後ろ向きにバランスを崩してしまふ。

「きゃ…っ！」

「あぶねえっ…！」

とつさに出してくれたらしい暁の両腕が抱き留めてくれたおかげで、何とか地面に倒れ込むことだけは回避できて、ホッと息をついた。こんな、石だらけのところで後ろ向きに転んだりして、頭でも打っていたらと思うとぞっとする。ようやく落ち着いてきたところで、暁に横抱きの形で支えられているおのれの現状に気付いて、ハッとする。

「あ…ありがとうございます…よく言われるんですけど、一見そう見えないのに私って結構抜けてる、らしいんですね…」

この際だ、笑ってごまかしてしまおうと思って見上げた夕映の視界に飛び込んできたのは、深い夜の闇を思わせる、感情の読み取れ

ない色の瞳。時折反射する遠くの車のヘッドライトが、まるで獲物を捉えた肉食獣の瞳の光を思わせる。そのまま、ほどよく筋肉がついた胸の中に抱き寄せられて……。

「あき、らさ…?」

問いかけるように顔を上げた夕映の眼前に、いつの間に近付いていたのか暁の相変わらず感情の読み取れない表情を浮かべた顔が迫っていて……名前すらろくに呼びかけられないまま、唇と唇が接近していく。みずからの唇が言葉にならない声を紡ぐのが、夕映にはわかったけれど、何を言おうとしたのかは自分にもわからなくて……。

「――」

互いに瞳を見交わしながら、唇が触れ合うまであと数ミリというところで、背後から響き渡る、元気のよい犬の鳴き声。

「――っ!!」

心臓が、停まってしまおうかと思った。暁とほぼ同時に、飛び跳ねなかったのが不思議なほどにびくりと大きく身を震わせて、慌てて互いの身を離す。見ると、ゴールデンレトリバーと思しき大きな犬が、人懐っこい様子でこちらに向かって駆け寄ってくる。「こ、これ、お待ちなさい、ラルフっ!」と息も切れ切れに言いながら、追いかけてくるのは中年の婦人。その手に持った袋からして、散歩の最中に犬に急に走りだされた拍子にリードを手放してしまって、慌てて追いかけてきたのだらう。

「…『ラルフ』? よっしや、こっちこいつ!」

暁の叫びに反応して、ラルフと呼ばれた犬はちぎれんばかりに尻尾を激しく振りまくって、暁の胸の中に飛び込んでいく。暁も受け入れ態勢は万全だったらしく、多少よろめいたものの何とか犬を抱き留めて、そのすさまじい顔舐め攻撃に圧倒されながらも、ほとんど手探りでリードを捜しあてて、しっかりとそれをつかむ。

「まあまああ、うちの犬がごめんなさいっ　大丈夫ですかっ？」
はたで見えていても可哀想なほどに息をはずませた婦人が、申し訳なさそうに言いながら暁に駆け寄ってくる。

「いや、犬は大好きなんで、大丈夫っスよ。それより、こんなでかい犬の散歩は男にまかせたほうがいいですよ？　リードを振り払われるくらいならともかく、最悪の場合は引きずられて怪我なんかしかねませんから」

リードを婦人に渡しながら、暁が告げる。

「いえ、いつもは息子に行ってもらってるんですけどね、今日は残業でまだ帰れないらしくて……こういう時に限って、お父さんも飲み会が入っちゃうしで……ほんとごめんなさいね、お邪魔しちゃってそれじゃラルフ、帰りましょうね」

笑顔で去っていく婦人にリードを引かれ、犬は未練がましそうに暁を振り返りながらも、ゆっくりと歩み去っていく。あの様子なら後は彼女一人でも大丈夫だろう。そう思った夕映の脳裏に、たったいま言われた言葉がよみがえった。

『ほんとごめんなさいね、お邪魔しちゃって……』

気付かれていないと思っていただけ、ついさっきのアレを見られていたのだろうか!? 夕映の顔と全身がかあつと熱くなる。

「……帰るか。送ってく」

それだけ言つて、ジーンズのポケットに両手を突っ込んだまま、暁が先に立つて歩き始める。そのあまりのそっけなさに、暁にとつては先刻のことなど大したことはないことだったのかと思つてしまつて……自分だけが焦つて馬鹿みたいだと夕映が思つた瞬間、決してこちらに顔を向けようとしないう暁の両耳が、真っ赤に染まっていることに気が付いた。

もしかして……暁さんも、恥ずかしかったりするの…?

自分などより、よつほど恋愛経験がありそうなのに。けれどそうになると、どうしてあんなことをしようとしたのかわからない。あの照れ具合やその前に話していた内容からして、少なくとも遊びで手を出そうとしたようには思えない。市原の気持ちを知っていて、なおかつ夕映の気持ちを慮ってくれるような彼が、そんなことができるような人間だとは……思えない。じゃあ…もしかして……? ひとつの可能性に思い当たつて、夕映の顔が更に熱を帯びる。

街灯の光がかすかに届く中、ほとんど無言のままでヘルメットを受け取つてかぶり、エンジンをかけた暁の単車の後ろに乗り込み、いつものように暁の腰につかまる。暁もほとんど反射的な様子で動

くのみで、何も言おうとはしない。そのままほとんど言葉を交わさないまま夕映の家に向かい、家の前でそっとシートから降りる。

「送ってくださいって、ありがとうございます……」

それだけ告げるのが精いっぱいだった。

「……いや。またスクーターをうちに置いていかせちゃったから、明日の朝また迎えに来るよ。それとも……あの彼に迎えに来てもらったほうがいいかな」

「！」

暁は名前こそ言わなかったが、それが誰のことを指しているのかは、いまの夕映には訊かなくてもわかることで……思いもしなかった言葉に、夕映の胸の奥が小さくツキン……と痛んだ。理由なんて、自分でもわからないのに。

「市原くんとは……そんな関係じゃありませんから」

そう答えたとたん、暁が驚いたような表情で勢いよく振り返ってきたので、夕映のほうに驚いてしまう。

「ほんとに……？」

どうして、暁がそんな反応を見せるのだろう。暁は、自分と市原が付き合ったほうが嬉しいのではなかったのか？

「市原くんことは、同じ警察官として尊敬はしていますけど、そんな個人的な感情なんて考えたこともありませんでしたし」

「そ、か……そうなんだ」

言いながら、暁は何だか複雑そうな表情を見せた。

「俺、てつきり……そうだよな、夕映ちゃんの気持ちが一番大事なんだもんな」

複雑そうなのは変わらないが、先刻よりは少し明るくなったような気がする瞳を見せながら、暁は再び前を向いた。

「じゃあ、明日はこないだと同じくらいの時間に迎えに来るよ。それでいいかな？」

「あ、はい。よろしくお願いします」

ぺこりと頭を下げると、暁はようやくいつもと変わらぬ笑顔を見せた。

「じゃあ俺はこれで。また明日」

「はい。お休みなさい、気をつけて帰ってくださいね」

微笑みながら告げると、暁は軽く片手を上げて、それからゆつくりと単車を発車させた。その広い背中の中の後ろ姿が、曲がり角を曲がって消えていくまで、夕映は自宅の前でそっと見守り続けた………。

S i d e 夕 映 ・ 7 (後 書 き)

夕映、ドツボにハマってしまったようです。
だけど、暁もドツボの仲間入り？
そして真に哀れなのは市原なり…？

Side 暁・7

「そ、そんなことはありませんっ!!」

いままで聞いたこともないような大きな声でほとんど叫ぶようにして夕映が答えた直後、夕映の顔がこれ以上ないというほどに赤く染まった。

「いまの…どういう…?」

真剣に彼女の意図がわからなくて、思わず聞き返したとたん、夕映は真つ赤な顔のままぶるぶると首を横に振って、やっとといった風に言葉を発した。

「わ…わたし、何言ってるんでしょうね……ごめんなさい、今日はもう帰ります!」

まるで、夕映自身にも自分の気持ちがわかっていないような反応に、そのまま別れたくなくて慌てて引き留めようとした目の前で、夕映の身体が突然後ろ向きに傾いた。

「きゃ…っ!」

「あぶねえっ!!」

とつさに両腕で支えて、その細い身体を抱き留める。以前抱き上げた時と同じく、相変わらず細い身体だった。

「あ…ありがとうございます……よく言われるんですけど、一見

そう見えないのに私って結構抜けてる、らしいんですね…」

半ば引きつったような笑顔で言う彼女の、いまにも泣きだしそうに見える瞳から目が離せなくなつて……気付いたら、みずからの胸の中に彼女を抱き締めていた。

え……俺、何やってんだ……？

自問しても答えは出ない。その間にも身体は勝手に動き続け、彼女からわずかに身を離して、その目をまっすぐに見つめる。遠くに見える街灯や走り過ぎる車のヘッドライトを頼りに、その綺麗な瞳をもう少し近くで見たくなくて、気付かないうちに顔を近づけていた。

「あき、らさ…？」

戸惑っているような細かい彼女の声が耳をつくが、自分でも何をしているのかわかつていないのだ、答えようがない。やがて、唇と唇が触れ合うまであと数ミリといったところで、突然聞こえてきた犬の大きな鳴き声に、これ以上ないというほどに驚いてしまう。

「——っ！！」

いま、自分は何をしようとしていた？ とつさに互いに身を離したところに、乱入してくるゴールデンレトリバー。

「…『ラルフ』？ よっしゃ、こっちこいつ！」

ぜいぜいと息を切らせて犬を追ってくる飼い主を見かねて、たっ
たいま知ったばかりの犬の名を呼ぶと、犬はとんでもなく嬉しそ
うな素振りを見せて、自分の胸に飛び込んできた。犬の扱いには慣れ
ているが、さすがにこんな大きな犬と触れ合ったことはなかったの
で、多少手こずったが何とか走るのをやめさせることはできた。そ
の後の怒涛の顔舐め攻撃にはまいってしまっただけだ。

もつ少して可愛い唇を堪能できるってとこだったのに、これかよっ

偽らざる本音は何か胸の中に隠しきって、飼い主の女性に犬の
リードを手渡す。犬はもう少し遊んでほしそうだったが、とりあえ
ずいまはもう勘弁してほしい。

「ほんとごめんなさいね、お邪魔しちゃって。それじゃラルフ、帰
りましょうね」

大型犬の扱いには慣れていないとはいえ、さすがに人生の先輩に
は、自分たちがどういう状況だったのか見抜かれていたようで、か
あつと顔が熱くなる。やはり年長者は侮れない。

「……帰るか。送ってく」

照れ隠しにそれだけ呟いて、絶対に彼女に顔を見せないようにし
て先に立って歩く。男として、また年上として、こんな醜態をさら

す訳にはいかない。彼女も恥ずかしいのだろう、ほとんど口をきかないままで自分の後に続いてくるのが気配でわかった。何とか赤面がおさまった顔に何でもないような表情を乗せて、最近ではほとんど彼女専用と化している予備のヘルメットを渡す。つい最近、何となく気まぐれでこちらをかぶった時に、彼女の髪から香るものと同じ、恐らくシャンプーの香りらしきものを感じ取って、まるで中高生男子のように一瞬胸を高鳴らせてしまった事実は絶対に誰にも言うつもりはない。

そんなことを考えていたから、いつものように彼女が自分の腰に控えめにつかまってきたのに気付いた時も、妙に意識してしまって平静を保つのが大変だった。異性に免疫のない少年でもあるまいに、自分はいつからこんなにウブになってしまったのか。心のどこかで自分自身を嘲笑う自分も確かに存在しているというのに……。

「送ってくださいって、ありがとうございます……」

「……いや。またスクーターをうちに置いていかせちゃったから、明日の朝また迎えに来るよ。それとも……あの彼に迎えに来てもらったほうがいいかな」

夕映の家の前で彼女を降ろした時、言葉少なに告げる彼女にそう答えたとたん、彼女の身体が一瞬動揺したかのように震えた気がした。

いまさら思い出すのもどうかと思うが、まっすぐな目をして夕映を好きだとはつきり言い切った彼に「できる限り早急に彼女を解放する」と約束したというのに、自分はいったい何をやっているのか。もしあの時邪魔が入らなかったら、好き合っているふたりに割り込

むような最低なことをしていたかも知れない。そんなことにならなくてよかったと思う反面、ふたりが仲睦まじく寄り添う姿を想像するだけで、胸の奥が痛みを訴えかけていた。理由など、自分にもわからないのに。

「市原くんとは…そんな関係じゃありませんから」

その言葉を聞いた瞬間、考えるより早く身体が反応して、即座に振り返ってしまったために驚きを隠せないような夕映の顔が視界に飛び込んできた。

「ほんとに…？」

やはり自覚がないままに、言葉を紡いでいた。

「市原くんことは、同じ警察官として尊敬はしていますけど、そんな個人的な感情なんて考えたこともありませんでしたし」

「そ、か……そうなんだ」

市原に同情を感じながらも、目の前に立ち込めていた霧が一瞬晴れた気がした。そうだ。市原の気持ちにばかり感情移入していたが、彼がどんなに彼女を想っていたとしても、それに応えるつもりが彼女になれば、仕方がないのだ。もちろん、その気がない夕映に無理に市原と付き合わせるつもりなど、暁にはなくて……。

「俺、てつきり……そうだよな、夕映ちゃんの気持ちが一番大事なんだもんな」

基本的なことを忘れていた自分に、思わず苦笑いを浮かべる。何

よりも初歩的なことなのに、自分はどうしてそんなことに気付けなかったのか。不思議そうな表情を浮かべてこちらを見ている夕映と、明朝の約束をとりつけてから、いつものように簡単な別れの言葉を交わして暁は帰途につく。

住宅街から抜けて大きめの道に出るにつれて加速していくバイクと共に、暁の心の全体を覆っていた厚い雲が、風に押し流されていくように徐々に消え去っていった……差し込んでくる陽の光——
——実際の時間は夜だから、単なる比喻表現のようなものだが——
——が暁の全身をまんべんなく照らし、辺りに立ち込めていた霧さえもすべて消し去ってくれたような気さえしてくる。市原に遠慮しないでいいとわかった瞬間に訪れた己の心の変化に、さすがの暁もその真相に気付いて……ずっと自分の中で燻っていた謎のわだかまりの正体を、たったいま完全に自覚した。

そうだ……俺は、彼女が好きだったんだ——多分、初めて逢った頃から。だから、苛立ちながらも放っておけなかったし、恋人役を頼んだのもどこかでそれを望んでいたからで……彼女を泣かせた真由香を許せないと思ったのも……それが理由だったから。

何ということだ、気がつけば何てことはない。自分の行動のひとつひとつの理由が簡単に解き明かされていくことに、快感さえ覚える。

自覚してしまえば、後は早い。いつ彼女に偽りの恋人関係の終焉を持ちかけようかと思っていたが、そんな気は一瞬にして霧散した。

代わりに浮かんでくるのは、独占欲。市原がどれほど彼女を想つていようと、夕映本人にその気がない限り、渡すつもりなどまったくない。心を占めるのは、武者震いを伴った高揚感。これまで市原に対して抱いていた後ろめたさなど、いまはもう心のどこにも存在しない。彼に対してフェアではない、とたしなめる声もどこからか聞こえてはくるが、夕映といまの関係になった時には市原の存在すら知らず、暁本人でさえ自分の気持ちに気付く前のことだったのだから、悪いとは思うがいまさら関係を解消するつもりもなく、むしろラッキーだったとまで思ってしまったている。何しろ相手は夕映と同じ職場で働く人間なのだ、もしも何もない状態で同じ時に互いに彼女への想いを自覚していたら、不利だったのは暁のほうだったに違いないだろう。

そしていまは、彼より早く夕映に近付けている事実にはホッとしている。夕映に嫌がられない限り、暁のほうから夕映を手放す気はないし、市原に遠慮するつもりもない。けれど、そのままではいられるほど暁の性根も曲がっている訳でもなく、アパートに帰り着いて入浴も済ませ、後は寝るだけという落ち着いたスタイルにまで持つていつてから、携帯のアドレス帳からかけ慣れた相手の名前を呼び出して、オンフックボタンを押す。コール二回ほどで相手が出た。

「ああ、トオルくんか？　ちょっと話があるんだけど、いま大丈夫かな？」

相手の了承を得てから、暁は一度深呼吸してから、ゆっくりと話し始めた……………。

*

*

*

そして、翌朝。いつもと同じように、天原署の裏手で夕映を降ろして笑顔で別れた後、そのまま正面の入口の近くへと歩いて回り、見覚えのある二輪が走ってくるのを待つ。自分の仕事が始まる時間まではもう少し余裕があるから、もしも会えるなら決心が固いままのうちに会っておきたかったのだ。

やがて、10分ほど待った後に先日目の当たりにした二輪が走ってくるのを遠目に発見し、相手が近付くにつれてよく見えるようにその場で片手を大きく振って合図する。視力には自信があるから、あの二輪とヘルメット、そして運転者の体格は間違っではないはずだ。そんな暁に気付いたのか、署の敷地内に入ろうとしていたらしい相手は、そちらにウインカーを出すこともせず、暁のそばに寄ってきて片足をついて走行を止める。

「……早坂、さん？　こんな朝っぱらからどうしたんすか」

「…悪いな。ちつとだけ…5分ぐらいで済むと思うから、ちつとだけ時間をもらえねえかな」

暁の真剣な眼差しから何かを感じ取ったのか、市原はそれ以上訊こうとはせず、エンジンを切った二輪を押したまま、暁の誘導に従って署の裏手に回る。

「で、何スカ？　何か話があるんでしょう？」

さすがに市原は察しが早い。

「以前さ。俺、早急に彼女を解放するって言っただろ。悪いけどあれ撤回する」

市原の片眉が怪訝そうに上がるが、決して目をそらさないままで続ける。

「彼女本人がやめたいって言わない限り、俺からは絶対に彼女を手放さない。もちろん彼女の意思はこれから確かめるけど、たとえば偽装から始まった関係でも、俺は絶対に別れようとは言わない。彼女が俺を男として見れないってんなら男らしく諦めるけど、それ以外の理由でなんか絶対彼女の元から離れねえから」

決意のままに、一気に言い切る。昨夜、迷いながら、そして言葉を選びながら達に告げた内容そのままの言葉を。

「それは、つまり……」

市原の瞳も真剣そのものだ。

「宣戦布告、ととってもいいってことっすね？」

「ああ。俺は、彼女が好きだ。多分…初めて逢った頃から――

――」

既に自覚した想いでも、内心や電話越しでなく他人を目の前にして言うのがこんなに恥ずかしいとは、当の暁も思っていなかった。けれど、自分の口からちゃんと言わなければならぬこともあると、暁はわかっていたから。赤面しそうになるのを懸命にこらえて、市

原の顔をまっすぐに見据えて言い切った。

「……わかりました。彼女のどこを、なんて野暮なことは訊きませんよ、俺だって同じ穴の貉だし。だいたい初めに嫉妬に狂ってみつともねえことしちゃったのは、俺のほうですからね、その結果そちらに火をつけちゃったと思えば、前言撤回されても責めることはできねえってもんで」

自嘲気味にため息をつきながら、市原はみずからの頭をぽり…とかく。

「ただし」

それまでとは違う真剣極まりない声に、暁の身体が一瞬震える。

「こっから先は、正々堂々、彼女の気持ちを最優先でお願いしますよ」

「それは望むところだ」

暁とて、力づくで女性をどうこうしようと思うほどクズでもないし、情けない話だが、武芸に秀でた彼女をヤンキーに毛が生えた程度の自分ごとときがどうにかできるとも思っていない。そして何より、彼女には自分自身の意思で、市原ではなく暁を選んでほしかったから――。

「とりあえずいまは、俺の気持ちを彼女に伝えることから始めようと思う。そっちは伝えてあるのにこっちは伝えてないなんて、フェアじゃないからな。って、俺が言えた義理じゃねえけども」

「…いや。それは当然の権利だと思いますよ。一見そっちにアドバンテージがあるように見えるけど、実際には既成事実は何もないんだし。なら、同じ職場で毎日会える俺のほうが有利ともいえるでしょう」

「既成事実——」

暁の脳裏に、つい昨夜の出来事がよみがえって、不覚にも顔がにやけそうになって懸命に抑えた、が、時既に遅く市原には気付かれてしまったようだ。市原の顔が、みるみる険しくなっていく。

「まさか、もう手出ししちまったとか言うんじゃないでしょうね！？」

「してないしてないっ 危なかったけど、まだ何もしてないっ！」

言わなくてもいいのに正直にそこまで言ってしまった自分に、後になってから暁自身「バカだ」という感想しか抱けなかったが、市原にはかえってそれがよかったようで、怒り狂う鬼のような形相になりかけていた市原の顔が、あっという間に平静なそれに戻る。

「…まあ、同じ男として、気持ちはわからんでもないですけどね。これからはマジで、彼女の気持ちを確かめるまでは抜け駆けなしで頼みますよ」

「それは重々わかってるさ」

暁とて、彼女の気持ちを無視して突っ走るつもりなど毛頭ない。

「それじゃ、俺はそろそろ行きます。そっちが気持ちを伝える前に、

少しでも点数かせいどかないとね」

半ば冗談ばく言っではいるが、それは市原の本音そのものだろう。暁という、本物の——というのも何だか変な言い方だが——恋敵を得て、焦り始めたのがその瞳からありありと見てとれる。

「なあに、アドバンテージはいまのここっちにあるんだ、さっさと気持ちを伝えて、あっという間にぶっちぎってやるさ」

こちらも冗談めかして返すと、市原の瞳が不敵に輝いた気がした。

「ここからがほんとうのスタートラインってことで」

「ああ。どっちが先にチェッカーフラッグを受けるか、競争だな」

「それと、勝利の女神を手にするか、ですね」

市原が差し出してきた右手を握って、固く握手を交わす。

「できれば彼女には、レースクイーンのカッコしてゴールで待ってほしいとこだけど、絶対やってくんないだろうしなあ」

そう暁がにやけた顔で呟いた瞬間、市原の手にグッツと力がこもった。

「痛てててててっ！ 冗談っ 冗談だつての！」

放された手にふうふうと息を吹きかけていた暁に、かけられる声。

「それじゃ。これから、よろしく頼みますよ、『暁さん』」

「ああ。おてやわらかに頼むぜ、えーっと…」

「希。^{のぞむ}市原希っス」

「『希くん』」

そうして、男二人は恋敵同士とは思えないほどの爽やかな笑顔を交わして、それぞれの職場へと去っていった……………。

S i d e 暁・7 (後書き)

ついに暁の自覚&宣戦布告。

夕映は、このタイプの違う二人の男のどちらを選ぶのか？

Side 夕映・8

終業後、帰り支度を済ませた夕映は、駐輪場に向かう貴絵につきあつてそちらへと共に歩いていった。

「今日はトオルちゃんと会うの？」

「うん。貴重なバイト休みの日だもん♪ 満喫しなきゃ」

「勉強も忙しそうなものねえ。やっぱり検事や弁護士になるのって大変なのね」

「んー、でも、昔からの夢だっていうし。頑張ってる人見るとやっぱり応援したくなっちゃうじゃない？」

「それはわかる気がするわ。よろしく言うておいてね」

「うん。夕映も、今日は暁さんのところ寄つてくの？」

「うん。またスクーター置いていっちゃったし、取りに行かなきゃ…って、何よ、その顔はっ」

貴絵はまたしても意味深なニマニマ顔だ。

「えー？ そつちも仲良くやってるんだなあって思っただけよー」

「それだけじゃないでしょっ 何か別のことも考えてたでしょっ」

「別に考えてないわよう、夕映ったら、何考えたのよー？」

今度は、夕映が言葉に詰まる番だった。やはり、恋愛方面では貴絵にはかなわない。

「何も考えてないわよっ ほら、トオルくん待ってるんでしょ、さっさと行っただけなさいよっっ」

「はいはい、そっちこそ暁さんによろしくねー」

楽しそうに言いながら、貴絵は早々に去っていつてしまった。見送った体勢のままバッグから携帯を出して、もう何度もやりとりをしている相手のメールアドレスを呼び出して、簡潔にメールを打つ。

『仕事が終わりましたので、これからそちらに向かいます。夕映』

さて、と小さく呟きながら携帯をしまつて歩きだしたところで、マナーモードにしたままだった携帯がブルブルと震えたので、驚いてしまった。いままで、こんな時に返事が来たことなどなかったのに。受信メールを開いてみると、自分に負けないほど簡潔な返事。

『了解。気をつけて来いな』

正直、10分か15分の道のりでは、気をつける間もなく着いてしまう気もするのだが……深く気にしないことにして、再び歩きだそうとした、まさにその瞬間。

「有川、今日はあの店に寄ってくのか？」

すぐ後ろから聞こえてきた声に、驚いて身を震わせてしまう。まさか、そんな真後ろに誰かが来ているとは思わなかったのだ。

「あ……ごめん、驚かすつもりはなかったんだけど。山下との会話であの人の名前が出てたから」

振り返ると、そこに立っていたのはヘルメットをかぶった市原。そういえば、市原も暁とは一応面識があったのだとすぐに思い出す。

「あ、うん……」

「そ、か。『暁さん』によろしくな」

「え……？」

夕映が聞き返す間もなく、市原はエンジンをかけておいたらしい自分の二輪にまたがって、軽く手を振ってから去っていつてしまった。残された夕映の頭の中でぐるぐると回るのは、「どうして？」という疑問符の嵐。何ゆえ市原までも暁に「よろしく」する必要があるのだ？ 市原からしたら、暁は夕映を縛り付けている諸悪の根源ではなかったのだろうか。首をかしげながら歩いているうちに、あつという間に暁の職場兼実家に着いてしまった。店舗の中をちらと見ても、中に誰かが居る気配はない——店舗の入り口にはセンサーがついているから、誰かが店内に入れば奥にいてもわかるようになっているので、短時間なら席を外しても大丈夫と以前聞いたことがあるのだ。となると、暁が居るのはガレージだろうか？ そのまま歩みを止めず、ガレージまで直行する。

「こんにちはー…」

言いながら、勝手知ったる様子で中へと入っていく。すると、腰を下ろして見慣れたスクーターをいじっていたらしい暁が、ふと顔を上げた。

「よっ　らっしやい」

「なに…してるんですか？」

「ん？　ちよつと手が空いてたから、簡単に点検をな。んでもほとんど異常なかったから安心したよ。外側も綺麗なまんまだし、大事に乗ってくれてるんだな、サンキュ」

「な…何言ってるんですか。買う前は、さんざんひとのことを『ト口そう』とか言ってくれたくせに」

忘れたとは言わせない。夕映にとっては、結構傷つく言葉の羅列だったのだ。

「悪かったと思ってるよ。初めはまさか、あんなアクティブなコだとは思ってなかったからさ。そもそも最初の出逢いだって、ナンパにつかまってるそこだったし」

「あ、あれは…！」

「しかも、助けたのに『サイテー』呼ばわりだもんなー。俺さまの小鳥のようなハートはスタスタだぜ」

まるで傷ついてもいないような笑顔で、暁はみずからの胸に軍手を外した両手を当てる。

「だ…誰が小鳥ですか、図々しい。私だって、あの時は悪いことをしたと思ってるんですからっ」

「それが、トオルくんの彼女の友達だったなんてなー。世の中狭いよな」

「ほんとに…」

それは、確かにそうだ。夕映だって、貴絵に強引に連れてこられなかったら、一生暁と和解できなかったかも知れない。そう思うと、ほんとうによかったと思う。お互いに誤解したまま、一生を終えなくて済んで。

「夕映ちゃんと初めて逢ったのが三月で、四、五、六……ちょうど三カ月半か？ 早いよなあ」

暁が何を言いたいのか、微妙にわからなくて夕映が首を傾げた瞬間、あちらを向いていた暁がゆっくりとこちらを振り返った。そのことなく真剣な眼差しに、夕映の胸が一瞬高鳴る。

「……その間にいろいろとあつてさ。ふりだけど、彼氏彼女の関係にまでなっちまってさ。初めて逢った頃の俺らが見たら、目えむくんじゃね？」

ほんとうに楽しそうに笑う暁につられて笑ってしまっけれど、やはり暁の言いたいことはわからない。

「俺、さ。最近ずっと考えてたんだよな、その…例のふり。いつやめようかなって」

「え……」

それは、暁自身がもうやめたいと思っているということだろうか。暁がそう言うならそれでもいいかなと思ったところで、ふと感じる一抹の寂しさ。たとえ偽りのものとはいえ、彼氏がいるという状況が意外に心地よかったということだろうか。それとも…相手が暁だったから？ 考えてもわからない。

「希くん…あ、市原くんのことな」

『希くん』？ 市原といい暁といい、いったいいつの間にそんなに仲良くなったのだろう？

「彼にも言われたんだよな、『いつまで彼女の優しさにつけ込んでるつもりだ』って」

夕映自身はそんな風に思ったことはなかったけれど……その後の暁の「まあ彼の場合は、わかりやすい嫉妬心つてのが裏にあったかなんだけどな」という言葉に、夕映の頬がかあつと熱くなる。そうだ。市原には以前告白されていたのだった。昨日の一件——言わずと知れた、暁とのキス未遂事件だが——のおかげですっかり忘れていたけれど。

「でもって、俺の出した結論だけど。夕映ちゃん？」

「は、はいっ!？」

突然名を呼ばれて、驚いて素っ頓狂な声を出してしまつて、よい恥ずかしくなつてしまう。

「俺は、絶対に『別れよう』とは言わねえから。夕映ちゃんが本気で付き合つのに俺みたいのはパスつてんなら、男らしく諦めるけど……もしそうでなかったら。諺にもあるだろ、嘘から出たまことつて。できたらそうしたいと……俺は思つてる」

「え？」

言っている意味がよくわからなくて、夕映は思いきり首をかしげてしまった。すると暁は、「あー、そうだよなー」とみずからの頭をぽりぽりとかいた。

「希くんは同じ立場だから、すぐわかつたんだな。しくじつたなー」

「え？ え？ え？」

ますます意味がわからない。すると暁は、夕映に向かってずいっと歩を進めてきたので、驚いて後ずさりしてしまうが、そうするとその分暁も近付いてくるので、ついに壁にぶつかってしまった夕映の首の両脇に伸ばされる、暁の腕。壁につかれたその手に、逃げ場を失つたことを悟つた夕映の眼前に、またしても迫ってくる暁の真剣な顔。

「あ、あのっ」

昨夜の出来事が脳裏にフラッシュバックして、頬がこれ以上ないというほどに熱くなつていく。まさか、こんなところでこんな明るいうちに行動に出てこられるなんて、思つてもみなかったのだ。両

手が震えて、胸元で抱えていたバッグが落ちる。夕映の内心は、もうこれ以上ないというほどにパニック状態だ。いくら武道の有段者とはいえ、純粹に力の強さでいったら男にかなうはずもないし、何よりこの至近距離だ、仮に暁が実力行使に出たとしたら、逃げきれかどうか自信がない。本能的に、恐怖心が芽生え始める。

そんな夕映に気付いたのか、暁の表情がふっつと和らいで。どことなく自嘲的に見える笑みを浮かべてから、優しく微笑んでみせた。

「んなびびんなくなたっていいって。何もしねーから。希くんとも約束しちゃったしな」

「え……」

「ほんとに男に免疫ないんだな！。何となくわかってたけど」

「な……」

からかわれたのかと思った瞬間、夕映の頭にかつと血が上りかけた。

「——好きだ」

まっすぐに夕映の瞳を見つめて、はっきりと告げる声。一瞬、何を言われたのかわからなかった。いま……暁は何と言った？

「え——？」

思考が止まり、ほとんど無意識に聞き返した夕映の耳に、再び届

く凜とした声。

「もう一度言っぞ。好きだ」

…好き？ 誰が誰を？

「まだ通じてないのか？ 俺は、夕映ちゃんが……」

「ももももも、もういです、わかりましたっ！！」

言葉の意味は通じたものの、今度は暁の心情が理解できない。いつから？ 自分のどこを？ そして何故、いまそれを告げる！？

「わはは、夕映ちゃん、顔真っ赤」

楽しそうな、暁の声と表情。

「かつ からかったんですか！？」

すると暁は、心外だと言いたそうな顔で夕映をまっすぐに見つめてきた。

「いや？ 俺はいつでもめちゃくちゃマジだけど？ マジじゃなかったら、昨夜みたいにキスなんかしようと思わないって。まあぶっちゃけちまうと、自覚したのはあのキス未遂の直後だけどさ」

彼には「恥ずかしい」という感情は存在しないのか？ まるで涼しい顔をして……夕映のほうは、もういまにもオーバーヒートしそうだというのに。

「きゃーっ　きゃーっ　もういいです、もう言わなくていいですっ
！」

両耳をふさいで、しゃがみ込む。とてもではないが、もう聞いて
いられなかったのだ。

「いやまさか俺も、こんなことになるとは思ってなかったんだけど
さ。好きになっちまったもんは仕方ねえよなあ。てな訳で、俺から
は絶対『別れよう』なんて言わねえから。たとえ偽装だって、恋人
は恋人だもんな、他の男に渡したくねえし。夕映ちゃんがどうして
も俺みたいのときあうのは嫌だってんなら、すっげー嫌だけど別
れることに同意する。しつこくして友達ですらいられなくなるのは
もつと嫌だし。希くんのが好きだってんなら、ほんとはしたくねえ
けど、祝福もする。もつとも、どっちも嫌だって言われたら、俺ら
二人とも立つ瀬がねえけどさー」

夕映に合わせてしゃがみ込みながら、暁は「たはは…」と笑いな
がら告げる。その、いつもとは違う自信のなさげな表情と口調が、
彼の言っていることが真実だと告げている気がして、夕映はいまさ
らながらにみずからの胸の鼓動がけたたましく自己主張し始めたこ
とに気がついた。

暁さんが……私のことを好き？　嘘でしょう！？　その前に市原
くんもそんなこと言ってて……嘘よね！？　二人して共謀して、私
のこと騙そうとしてるんだわ！！

いままでまともに恋愛をしたことがない夕映には、当然の杞憂であつた。

「あつ わかりましたっ 市原くんと結託して、私のことひっかけようとしてるんでしょっ エイプリルフルはとづくに過ぎましたよ、いくら私だって、そんなのにそうそうひっかかりませんからっ
っ」

自分でもほとんど何を言っているのかわからなくなってきた頃、暁ががくんとうなだれて。力ない笑顔を浮かべて、夕映に向かつてそつと腕を伸ばして……軽く引つ張られて、互いに両膝をついたまま、ぎゅ……と抱き締められる。パニック状態再び、だ。

「……あのなあ。いくら俺だって、そこまで性格悪くねえぞ？ こんなこと冗談で言えるかよ。抜け駆けなしって希くんと約束したけど、変に誤解されてるほうが彼も困るだろうから、許してくれるだろ」

「あああああのっ」

慌てふためく夕映の耳元で、優しくささやかれる声。

「ほら。俺の胸、触って確認してみな？ 惚れてもない女にこんなことして、こんなに鼓動が早くなると思つか？」

強引に手を胸に持っていていかれて、暁の心臓の鼓動を確認すると同時に、夕映の鼓動もまたもや早まって、パニックも既に飽和状態だ。

「わわわわわ、わかりましたっ もう疑いませんっっ」

だから、その手を離して――。

ほとんど泣きそうな声になって懇願すると、ようやく暁は夕映を解放してくれて、ゆっくりと立ち上がる。夕映は、その場でへたり込んだままなかなか立てそうにない。身体からすっかり力が抜けて、しばらくは足を動かすこともできなさそうなのだ。

「大丈夫か？」

「だ、大丈夫ですっつ」

暁は手を貸してくれようとしたが、いまだにパニックから抜け出せなくて、ジーンズに包まれた腿の上でぎゅ…と両手を握る。暁に触られたくないとかそういうことではなく、いまはとにかくそつとしておいてほしかったのだ。暁にもその思いは通じたのか、見守るように微笑みながら、近くの堅そうな箱に腰を下ろした。

「……ま。返事は急がねえから、俺らのことマジで考えてみてくんねえかな。俺も希くんも、気長に待つ覚悟はできてるからさ」

暁にそう言われたことは、夕映にとって幸運なことだった。もしも「いますぐ答えを出せ」なんて言われていたら、この時点で既に許容量をとくに超えていた夕映の頭は、完全にオーバーヒートを起こして発熱でもしかねないほどだったから。

それから少ししてから、ようやく立ち上がれるようになった夕映は、簡単に挨拶を交わしてからゆっくりと帰途へとついた……。

*

*

*

次の日の夕映は、もう散々だった。内勤であつたがために、書類の処理や資料の整理、来客へのお茶出しなどを行つていたのだが、そのどれもがもうミスの連発で、見かねた先輩に他課へのお遣いに追いやられてしまった。

いくら衝撃的な出来事があつたからといって、仕事でミスをしていい理由にはならない。自分で自分が嫌になつてしまつて、お遣いの帰りに廊下を歩いていたら夕映は、深い深いため息をついた。そんな時だった。

「いつてーな、離せよ、てめっ！」

「いい加減におとなしくしろっ！」

補導されてきたらしい少年たちが暴れるのを抑え込んでいる、少年課の署員たちとすれ違ったその瞬間、それは起こつた。

「離せつてんだよっ!!」

みずからの腕を掴んでいた相手の腕を振り払つた少年の拳が、たまたまずぐ脇にいた夕映の肩に思いきりぶつかったのだ。そして、バランスを崩した夕映のすぐそばにあつたのは、階下へと続く十数段の階段で……。一瞬、自分の身に何が起こつたのか理解しきれない夕映の耳に届くのは、近くにいた婦警の悲鳴や男性の怒号。何もかもがスローモーションのように感じる中、まるで無重力空間を漂うかのような感覚——実際に体験したことはないのだが——を味わいつつも確実に落下していく夕映の身体を包んだのは、大きく温かな何か。

その直後、続いてその身を襲うのは、衝撃と派手な音。立て続け

に起こるそれがようやくおさまった時、まず気がついたのは全身から訴えかけてくるわずかな痛み。

え……どうして…？ 私、結構な高さから落ちたわよね？ それでどうしてこれくらいの痛みで済んでるの…？

その謎は、すぐに解けた。夕映の身体をきつく締めつけていた何かの拘束が緩むと同時に、耳元で「痛てて…」と呟く声が聞こえてきたから。とっさに瞑ってしまっていた目を開けた夕映の瞳に飛び込んだきたのは、恐らくは痛みのために表情を歪めている市原の顔で……。

「——市原、くん…？」

その声に気付いたらしい市原が、はじかれたように目を開けた。

「あつ 有川、大丈夫か！？ どこか痛いところはないかっ!？」

慌てたように起き上がって市原が問ってくるのに、同じように起き上がった夕映は、首を横に振り続けることしかできない。

「わ、私は大丈夫……ところどころ、ちょっとだけ痛むだけ」

それを聞いたとたん、市原の顔から完全に緊張感が消え去って、心の底から安心したような笑顔を見せた。

「なら、いいんだ……あー、よかった…」

「よくねーよ、バカっ てめーが血いダラダラ流しながら笑ってん
じゃねえっ!!」

駆けつけてきた先輩署員が市原に向かって怒鳴りつけるのを聞いた瞬間、夕映もようやく市原の額から流れる一筋の鮮血に気付いて……。

「市原くんっ 血、血が!」

「え? こんなの大したことねーよー」

「カツコつけてる場合か、バカたれっ! 医者だ、医者!」

「有川さんも、念のため診てもらいましょ」

先輩たちに促されて立ち上がった後——市原はさすがに男性署員二人に脇から抱え上げられての、いわゆる「捕まった宇宙人」状態での連行であるが——夕映と市原は病院へと連れていかれて、医師の診察を受けることとなった。

夕映は市原が庇ってくれたおかげで軽い打撲と擦り傷程度で済んだのだが、さすがに頭を打ったらしい市原の検査や診察は長くかかり、備え付けのソファに付き添いの先輩と共に腰を下ろして待っていた夕映の思考を占めるのは、自分のことなど微塵も考えていないような、ほんとうに夕映のことだけを心配して、夕映の無事を喜んでくれた市原の笑顔。

やがてそれは、ふいによみがえってきた「返事は急がない」と告げた暁の笑顔と交互に脳裏をよぎって、夕映はもう、どうしていいかわからなくなってしまった……………。

S i d e 夕 映 ・ 8 (後 書 き)

どんだんドツボにハマっていく夕映。最後に勝つのは、さあどっち
でしょう…。

…どっちも残らなかったりして(笑)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9427v/>

それでも朝(あした)はきつとくるから

2011年11月27日21時55分発行